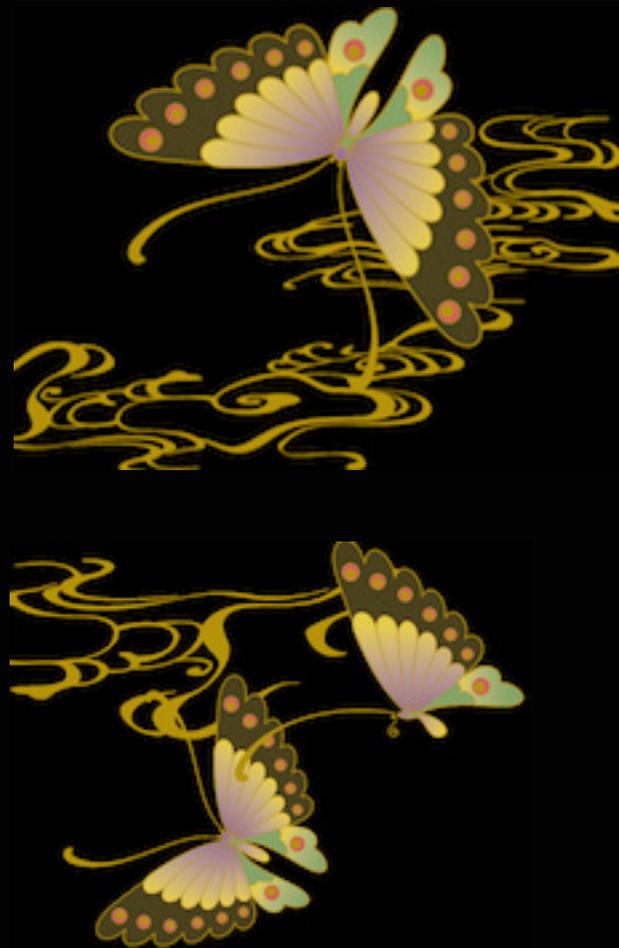




風姿花伝

電子書籍



能楽囃子「村雨留」

目次へ

電子書籍操作ガイド

風姿花伝 目次

序

序

風姿花伝第一

年来稽古条々

七歳

十二、三より

十七、八より

二十四五

三十四五

四十四五

五十有余

風姿花伝第二

物学条々

序

女

老人

直面



物狂

法師

修羅

神

鬼

唐事

結び

風姿花伝第三 問答条々

第一問答 そもそも申樂を始むるに

第二問答 能に、序・破・急をば

第三問答 申樂の勝負の立合の手立は

第四問答 これに大きな不審あり

第五問答 能に得手得手とて

第六問答 能に位の差別を知る事は

第七問答 文字に当たる風情とは

第八問答 「しほれたる」と申す事あり

第九問答 能に花を知る事

奥書

風姿花伝第四 神儀に云はく

申樂神代の始まり

仏在所には

日本国においては

平の都にしては

当代において

申樂座名

奥義に云はく

そもそも、風姿花伝の条々

およそ、この道、和州・江州において

されば、ただ、人ごとに

およそ、能の名望を得る事

秘儀に云はく

およそ、今の条々工夫は

およそ、花伝の中

花伝第六 花修に云はく

能の本を書く事

作者の思ひ分くべき事あり

能に、強き・幽玄・弱き・荒きを知る事

能の善き・悪しきにつけて

花伝第七 別紙口伝

この口伝に、花を知る事

細かなる口伝に云はく

物まねに、似せぬ位あるべし

能に十体を得べき事

能に、万用心を持つべき事

秘する花を知る事

因果の花を知る事

そもそも因果とて

跋文

会社情報とお問い合わせ



序



前頁

次頁

目次へ

それ、申樂延年の事わざ、その源を尋ぬるに、あるいは仏在所より起り、あるいは神代より伝はるといへども、時移り、代隔たりぬれば、その風を学ぶ力、及びがたし。近頃万人のもてあそぶ所は、推古天皇の御宇に、聖徳太子、秦河勝に仰せて、かつは天下安全のため、かつは諸人快樂のため、六十六番の遊宴をなして、申樂と号せしよりこのかた、代々の人、風月の景を借つて、この遊びの中だちとせり。その後、かの河勝の遠孫、この芸を相継ぎて、春日・日吉の神職たり。よつて、和州・江州の輩、両社の神事に従ふ事、今に盛んなり。

現代文表示

語句解説

序

朗読音声

されば、古きを学び、新しきを賞する中にも、全く風流を邪にする事なかれ。ただ、言葉卑しからずして、姿幽玄ならんを、享けたる達人とは申すべきをや。

まづ、この道に至らんと思はん者は、非道を行ずべからず。ただし、歌道は風月延年の飾りなれば、もつともこれを用ふべし。

およそ、若年よりこのかた、見聞き及ぶ所の稽古の条々、大概注し置く所なり。

一、好色、博奕、大酒、三重戒、これ古人の掟なり。

一、稽古は強かれ、情識はなかれ、となり。

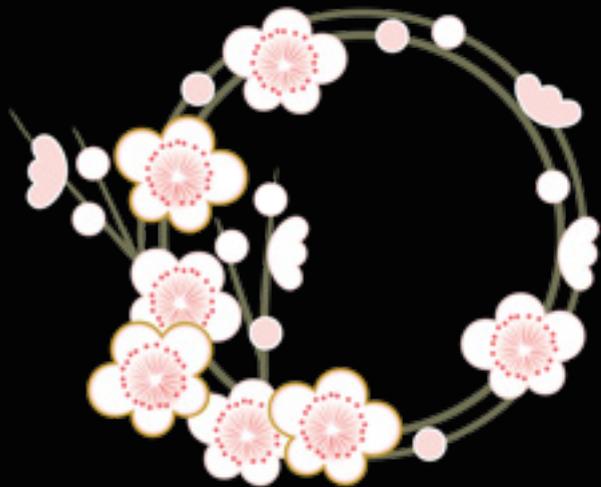


次頁

風姿花伝第一

年来稽古条々

目次へ



前頁

七歳

一、この芸において、大方七歳を以て初めとす。この頃の能の稽古、かならず、その者自然とし出だす事に、得たる風体あるべし。舞・はたらきの間、音曲、もしくは怒れる事など、にてもあれ、ふとし出ださんかかりを、うちまかせて、心のままにせさすべし。さのみに「よき」「悪しき」とは教ふべからず。あまりにいたく諫むれば、童は氣を失ひて、能物ぐさくなりたぢぬれば、やがて能は止まるなり。ただ、音曲・はたらき・舞などならではせさすべからず。さのみの物まねは、たとひすべくとも、教ふまじきなり。

大場などの脇の申樂には立つべからず。
三番・四番の、時分のよからんずるに、
得たらん風体をせさすべし。

十二、三より

この年の頃よりは、はや、やうやう
声も調子にかかり、能も心づく頃なれ
ば、次第次第に物数をも教ふべし。

まづ、童形なれば、何としたるも
幽玄なり。声も立つ頃なり。二つの
便りあれば、悪き事は隠れ、よき事
はいよいよ花めけり。

大方、児の申樂に、さのみに細か
なる物まねなどはせさすべからず。
当座も似合はず、能も上がらぬ相な
り。ただし、堪能になりぬれば、何
としたるもよかるべし。児といひ、
声といひ、しかも上手ならば、何か
は悪かるべき。

さりながら、この花はまことの花にはあらず。ただ時分の花なり。されば、この時分の稽古、すべてすべて易きなり。さるほどに、一期の能の定めにはなるまじきなり。

この頃の稽古、易き所を花に当てて、態をば大事にすべし。はたらきをも確やかに、音曲をも文字にさはさはと当たり、舞をも手を定めて、大事にして稽古すべし。

十七、八より

この頃はまた、あまりの大事にて、稽古多からず。まづ、声変りぬれば、第一の花失せたり。体も腰高になれば、ばかり失せて、過ぎし頃の、声も盛りに、花やかに、易かりし時分の移りに、手立はたと変わりぬれば、気を失ふ。結句、見物衆もをかしげなる気色見えぬれば、恥かしさと申し、かれこれ、ここに退屈するなり。この頃の稽古には、ただ、指をさして人に笑はるとも、それをばかへりみず、内にては、声の届かんずる調子にて、宵・暁の声を使ひ、心中には願力を起こして、一期の境ここ

なりと、生涯にかけて能を捨てぬより外は、稽古あるべからず。ここに捨つれば、そのまま能は止まるべし。

総じて、調子は声によるといへども、黄鐘・盤渉を以て用ふべし。調子にさのみかかれば、身形に癖出で来るものなり。また、声も年寄りて損ずる相なり。

二十四、五

この頃、一期の芸能の定まる初めなり。さるほどに、稽古の境なり。声もすでに直り、体も定まる時分なり。されば、この道に二つの果報あり。声と身形なり。これ二つは、この時分に定まるなり。年盛りに向かふ芸能の生ずる所なり。

さるほどに、よそ目にも、すは、上手出で来たりとて、人も目に立つるなり。もと名人などなれども、当座の花にめづらしくして、立合勝負にも一旦勝つ時は、人も思ひ上げ、主も上手と思ひ染むるなり。これ、かへすがへす主のため仇なり。これもまことの花

にはあらず。年の盛りと、見る人の一旦の心のめづらしき花なり。まことの目利きは見分くべし。

この頃の花こそ初心と申す頃なるを、極めたる様に主の思ひて、はや申樂に側みたる輪説をし、至りたる風体をする事、あさましき事なり。

たとひ、人も褒め、名人などに勝つとも、これは一旦めづらしき花なりと思ひ悟りて、いよいよ物まねをも直にし定め、名を得たらん人に事を細かに問ひて、稽古をいや増しにすべし。されば、時分の花をまことの花と知る心が、真実の花になほ遠ざかる心なり。ただ、人ごとに、この

時分の花に迷ひて、やがて花の失するをも知らず。初心と申すはこの頃の事なり。

一、公案して思ふべし。我が位の程をよくよく心得ぬれば、その程の花は一期失せず。位より上の上手と思へば、もとありつる位の花も失するなり。よくよく心得べし。

三十四、五

この頃の能、盛りの極めなり。ここに、この条々を究め悟りて、堪能になれば、定めて天下に許され、名望を得つべし。もし、この時分に、天下の許されも不足に、名望も思ふ程もなくば、いかなる上手なりとも、未だまことの花を極めぬ為手と知るべし。もし極めずば、四十より能は下るべし。それ、後の証拠なるべし。さるほどに、上るは三十四五までの頃、下るは四十以来なり。かへすがへす、この頃天下の許されを得ずば、能を極めたると思ふべからず。ここに、なほ慎むべし。この頃は、

過ぎし方をも覚え、また行く先の手立てをも覚る時分なり。この頃極めずば、この後天下の許されを得ん事、かへすがへす難かるべし。

四十四、五

この頃よりは、能の手立て、大方
変わるべし。たとひ、天下に許され、
能に得法したりとも、それにつけて
も、よき脇の為手を持つべし。能は
下がらねども、力なく、やうやう年
たけ行けば、身の花も、よそ目の花
も失する也。まづ、すぐれたらん美
男は知らず、よき程の人も、直面の
申樂は、年寄りては見られぬものなり。
さるほどに、この一方は欠けたり。
この頃よりは、さのみに細かなる
物まねをばすまじきなり。大方似合
ひたる風体を、やすやすと、骨を
折らで、脇の為手に花を持たせて、

あひしらひの様に、少な少なとすべし。たとひ脇の為手なからんにつけても、いよいよ細かに身を砕く能をばすまじきなり。何としても、よそめ花なし。

もし、この頃まで失せざらん花こそ、まことの花にてはあるべけれ。それは、五十近くまで失せざらむ花を持ちたる為手ならば、四十以前に天下の名望を得つべし。たとひ天下の許されを得たる為手なりとも、さやうの上手は、ことに我が身を知るべければ、なほなほ脇の為手をたしなみ、さのみに身を砕きて、難の見ゆべき能をばすまじきなり。かやうに我が身を知る心、得たる人の心なるべし。

五十有余

この頃よりは、大方、せぬなら
では手立であるまじ。「麒麟も老い
ては驚馬に劣る」と申すことあり。

さりながら、まことに得たらん能者な
らば、物数はみなみな失せて、善悪
見所は少なしとも、花は残るべし。

亡父にて候ひし者は、五十二と申
しし五月十九日に死去せしが、その
月の四日の日、駿河の国浅間の御前
にて法楽仕る。その日の申楽、こと
に花やかにて、見物の上下、一同に
褒美せしなり。およそ、その頃、物
数をばはや初心に譲りて、易き所を
少な少など、色へてせしかども、花

はいや増しに見えしなり。これ、ま
ことに得たりし花なるがゆるゑに、能
は、枝葉も少なく、老木になるまで、
花は散らで残りしなり。これ、眼の
あたり、老骨に残りし花の証拠なり。

年来稽古 以上



風姿花伝第二 物学条々

目次へ



序

物まねの品々、筆に尽くしがたし。さりながら、この道の肝要なれば、その品々を、いかにもいかにもたしなむべし。およそ、何事をも残さずよく似せんが本意なり。しかれども、また、事によりて、濃き薄きを知るべし。

まづ、国王・大臣より始め奉りて、公家の御たたずまひ、武家の御進退は、及ぶべき所にあらざれば、十分ならん事難し。さりながら、よくよく言葉を尋ね、品を求めて、見所の御意見を待つべきをや。

その外、上職の品々、花鳥風月の

事わざ、いかにもいかにも細かに似すべし。田夫・野人の事に至りては、さのみに細かに卑しげなる態をば似すべからず。仮令、木樵・草刈・炭焼・汐汲などの、風情にもなりつべき態をば、細かにも似すべきか。それよりなほ卑しからん下職をば、さのみに似すまじきなり。これ、上方の御目に見ゆべからず。もし見えば、あまりに卑しくて、面白き所あるべからず。この宛てがひを、よくよく心得べし。

女

およそ、女がかり、若き為手のたしなみに似合ふ事なり。さりながら、これ、一大事なり。

まづ、仕立見苦しければ、さらに見所なし。女御・更衣などの似せ事は、たやすくその御振舞を見る事なければ、よくよくうかがふべし。衣・袴の着様、すべて私ならず、尋ぬべし。

ただ世の常の女がかりは、常に見慣るる事なれば、げにはたやすかるべし。ただ衣・小袖の出立は、大方の体、よしよしとあるまでなり。舞・白拍子、または物狂などの女がかり、扇にてもあれ、かざしにても

あれ、いかにもいかにも弱々と、持ちさだめずして持つべし。

衣・袴などをも長々と踏み含みて、腰膝は直に、身はたをやかなるべし。

顔の持ち様、あをのけば見目悪く見ゆ。うつぶけば後姿悪し。さて、首持ちを強く持てば、女に似ず。いかにもいかにも袖の長き物を着て、手先をも見すべからず。帯などをも弱々とすべし。

されば、仕立をたしなめとは、かりをよく見せんとなり。いづれの物まねなりとも、仕立悪くてはよかるべきかなれども、ことさら女がかり、仕立を以て本とす。

老人

老人の物まね、この道の奥義なり。能の位、やがてよそ目にあらはるる事なれば、これ、第一の大事なり。

およそ、能をよき程極めたる為手も、老いたる姿は得ぬ人多し。

たとへば、木樵・汐汲の態物などの翁形をし寄せぬれば、やがて上手と申す事、これ、誤りたる批判なり。

冠・直衣・烏帽子・狩衣の老人の姿、得たらむ人ならでは似合ふべからず。稽古の功入りて、位上らでは似合ふべからず。

また、花なくば面白き所あるまじ。およそ、老人の立ち振舞、老いぬれ

ばとて、腰・膝をかがめ、身をつむ
れば、花失せて、古様に見ゆるなり。
さるほどに、面白き所稀なり。ただ、
大方、いかにもいかにもそぞろかで、
しとやかに立ち振舞ふべし。

ことさら、老人の舞がかり、無上
の大事なり。花はありて年寄と見ゆ
るる公案、くはしく習ふべし。ただ、
老木に花の咲かんがごとし。

直面

これまた大事なり。およそ、もとより俗の身なれば、易かりぬべき事なれども、不思議に、能の位上らねば、直面は見られぬものなり。

まづ、これは、仮令、その物その物によりて学ばん事、是非なし。面色をば似すべき道理もなきを、常の顔に変へて、顔気色をつくろふ事あり。さらに見られぬものなり。振舞・風情をば、その物に似すべし。顔気色をば、いかにもいかにも已なりに、つくろはで直に持つべし。

物狂

この道の第一の面白尽くの芸能なり。物狂の品々多ければ、この一道に得たらん達者は、十方へわたるべし。くり返しくり返し、公案の入るべきたしなみなり。

仮令、憑物の品々、神・仏・生霊・死霊の咎めなどは、その憑物の体を学べば、易く、便りあるべし。親に別れ、子を尋ね、夫に捨てられ、妻に後るる、か様の思ひに狂乱する物狂、一大事なり。よき程の為手も、ここを心に分けずして、ただ一遍に狂ひはたらくほどに、見る人の感もなし。思いゆるゑの物狂をば、いかにも物思

ふ気色を本意に当てて、狂う所を花に当てて、心を入れて狂へば、感も、面白き見所も、定めてあるべし。か様なる手柄にて人を泣かする所あらば、無上の上手と知るべし。これを心底によくよく思ひ分くべし。

およそ、物狂の出立、似合ひたる様に出で立つべき事、是非なし。さりながら、とても物狂に言寄せて、時によりて、何とも花やかに出で立つべし。時の花を挿頭に挿すべし。

また云はく、物まねなれども、心得べき事あり。物狂は憑物の本意を狂ふといへども、女物狂などに、あるいは修羅鬪諍・鬼神などの憑く事、

これ、何よりも悪き事なり。憑物の本意をせんとて、女姿にて怒りぬれば、見所似合はず。女がかりを本意にすれば、憑物の道理なし。また、男物狂に女などの寄らん事も、同じ料簡なるべし。所詮、これ体なる能をばせぬが秘事なり。能作る人の料簡なきゆゑなり。さりながら、この道に長じたらん書手の、さ様に似合はぬ事を、さのみに書く事はあるまじ。この公案を持つ事、秘事なり。また、直面の物狂、能を極めてならでは、十分にはあるまじきなり。顔気色をそれになさねば、物狂に似ず。得たる所なくて、顔気色を変ゆれば、

見られぬ所あり。物まねの奥義とも申しつべし。大事の申樂などには、初心の人、斟酌すべし。直面の大事、物狂の一大事、二色を一心になして、面白き所を花に当てん事、いかほどの大事ぞや。よくよく稽古あるべし。

法師

これは、この道にありながら、稀なれば、さのみの稽古いらず。仮令、莊嚴の僧正、ならびに僧綱等は、いかに威儀を本として、氣高き所を学ぶべし。それ以下の法体、遁世・修行の身に至りては、抖擻を本とすれば、いかに思ひ入りたる姿があり、肝要たるべし。ただし、賦物によりて、思ひの外の手数に入る事もあるべし。

修羅

これまた、一体の物なり。よくすれども、面白き所稀なり。さのみにはずまじきなり。ただし、源平などの名のある人の事を、花鳥風月に作り寄せて、能よければ、何よりもまた面白し。これ、ことに花やかなる所ありたし。

これ体なる修羅の狂ひ、ややもすれば、鬼の振舞になるなり。または舞の手にもなるなり。それも、曲舞がかりあらば、少し舞がかりの手づかひ、よろしかるべし。弓・胡籥を携へて、打物を以て飾りとす。その持ち様、使ひ様を、よくよくうかが

ひて、その本意をはたらくべし。あ
ひかまへてあひかまへて、鬼のはた
らぎ、また、舞の手になる所を用心
すべし。

神

およそ、この物まねは鬼がかりなり。何となく怒れるよそほひあれば、神体によりて、鬼がかりにならんも苦しがるまじ。ただし、はたと変れる本意あり。神は舞がかりの風情によろし。鬼には更に舞がかりの便りあるまじ。

神をば、いかにも神体によるしき様に出で立ちて、気高く、ことさら、出物にならでは神といふ事はあるまじければ、衣裳を飾りて、衣文をつくろひてすべし。

鬼

これ、ことさら大和の物なり。一
大事なり。

およそ、怨霊・憑物などの鬼は、面
白き便りあれば、易し。あひしらひ
を目がけて、細かに足・手を使ひて、
物頭を本にしてはたらけば、面白き
便りあり。

まことの冥途の鬼、よく学べば恐ろ
しきあひだ、面白き所更になし。まこ
とは、あまりの大事の態なれば、これ
を面白くする者、稀なるか。

まづ、本意は強く恐しかるべし。
強きと恐しきは、面白き心には変は
れり。

そもそも、鬼の物まね、大きな
大事あり。よくせんにつけて、面白
かるまじき道理あり。恐しき所、本
意なり。恐しき心と面白きとは、黒
白の違ひなり。されば、鬼の面白き
所あらん為手は、極めるたる上手と
も申すべきか。さりながら、それも、
鬼ばかりをよくせん者は、ことさら
花を知らぬ為手なるべし。されば、
若き為手の鬼は、よくしたりとは見
ゆれども、更に面白からず。鬼ばか
りをよくせん者は、鬼も面白かるま
じき道理あるべきか。くはしく習ふ
べし。ただ、鬼の面白からむたしな
み、巖に花の咲かんがごとし。

唐事

これは、およそ格別の事なれば、定めて稽古すべき形木もなし。ただ肝要、出立なるべし。また、面をも、同じ人と申しながら、模様の変わりたらんを着て、一体異様したるやうに、風体を持つべし。功入りたる為手に似合ふものなり。ただ、出立を唐様にするならば、手立なし。何としても、音曲もはたらきも、唐様といふ事は、まことに似せたりとも、面白くもあるまじき風体なれば、ただ一模様心得んまでなり。

この異様したると申す事など、かりそめながら、諸事にわたる公案なり。

何事か異様してよかるべきなれども、
およそ唐様をば何とか似すべきなれば、
常の振舞に風体変れば、何となく唐び
たるやうに、よそ目に見なせば、やが
てそれになるなり。

結び

大方、物まねの条々、以上。この外、細かなる事、紙筆に載せがたし。さりながら、およそ、この条々をよくよく極めたらん人は、おのづから細かなる事をも心得べし。



風姿花伝第三
問答条々



前頁

目次へ

次頁



第一問答

問ふ。そもそも、申樂を始むるに、当日に臨んで、まづ座敷を見て、吉凶をかねて知る事は、いかなる事ぞや。

答ふ。この事、一大事なり。その道に得たらん人ならでは心得べからず。

まづ、その日の庭を見るに、今日は能よく出で来べき、悪しく出で来べき、瑞相あるべし。これ、申しがたし。しかれども、およその料簡を以て見るに、神事、貴人の御前などの申樂に、人群集して、座敷いまだ静まらず。さるほどこに、いかにもいかにも静めて、

見物衆、申樂を待ちかねて、数万人の心一同に、遅しと樂屋を見る所に、時を得て出でて、一声をも上ぐれば、やがて座敷も時の調子に移りて、万人の心、為手の振舞に和合して、しみじみとなれば、何とするも、その日の申樂ははや良し。

さりながら、申樂は、貴人の御出でを本とすれば、もし早く御出である時は、やがて始めずしてはかなはず。さるほどに、見物衆の座敷いまだ定まらず。あるいは後れ馳せなどにて、人の立居しどろにして、万人の心いまだ能にならず。されば、左右なくしみじみとなる事なし。

さ様ならむ時の脇の能には、物になりて出づるとも、日頃より、色々振りをもつくろひ、声をも強々と使ひ、足踏をも少し高く踏み、立ち振舞ふ風情をも、人の目に立つ様に生き生きとすべし。これ、座敷を静めんためなり。さ様ならんにつけても、ことさら、その貴人の御心に合ひたらん風体をすべし。されば、か様なる時の脇の能、十分によからん事、かへすがへすあるまじきなり。しかれども、貴人の御意にかなへるまでなれば、これ肝要なり。

何としても、座敷のはや静まりて、おのづからしみたるには、悪き事なし。

されば、座敷の競ひ後れを考へてみる事、その道に長ぜざらん人は、左右なく知るまじきなり。

また云はく、夜の申樂は、はたと変るなり。夜は、おそく始まれば、定まりて湿るなり。されば、昼二番目によき能の体を、夜の脇にすべし。脇の申樂湿り立ちぬれば、そのまま能は直らず。いかにもいかにも、よき能を利くすべし。夜は、人音忽々なれども、一声にてやがて静まるなり。しかれば、昼の申樂は後がよく、夜の申樂は指寄りよし。指寄り湿り立ちぬれば、直る時分、左右なく無し。秘義に云はく、そもそも、一切は、

陰陽の和する所の境を、成就とは知るべし。昼の気は陽気なり。されば、いかにも静めて能をせんと思ふ工は、陰気なり。陽気の時分に陰気を生ずる事、陰陽和する心なり。これ、能のよく出で来る成就の始めなり。これ、面白しと見る心なり。夜はまた陰なれば、いかにも浮き浮きと、やがてよき能をして、人の心花めくは陽なり。これ、夜の陰に陽気を和する成就なり。されば、陽の気に陽とし、陰の気に陰とせば、和する所あるまじければ、成就もあるまじ。成就なくば、何か面白からん。また、昼の内にて、時によりて、何とやらん

座敷も湿りて寂しき様ならば、これ陰の時と心得て、沈まぬ様に、心を入れてすべし。昼は、か様に、時によりて陰気になる事もありとも、夜の気の陽にならん事、左右なくあるまじきなり。

座敷をかねて見るとは、これなるべし。

第二問答

問ふ。能に序・破・急をば何とか定むべきや。

答ふ。これ易き定めなり。一切の事に序・破・急あれば、申樂もこれ同じ。能の風情を以て定むべし。

まづ、脇の申樂には、いかにも本説正しき事の、しとやかなるが、さのみに細かになく、音曲・はたらきも大かたの風体にて、するすると安くすべし。第一、祝言なるべし。いかによき脇の申樂なりとも、祝言欠けてはかなふべからず。たとひ能は少し次なりとも、祝言ならば苦しかるまじ。これ、序なるがゆゑなり。

二番・三番になりては、得たる風体のよき能をすべし。ことさら、拳句急なれば、揉み寄せて、手数をいれてすべし。

また、後日の脇の申樂には、昨日の脇に変わる風体をすべし。泣き申樂をば、後日などの中ほどに、よき時分を考えてすべし。

第三問答

問ふ。申樂の勝負の立合の手立は
いかに。

答ふ。これ肝要なり。まづ、能数
を持ちて、敵人の能に變りたる風体
を、違へてすべし。序に言ふ。「歌
道を少ししたしなめ」とは、これなり。
この芸能の作者別なれば、いかなる
上手も心のままならず。自作なれば、
言葉・振舞、案の内なり。されば、
能をせん程の者の、和才あらば、申
樂を作らん事、易かるべし。これ、
この道の命なり。されば、いかなる
上手も、能を持たざらん為手は、一騎
当千の兵なりとも、軍陣にて兵具の

なからん、これ同じ。

されば、手柄のせいれひ、立合に見ゆべし。敵方色めきたる能をすれば、静かに、模様変りて、詰め所のある能をすべし。かやうに、敵人の申樂に変へてすれば、いかに敵方の申樂よけれども、さのみには負くる事なし。もし能よく出で来れば、勝つ事は治定あるべし。

しかれば、申樂の当座においても、能に、上中下の差別あるべし。本説正しく、めづらしきが、幽玄にて、面白き所あらんを、よき能とは申すべし。よき能を、よくしたらんが、しかも出で来たらんを、第一とすべし。

能はそれほどになけれども、本説のままに、咎もなく、よくしたらんが出で来たらむを、第二とすべし。能はえせ能なれども、本説の悪き所をなかなか便りにして、骨を折りてよくしたるを、第三とすべし。

第四問答

問ふ。これに大いなる不審あり。
はや功入りたる為手の、しかも名人なるに、唯今の若き為手の、立合に勝つ事あり。これ不審なり。

答ふ。これこそ、先に申しつる三十以前の時分の花なれ。古き為手ははや花失せて古様なる時分に、めづらしき花にて勝つ事あり。真実の目利きは見分くべし。さあらば、目利き・目利かずの批判の勝負になるべきか。

さりながら、様あり。五十以来ま
で花の失せざらん程の為手には、い
かなる若き花なりとも、勝つ事はある

まじ。ただこれ、よき程の上手の、花失せたるゆゑに、負くる事あり。いかなる名木なりとも、花の咲かぬ時の木をや見ん。犬桜の一重なりとも、初花の色々と咲けるをや見ん。か様の譬へを思ふ時は、一旦の花なりとも、立合に勝つは理なり。

されば、肝要、この道はただ花が能の命なるを、花の失するをも知らず、もとの名望ばかりを頼まん事、古き為手のかへすがへす誤りなり。物数をば似せたりとも、花のある様を知らざらんは、花咲かぬ時の草木を集めて見んがごとし。万木千草において、花の色もみなみな異なれども、

面白しと見る心は、同じ花なり。物数は少なくとも、一方の花を取り極めたらん為手は、一体の名望は久しかるべし。されば、主の心には随分花ありと思へども、人の目に見ゆるる公案なからんは、田舎の花、藪梅などの、いたづらに咲き匂はんがごとし。

また、同じ上手なりとも、その内にて重々あるべし。たとひ随分極めたる上手・名人なりとも、この花の公案なからん為手は、上手にては通るとも、花は後まではあるまじきなり。公案を極めたらん上手は、たとへ能は下がるとも、花は残るべし。

花だに残らば、面白き所は一期あるべし。されば、まことの花の残りたる為手には、いかなる若き為手なりとも、勝つ事はあるまじきなり。

第五問答

問ふ。能に、得手得手とて、ことの外に劣りたる為手も、一向き上手に勝りたる所あり。これを上手のせぬは、かなはぬやらん。また、すまじき事にてせぬやらん。

答ふ。一切の事に、得手得手とて、生得得たる所あるものなり。位は勝りたれども、これはかなはぬ事あり。さりながら、これもただ、よき程の上手の事にての料簡なり。まことに能と工夫との極まりたらん上手は、などかいつれの向きをもせざらん。されば、能と工夫とを極めたる為手、万人が中にも一人もなきゆるなり。

なきとは、工夫はなくて慢心あるゆるなり。

そもそも、上手にも悪き所あり、下手にもよき所必ずあるものなり。これを見る人もなし。主も知らず。上手は、名を頼み、達者に隠されて、悪き所を知らず。下手は、もとより工夫なければ、悪き所をも知らねば、よき所のたまたまあるをもわきまへず。されば、上手も下手も、たがひに人に尋ぬべし。さりながら、能と工夫を極めたらんは、これを知るべし。いかなるをかしき為手なりとも、よき所ありと見ば、上手もこれを学ぶべし。これ、第一の手立てなり。

もし、よき所を見たりとも、我より下手をば似すまじきと思ふ情識あらば、その心に繫縛せられて、我が悪き所をも、いかさま知るまじきなり。これ則ち、極めぬ心なるべし。

また、下手も、上手の悪き所もし見えば、上手だにも悪き所あり。いはんや初心の我なれば、さこそ悪き所多かるらめと思ひて、これを恐れて、人にも尋ね、工夫をいたさば、いよいよ稽古になりて、能は早く上がるべし。もし、さはなくて、我はあれ体に悪き所をばすまじきものと慢心あらば、我がよき所をも、真実知らぬ為手なるべし。よき所を知

らねば、悪き所をも良しと思ふなり。さるほどに、年は行けども、能は上がらぬなり。これ則ち、下手の心なり。

されば、上手にだにも、上慢あらば、能は下がるべし。いはんやかなはぬ上慢をや。よくよく公案して思へ。

「上手は下手の手本、下手は上手の手本なり」と工夫すべし。下手のよき所を取りて、上手の物数に入る事、無上至極の理なり。人の悪き所を見るだにも、我が手本なり。いはんやよき所をや。「稽古は強かれ、情識はなかれ。」とは、これなるべし。

第六問答

問ふ。能に位の差別を知る事は、如何。

答ふ。これ、目利きの眼には易く見ゆるなり。およそ、位の上がるとは、能の重々の事なれども、不思議に、十ばかりの能者にも、この位おのれと上がれる風体あり。ただし、稽古なからんは、おのれと位ありとも、いたづら事なり。まづ、稽古の功入りて位のあらんは、常の事なり。また、生得の位とは、長なり。嵩と申すは別の物なり。多く、人、長と嵩とを同じように思ふなり。嵩と申すは、物々しく、勢いのある形なり。

また云はく、嵩は一切にわたる義なり。位・長は別の物なり。たとへば、生得幽玄なる所あり。これ、位なり。しかれども、さらに幽玄にはなき為手の、長のあるもあり。これは幽玄ならぬ長なり。

また、初心の人思ふべし。稽古に位を心がけんは、かへすがへすかなふまじ。位はいよいよかなはで、あまさへ、稽古しつる分も下がるべし。所詮、位・長とは生得の事にて、得ずしては大かたかなふまじ。また、稽古の功入りて、垢落ちぬれば、この位、おのれと出で来る事あり。稽古とは、音曲・舞・はたらき・物まね、

か様の品々を極むる形木なり。

よくよく公案して思ふに、幽玄の位は生得の物か。長けたる位は功入りたる所か。心中に案を廻らすべし。

第七問答

問ふ。文字に当たる風情とは、何事ぞや。

答ふ。これ、細かなる稽古なり。

能にもろもろのはたらきとは、これなり。体配・身づかひと申すもこれなり。たとへば、言ひ事の文字にまかせて心をやるべし。「見る」といふことには物を見、「指す」「引く」などといふには手を差し引き、「聞く」「音する」などには耳を寄せ、あらゆる事にまかせて身をつかへば、おのづからはたらきになるなり。第一、身をつかふ事、第二、手をつかふ事、第三、足をつかふ事なり。節とかか

りによりて、身の振舞を料簡すべし。これは筆に見えがたし。その時に至りて、見るまま習ふべし。

この文字に当たることを稽古し極めぬれば、音曲・はたらき、一心になるべし。所詮、音曲・はたらき一心と申す事、これまた得たる所なり。堪能と申さんも、これなるべし。秘事なり。音曲とはたらきとは二つの心なるを、一心になるほど達者に極めたらんは、無上第一の上手なるべし。これ、まことに強き能なるべし。また、強き・弱き事、多く、人、紛らかすものなり。能の品のなきをば強きと心得、弱きをば幽玄なると

批判する事、をかしき事なり。何と見るも見弱りのせぬ為手あるべし。これ、強きなり。何と見るも花やかなる為手、これ、幽玄なり。されば、この文字に当たる道理をし極めたらんは、音曲・はたらき一心になり、強き・幽玄の境、いづれもいづれも、おのづから極めたる為手なるべし。

第八問答

問ふ。常の批判にも、「しほれたる」と申す事あり。いか様なる所ぞや。

答ふ。これは、ことに記すに及ばず。その風情あらはれまじ。さりながら、まさしく、しほれたる風体はあるものなり。これも、ただ花によりての風情なり。よくよく案じて見るに、稽古にも振舞にも及びがたし。花を極めたらば知るべきか。されば、あまねく物まねごとになしとも、一方の花を極めたらん人は、しほれたる所をも知る事あるべし。

しかれば、この「しほれたる」と申す事、花よりもなほ上の事にも申

しつべし。花なくては、しほれ所無益なり。それは「湿りたる」になるべし。花のしほれたらんこそ面白けれ。花咲かぬ草木のしほれたらんは、何か面白かるべき。されば、花を極めん事、一大事なるに、その上とも申すべき事なれば、しほれたる風体、かへすがへす大事なり。さるほどに、譬へにも申しがたし。

古歌に云はく、

薄霧の籬の花の朝じめり

秋は夕べと誰か言ひけん。

また云はく、

色見えで移ろふものは

世の中の人の心の花にぞありける。

か様なる風体にてやあるべき。心中
にあてて公案すべし。

第九問答

問ふ。能に花を知る事、この条々を見るに、無上第一なり。肝要なり。または不審なり。これ、いかにとして心得べきや。

答ふ。この道の奥義を極むる所なるべし。一大事とも、秘事とも、ただこの一道なり。

まづ、大方、稽古・物まねの条々にくはしく見えたり。時分の花、声の花、幽玄の花、か様の条々は、人の目にも見えたれども、その態より出で来る花なれば、咲く花のごとくなれば、またやがて散る時分あり。されば、久しからねば、天下に名望

少なし。ただ、まことの花は、咲く道理も、散る道理も、心のままなるべし。されば久しかるべし。この理を知らむこと、いかがすべき。もし別紙の口伝にあるべきか。ただ、わづらはしくは心得まじきなり。

まづ、七歳よりこのかた、年来稽古の条々、物まねの品々を、よくよく心中にあてて分かち覚えて、能を尽くし、工夫を極めて後、この花の失せぬ所をば知るべし。この物数を極むる心、則ち花の種なるべし。されば、花を知らんと思はば、まづ種を知るべし。花は心、種は態なるべし。

古人云はく、

心地含諸種、普雨悉皆萌

頓悟花情已、菩提果自成

心地に諸の種を含み、普き雨に悉く
皆萌す。

頓に花の情を悟り已れば、菩提の果
自ずから成る。

奥書

およそ、家を守り、芸を重んずるによつて、亡父の申し置きし事どもを、心底にさしはさみて、大概を録する所、世の謗りを忘れて道の廃れん事を思ふによりて、全く他人の才学に及ぼさんとはあらず。ただ子孫の庭訓を残すのみなり。

風姿花伝条々 以上

于時応永七年、卯月十三日

従五位下左衛門大夫秦元清 書



風姿花伝第四 神儀に云はく

目次へ



一、申樂、神代の始まりといつば、
天照大神、天の岩戸に籠り給ひし時、
天下常闇になりしに、八百万の神達、
天香具山に集まり、大神の御心をと
らんとて、神樂を奏し、細男を始め
給ふ。中にも、天の鈿女の尊、進み
出で給ひて、榊の枝に幣を付けて、
声を上げ、火処焼き、踏み轟かし、
神憑りすと、歌ひ舞ひ奏で給ふ。
その御声ひそかに聞えければ、大神、
岩戸を少し開き給ふ。国土また明白
たり。神達の御面白かりけり。その
時の御遊び、申樂の始めと、云々。
くはしくは口伝にあるべし。

一、 仏在所には、 須達長者、 祇園精舎を建てて供養の時、 釈迦如来、 御説法ありしに、 堤婆、 一万人の外道を伴ひ、 木の枝・篠の葉に幣を付けて踊り叫めば、 御供養伸べがたかりしに、 仏、 舍利弗に御目を加へ給へば、 仏力を受け、 御後戸にて、 鼓・唱歌をととのへ、 阿難の才覚、 舍利弗の知恵、 富楼那の弁舌にて、 六十六番の物まねをし給へば、 外道、 笛・鼓の音を聞きて、 後戸に集まり、 これを見て静まりぬ。 その隙に、 如来供養を伸べ給へり。 それより、 天竺にこの道は始まるなり。

一、日本国においては、欽明天皇の御宇に、大和国泊瀬の河に洪水の折節、河上より一つの壺流れ下る。三輪の杉の鳥居のほとりにて、雲客この壺を取る。中にみどり子あり。かたち柔和にして玉の如し。これ、降り人なるがゆゑに、内裏に奏聞す。その夜、御門の御夢にみどり子の云はく、「我はこれ、大国秦の始皇の再誕なり。日域に機縁ありて今現在す」と云ふ。御門奇特に思し召し、殿上に召さる。成人に従ひて、才智人に越えば、年十五にて大臣の位に上り、秦の姓を下さるる。「秦」といふ文字、「はだ」なるがゆゑに、秦河勝、これなり。

上宮太子、天下少し障りありし時、神代・仏在所の吉例にまかせて、六十六番の物まねをかか河勝に仰せて、同じく六十六番の面を御作にて、すなはち河勝に与へ給ふ。橘の内裏柴宸殿にてこれを勤ず。天下治まり、国静かなり。上宮太子、末代のため、神楽なりしを、「神」といふ文字の偏を除けて、旁を残し給ふ。これ、日曆の「申」なるがゆゑに、「申楽」と名づく。すなはち、楽しみを申すによりてなり。または神楽を分くればなり。

かの河勝、欽明・敏達・用明・崇峻・推古・上宮太子に仕へ奉り、この芸

をば子孫に伝へ、化人跡を留めぬに
よりて、摂津の国難波の浦より、う
つほ船に乗りて、風にまかせて西海
に出づ。播磨の国坂越の浦に着く。
浦人船を上げて見れば、形人間に変
われり。諸人に憑き崇りて奇瑞をな
す。すなはち神と崇めて国豊かなり。
「大きに荒るる」と書きて、大荒大
明神と名づく。今の代に靈驗あらた
なり。本地毘沙門天王にてまします。
上宮太子、守屋の逆臣を平らげ給ひ
し時も、かの河勝が神通方便の手に
かかりて守屋は失せぬと、云々。

一、平の都にしては、村上天皇の御宇に、昔の上宮太子の御筆の申楽延年の記を叡覧なるに、まづ、神代・仏在所の始まり、月氏・震旦・日域に伝はる狂言綺語を以て、賛仏転法輪の因縁を守り、魔縁を退け、福祐を招く。申楽舞を奏すれば、国穏やかに、民静かに、寿命長遠なりと、太子の御筆あらたなるによつて、村上天皇、申楽を以て天下の御祈禱たるべしとて、その頃、かの河勝この申楽の芸を伝ふる子孫、秦氏安なり。六十六番の申楽を紫宸殿にて仕る。その頃、紀の権の守と申す人、才智の人なりけり。これは、かの氏

安が妹婿なり。これをもあひ伴ひて申樂をす。

その後、六十六番までは一日に勤めがたしとて、その中を選びて、稲経の翁^{△翁面▽}、代経の翁^{△三番申樂▽}、父の助、これ三つを定む。今の代の式三番、これなり。すなはち、法・報・応の三身の如来をかたどり奉る所なり。式三番の口伝、別紙にあるべし。

秦氏安より、光太郎・金春まで

二十九代の遠孫なり。これ、大和国円満井の座なり。同じく氏安より相伝へたる聖徳太子の御作の鬼面、春日の御神影、仏舍利、これ三つ、この家に伝はる所なり。

一、当代において、南都興福寺の維摩会に、講堂にて法味を行ひ給ふ折節、食堂にて舞延年あり。外道を和らげ、魔縁を静む。その間に、食堂前にてかの御経を講じ給ふ。すなはち、祇園精舎の吉例なり。

しかれば、大和国春日興福寺神事行ひとは、二月二日、同じく五日、宮寺において、四座の申樂、一年中の御神事始めなり。天下太平の御祈禱なり。

一、大和の国春日の御神事に相隨ふ
申樂四座。

外山 結崎 坂戸 円満井

一、江州日吉の御神事に相隨ふ申樂
三座。

山階 下坂 比叡

一、伊勢、呪師、二座。

一、法勝寺御修正參勤申樂三座。

△河内住△新座 △丹波△本座

△摂津△法成寺

この三座、同じく賀茂・住吉の
御神事にも相隨ふ。

前頁



奥義に云はく

目次へ

次頁



そもそも、風姿花伝の条々、大方、外見の憚り、子孫の庭訓のため注すといへども、ただ望む所の本意とは、当世、この道の輩を見るに、芸のたしなみは疎かにて、非道のみ行じ、たまたま当芸に至る時も、ただ一夕の戯笑、一旦の名利に染みて、源を忘れて流れを失ふ事、道すでに廃る時節かと、これを嘆くのみなり。

しかれば、道をたしなみ、芸を重んずる所、私なくば、などかその徳を得ざらん。

ことさら、この芸、その風を継ぐといへども、自力より出づる振舞あれば、語にも及びがたし。

その風を得て、心より心に伝ふる
花なれば、風姿花伝と名づく。



およそ、この道、和州・江州において風体変れり。江州には、幽玄の境を取り立てて、物まねを次にして、かかりを本とす。和州には、まづ物まねを取り立てて、物数を尽くして、しかも幽玄の風体ならんとなり。しかれども、眞実の上手は、いづれの風体なりとも、漏れたる所あるまじきなり。一向きの風体ばかりをせん者は、まこと得ぬ人の技なるべし。

されば、和州の風体、物まね・義理を本として、あるいは長のあるよそほひ、あるいは怒れる振舞、かくのごとくの物数を、得たる所と人も心得、たしなみもこれ専らなれども、

亡父の名を得し盛り、静が舞の能、嵯峨の太念仏の女物狂の物まね、ことにことに得たりし風体なれば、天下の褒美・名望を得し事、世以て隠れなし。これ、幽玄無上の風体なり。

また、田楽の風体、ことに格別の事にて、見所も、申楽の風体には批判にも及ばぬと、皆々思い慣れたれども、近代にこの道の聖とも聞えし本座の一忠、ことにことに物数を尽くしける中にも、鬼神の物まね、怒れるよそほひ、漏れたる風体なかりけるとこそ承りしか。しかれば、亡父は、常々、一忠が事を、「わが風体の師なり」と、まさしく申ししなり。

されば、ただ、人ごとくに、あるいは情識、あるいは得ぬゆるゑに、一向きの風体ばかりを得て、十体にわたる所を知らず、よその風体を嫌ふなり。これは、嫌ふにはあらず、ただかなはぬ情識なり。されば、かなはぬゆるゑに、一体得たる程の名望を、一旦は得たれども、久しき花なければ、天下に許されず。堪能にて、天下の許されを得ん程の者は、いづれの風体をするとも、面白かるべし。風体形木は面々各々なれども、面白き所はいづれにもわたるべし。この面白しと見るは、花なるべし。これ、和州・江州、または田楽の能にも漏れぬ所

なり。されば、漏れぬ所を持ちたる
為手ならでは、天下の許されを得ん
事あるべからず。

また云はく、ことごとく物数を極
めずとも、仮令、十分に七八分極め
たらん上手の、その中にことに得た
る風体を、我が門弟の形木にし極め
たらんが、しかも工夫あらば、これ
また、天下の名望を得つべし。さり
ながら、げには、十分に足らぬ所あ
らば、都鄙・上下において、見所の
褒貶の沙汰あるべし。

およそ、能の名望を得る事、品々多し。上手は目利かずの心にあひかなふ事難し。下手は目利きの眼に合ふ事なし。下手にて目利きの眼にかなはぬは、不審あるべからず。上手の目利かずの心に合はぬ事、これは、目利かずの眼の及ばぬ所なれども、得たる上手にて、工夫あらん為手ならば、また、目利かずの眼にも面白しと見るやうに能をすべし。この工夫と達者とを極めたらん為手をば、花を極めたとや申すべき。されば、この位に至らん為手は、いかに年寄りとも、若き花に劣る事あるべからず。されば、この位を得たらん上手

こそ、天下にも許され、また、遠国・田舎の人までも、あまねく面白しとは見るべけれ。この工夫を得たらん為手は、和州へも江州へも、もしくは田楽の風体までも、人の好み・望みによりて、いづれにもわたる上手なるべし。このたしなみの本意をあらはさんがため、風姿花伝を作するなり。

かやうに申せばとて、我が風体の形木の疎かならんは、ことにことに能の命あるべからず。これ、弱き為手なるべし。我が風体の形木を極めてこそ、あまねき風体をも知りたるにてはあるべけれ。あまねき風体を

心にかけんとて、我が形木に入らざらん為手は、我が風体を知らぬのみならず、よその風体をも、確かにはまして知るまじきなり。されば、能弱くて、久しく花はあるべからず。久しく花のなからんは、いづれの風体をも知らぬに同じかるべし。しかれば、花伝の花の段に、「物数を尽くし、工夫を極めて後、花の失せぬ所をば知るべし」と言へり。

秘義に云はく。そもそも、芸能とは、諸人の心を和らげて、上下の感をなさん事、寿福増長の基、遐齡延年の方なるべし。極め極めては、諸道ことごとく寿福延長ならんとなり。ことさら、この芸、位を極めて、佳名を残す事、これ天下の許されなり。これ寿福増長なり。

しかれども、ことに故実あり。上根上智の眼に見ゆるる所、長・位の極まりたる為手におきては、相応至極なれば、是非なし。およそ、愚かなる輩、遠国・田舎の卑しき眼には、この長・位の上がれる風体、及びがたし。これをいかがすべき。この芸

とは、衆人愛嬌を以て、一座建立の
寿福とせり。ゆゑに、あまり及ばぬ
風体のみなれば、また諸人の褒美欠
けたり。このために、能に初心を忘
れずして、時に応じ、所によりて、
愚かなる眼にも「げにも」と思ふや
うに能をせん事、これ寿福なり。

よくよくこの風俗の極めを見るに、
貴所・山寺・田舎・遠国・諸社の祭
礼に至るまで、おしなべて謗りを得
ざらんを、寿福達人の為手とは申す
べきや。されば、いかなる上手なり
とも、衆人愛嬌欠けたる所あらんを
ば、寿福増長の為手とは申しがたし。
しかれば、亡父は、いかなる田舎・

山里の片辺りにても、その心を受け
て、所の風儀を一大事にかけて、芸
をせしなり。

かやうに申せばとて、初心の人、
「それ程は何とて左右なく極むべき」
とて、退屈の儀はあるべからず。こ
の条々を心底にあてて、その理をち
ちと取りて、料簡を以て、我が分力
に引き合わせて、工夫をいたすべし。

およそ、今の条々・工夫は、初心の人よりは、なほ上手におきての故実・工夫なり。たまたま得たる上手になりたる為手も、身を頼み、名に化かされて、この故実なくて、いたづらに名望ほどは寿福かけたる人多きゆゑに、これを嘆くなり。得たる所あれども、工夫なくてはかなはず。得て、工夫を極めたらんは、花に種を添へたらんがごとし。たとひ、天下に許されを得たる程の為手も、力なき因果にて、万一少し廃るる時分ありとも、田舎・遠国の褒美の花矢せずは、ふつと道の絶ふる事はあるべからず。道絶えずば、また天下の

時に会ふ事あるべし。

一、この寿福増長のたしなみと申せばとて、ひたすら世間の理にかかりて、もし欲心に住せば、これ第一、道の廃るべき因縁なり。道のためのたしなみには、寿福増長あるべし。寿福のためのたしなみには、道まさしに廃るべし。道廃らば、寿福おのづから滅すべし。正直円明にして、世上万徳の妙花を開く因縁なりとたしなむべし。

およそ、花伝の中、年来の稽古より始めて、この条々を注す所、全く自力より出づる才学ならず。幼少より以来、亡父の力を得て人と成りしより、二十余年が間、目に触れ、耳に聞き置きしまま、その風を受けて、道のため、家のため、これを作する所、私あらんものか。

于時応永第九之曆暮春二日 馳筆畢

世阿有判



花伝第六 花修に云はく

[目次へ](#)



一、能の本を書く事、この道の命なり。極めたる才学力なけれども、ただ工によりて、よき能にはなるものなり。大方の風体、序破急の段に見えたり。ことさら、脇の申楽、本説正しくて、開口よりその謂れとやがて人の知るごとくならんずる来歴を書くべし。さのみに細かなる風体を尽くさずとも、大方のかかり直に下りたらんが、指寄り花々とある様に、脇の申楽をば書くべし。また、番数に至りぬれば、いかにもいかにも、言葉・風体を尽くして、細かに書くべし。

仮令、名所・旧跡の題目ならば、

その所によりたらんずる詩歌の、言葉の耳近からんを、能の詰め所に寄すべし。為手の言葉にも風情にもかからざらん所には、肝要の言葉をば載すべからず。何としても、見物衆は、見る所も聞く所も、上手をならでは心にかかけず。さるほどに、棟梁の面白き言葉・振り、目にさえぎり、心に浮かめば、見聞く人、すなはち感を催すなり。これ、第一、能を作る手立てなり。

ただ、優しくて、理のすなはちに聞ゆる様ならんずる詩歌の言葉を取るべし。優しき言葉を振りに合はすれば、不思議に、おのづから人体も

幽玄の風情になるものなり。硬りたる言葉は、振りに応ぜず。しかあれども、硬き言葉の耳遠きが、またよき所あるべし。それは、本木の人体によりて似合うべし。漢家・本朝の来歴に従つて心得分くべし。ただ、卑しく俗なる言葉、風体悪き能になるものなり。

しかれば、よき能と申すは、本説正しく、めづらしき風体にて、詰め所ありて、かかり幽玄ならんを、第一とすべし。風体はめづらしからねども、わづらはしくもなく、直に下りたるが、面白き所あらんを、第二とすべし。これはおほよその定めなり。

ただ、能は、一風情、上手の手にかかり、便りだにあらば、面白かるべし。番数を尽くし、日を重ねれば、たとひ悪き能も、めづらしくし替へし替へ色取れば、面白く見ゆべし。されば、能は、ただ、時分・入れ場なり。悪き能とて捨つべからず。為手の心遣ひなるべし。

ただし、ここに様あり。善悪にすまじき能あるべし。いかなる物まねなればとて、仮令、老尼・姥・老僧などの形にて、さのみは狂ひ怒る事あるべからず。また、怒れる人体にて、幽玄の物まね、これ同じ。これをまことのえせ能、きやうさうとは

申すべし。この心、二の巻きの物狂ひの段に申したり。

また、一切の事に、相応なくば成就あるべからず。よき本木の能を、上手のしたらんが、しかも出で来たらんを、相応とは申すべし。されば、よき能を上手のせん事、などか出で来ざらんと、皆人思ひ慣れたれども、不思議に、出で来ぬ事あるものなり。これを、目利きは見分けて、為手の咎もなき事を知れども、ただ大方の人は、能も悪く、為手もそれほどにはなしと見るなり。そもそも、よき能を上手のせん事、何とて出で来ぬやらんと工夫するに、もし、時分の

陰陽の和せぬ所か、または花の公案
なきゆえか、不審なほ残れり。

一、作者の思ひ分くべき事あり。
ひたすら静かなる本木の音曲ばかり
なると、また舞・はたらきのみなる
とは、一向きなれば、書きよきもの
なり。音曲にてはたらく能あるべし。
これ一大事なり。真実面白しと感を
なすは、これなり。聞く所は、耳近
に面白き言葉にて、節のかかりよく
て、文字移りの美しく続きたらんが、
ことさら、風情を持ちたる詰めをた
しなみて書くべし。この数々相応す
る所にて、諸人一同に感をなすなり。
さるほどに、細かに知るべき事あ
り。風情を博士にて音曲をする為手
は、初心の所なり。音曲よりはたら

きの生ずるは、功入りたるゆる急なり。音曲は聞く所、風体は見る所なり。一切の事は、謂れを道にしてこそ、万の風情にはなるべき理なれ。謂れを現はすは言葉なり。さるほどに、音曲は体なり、風情は用なり。しかれば、音曲よりはたらきの生ずるは順なり。はたらきにて音曲をするは逆なり。諸道・諸事において、順・逆とこそ下るべけれ。逆・順とはあるべからず。かへすがへす、音曲の言葉の便りを以て、風体を色取り給ふべきなり。これ音曲・はたらき一心になる稽古なり。

さるほどに、能を書く所にまた工夫

あり。音曲よりはたらきを生ぜさせんがため、書く所をば、風情を本に書くべし。風情を本に書きて、さてその言葉を謡ふ時には、風情おのづから生ずべし。しかれば、書く所をば、風情を先立てて、しかも謡の節・かかりよき様にたしなむべし。さて、当座の芸能に至る時は、また音曲を先とすべし。か様にたしなみて、功入りぬれば、謡ふも風情、舞ふも音曲になりて、万曲一心たる達者となるべし。これまた、作者の高名なり。

一、能に、強き・幽玄、弱き・荒
きを知る事、大方は見えたる事なれ
ば、たやすき様なれども、眞実これ
を知らぬによりて、弱く、荒き為手
多し。

まづ、一切の物まねに、偽る所に
て、荒くも弱くもなると知るべし。
この境、よき程の工夫にては紛るべ
し。よくよく心底を分けて案じ納む
べき事なり。

まづ、弱かるべき事を強くするは、
偽りなれば、これ荒きなり。強かる
べき事に強きは、これ強きなり。荒き
にはあらず。もし、強かるべき事を
幽玄にせんとて、物まねに足らずば、

幽玄にはなくて、これ弱きなり。さるほどに、ただ物まねにまかせて、その物になり入りて、偽りなくば、荒くも弱くもあるまじきなり。

また、強かるべき理過ぎて強きは、ことさら荒きなり。幽玄の風体よりなほ優しくせんとせば、これ、ことさら弱きなり。

この分け目をよくよく見るに、幽玄と強きと、別にあるものと心得るゆゑに、迷ふなり。この二つは、その物の体にある。たとへば、人においては、女御・更衣、または遊女・好色・美男、草木には花の類、か様の数々は、その形幽玄の物なり。また、

あるいは武士・荒夷、あるいは鬼・神、草木にも松・杉、か様の数々の類は、強き物と申すべきか。か様の万物の品々を、よくし似せたらんは、幽玄の物まねは幽玄になり、強きはおのづから強かるべし。この分け目をば宛てがはずして、ただ幽玄にせんとばかり心得て、物まね疎かなれば、それに似ず。似ぬをば知らで、幽玄にするぞと思ふ心、これ弱きなり。されば、遊女・美男などの物まねをよく似せたらば、おのづから幽玄なるべし。ただ似せんとばかり思ふべし。また、強き事をも、よく似せたらんは、おのづから強かるべし。

ただし、心得べきことあり。力なく、この道は見所を本にする態なれば、その当世当世の風儀にて、幽玄をもてあそぶ見物衆の前にては、強き方をば、少し物まねにはづるるとも、幽玄の方へは、遣らせ給ふべし。

この工夫を以て、作者また心得べき事あり。いかにも、申樂の本木には、幽玄ならん人体、まして心・言葉をも優しからんを、たしなみて書くべし。それに偽りなくば、おのづから幽玄の為手と見ゆべし。幽玄の理を知り極めぬれば、おのれと強き所をも知るべし。されば、一切の似せ事をよく似すれば、よそ目に危う

き所なし。危うからぬは強きなり。

しかれば、ちちとある言葉の響きにも、「靡き」「臥す」「返る」「寄る」などといふ言葉は、柔らかかなれば、おのづから余情になる様なり。「落つる」「崩るる」「破るる」「転ぶ」など申すは、強き響きなれば、振りも強かるべし。

さるほどに、強き・幽玄と申すは、別にあるものにあらず、ただ物まねの直なる所、弱き・荒きは物まねにはづるる所と知るべし。

この宛てがひを以て、作者も、発端の句、一声・和歌などに、人体の物まねによりて、いかにも幽玄なる

余情・便りを求むる所に、荒き言葉を書き入れ、思ひの外にいりほがなる梵語・漢音などを載せたらんは、作者の僻事なり。定めて、言葉のままに風情をせば、人体に似合はぬ所あるべし。ただし、堪能の人は、この違ひ目を心得て、興がる故実にて、なだらかなる様にしなすべし。それは為手の高名なり。作者の僻事は逃るべからず。また、作者は心得て書けども、もし為手の心なからんに至りては、沙汰の外なるべし。これはかくのごとし。

また、能によりて、さして細かに言葉・義理にかからで、大様にすべ

き能あるべし。さ様の能をば、直に舞ひ謡ひ、振りをもするするとなだらかにすべし。か様なる能をまた細かにするは、下手の態なり。これまた、能の下がる所と知るべし。しかれば、よき言葉・余情を求むるも、義理・詰め所のなくてはかなはぬ能に至りての事なり。直なる能には、たとひ幽玄の人体にて硬き言葉を謡ふとも、音曲のかかりだに確やかならば、これ、よかるべし。これすなはち、能の本様と心得べき事なり。ただ、かへすがへす、か様の条々を極め尽くして、さて大様にするならば、能の庭訓あるべからず。

一、能の善き・悪しきにつけて、
為手の位によりて、相応の所を知る
べきなり。

文字・風体を求めずして、大様な
る能の、本説ことに正しくて、大き
に位の上がる能あるべし。か様な
る能は、見所さほど細かになき事あ
り。これには、よき程の上手も似合
はぬ事あり。たとひ、これに相応す
る程の無上の上手なりとも、また、
目利き・大所にてなくば、よく出で
来る事あるべからず。これ、能の位、
為手の位、目利き・在所・時分、こ
とごとく相応せずば、出で来る事は
左右なくあるまじきなり。

また、小さき能の、さしたる本説にてはなけれども、幽玄なるが、細々としたる能あり。これは、初心の為手にも似合ふものなり。在所も、自然、片辺りの神事、夜などの庭に相応すべし。よき程の見手も、能の為手も、これに迷ひて、自然、田舎・小所の庭にて面白ければ、その心慣らひにて、押し出だしたる大所、貴人の御前などにて、あるいは鼻肩興行して、思ひの外に能悪ければ、為手にも名を折らせ、我も面目なき事あるものなり。

しかれば、か様なる品々・所々を限らで、甲乙なからんほどの為手な

らでは、無上の花を極めたる上手とは申すべからず。さるほどに、いかなる座敷にも相応するほどの上手に至りては、是非なし。

また、為手によりて、上手ほどは能を知らぬ為手もあり。能よりは能を知るもあり。貴所・大所などにて、上手なれども能をし違へ、遅々のあるは、能を知らぬゆるなり。また、それほどに達者にもなく、物少なる為手の、申さば初心なるが、大庭にても花失せず、諸人の褒美いや増しにて、さのみ斑のなからんは、為手よりは能を知りたるゆるなるべし。さるほどに、この両様の為手を、と

りどりに申すことあり。しかれども、
貴所・大庭などにてあまねく能のよ
からんは、名望長久なるべし。さあ
らんにとりては、上手の達者ほどは
我が能を知らざらんよりは、少し足
らぬ為手なりとも、能を知りたらん
は、一座建立の棟梁には勝るべきか。
能を知りたる為手は、我が手柄の
足らぬ所をも知るゆゑに、大事の能に、
かなはぬ事をば斟酌して、得たる風
体ばかりを先き立てて、仕立よけれ
ば、見所の褒美かならずあるべし。
さて、かなはぬ所をば、小所・片辺
りの能にし慣らふべし。か様に稽古
すれば、かなはぬ所も、功入れば、

自然自然にかなふ時分あるべし。さる
ほどに、終には、能に嵩も出で来、
垢も落ちて、いよいよ名望も一座も繁
昌する時は、定めて、年行くまで花は
残るべし。これ、初心より能を知るゆ
ゑなり。能を知る心にて、公案を尽く
して見ば、花の種を知るべし。

しかれども、この両様は、あまねく
人の心々にて勝負をば定め給ふべし。

花修 已上。

此条々、心ざしの芸人より外は、
一見をも許すべからず。世阿 花押



花伝第七 別紙口伝



一、この口伝に、花を知る事。まづ、
仮令、花の咲くを見て、万に花と譬
へ始めし理をわきまふべし。

そもそも、花といふに、万木千草
において、四季折節に咲くものなれ
ば、その時を得てめづらしきゆゑに、
もてあそぶなり。申樂も、人の心に
めづらしきと知る所、すなはち面白
き心なり。花と面白きとめづらしき
と、これ三つは同じ心なり。いづれ
の花か散らで残るべき。散るゆゑに
よりて、咲く頃あればめづらしきな
り。能も、住する所なきを、まづ花
と知るべし。住せずして、余の風体
に移れば、めづらしきなり。

ただし、様あり。めづらしきと言へばとて、世になき風体をし出だすにてはあるべからず。花伝に出だす所の条々を、ことごとく稽古し終わりて、さて申樂をせん時に、その物数を用々に従ひて取り出だすべし。花と申すも、万の草木において、いづれか四季折節の時の花の外にめづらしき花のあるべき。そのごとくに、習ひ覚えつる品々を極めぬれば、時折節の当世を心得て、時の人の好み品の品によりてその風体を取り出だす。これ、時の花の咲くを見んがごとし。花と申すも、去年咲きし種なり。能も、もと見し風体なれども、物数を

極めぬれば、その数を尽くす程久しし。久しくて見れば、まためづらしきなり。

その上、人の好みも色々にして、音曲・振舞・物まね、所々に変りてとりどりなれば、いづれの風体をも残してはかなふまじきなり。しかれば、物数を極め尽くしたらん為手は、初春の梅より秋の菊の花の咲き果つるまで、一年中の花の種を持ちたらんがごとし。いづれの花なりとも、人の望み、時によりて、取り出だすべし。物数を極めずば、時によりて花を失う事あるべし。たとへば、春の花の頃過ぎて、夏草の花を賞翫せ

んずる時分に、春の花の風体ばかりを得たらん為手が、夏草の花はなくて、過ぎし春の花をまた持ち出て出でたらんは、時の花に合ふべしや。これにて知るべし。

ただ、花は、見る人の心にめずらしきが花なり。しかれば、花伝の花の段に、「物数を極めて、工夫を尽くして後、花の失せぬ所をば知るべし」とあるは、この口伝なり。されば、花とて別にはなきものなり。物数を尽くして、工夫を得て、めづらしき感を心得るが花なり。「花は心、種は態」と書けるも、これなり。

物まねの鬼の段に、「鬼ばかりをよ

くせん者は、鬼の面白き所をも知るまじき」とも申したるなり。物数を尽くして、鬼をめづらしくし出だしたらんは、めづらしき所花なるべきほどに、面白かるべし。余の風体はなくて、「鬼ばかりをする上手」と思はば、「よくしたり」とは見ゆるるとも、めづらしき心あるまじければ、見所に花はあるべからず。「巖に花の咲かんがごとし」と申したるも、鬼をば、強く、恐ろしく、肝を消す様にするならでは、およその風体なし。これ巖なり。花といふは、余の風体を残さずして、幽玄至極の上手と人の思ひ慣れたる所に、思ひの外に鬼

をすれば、めづらしく見ゆるる所、
これ花なり。しかれば、鬼ばかりを
せんずる為手は、巖ばかりにて、花
はあるべからず。

一、細かなる口伝に云はく、音曲・舞・はたらき・振り・風情、これまた同じ心なり。これは、いつもの風情・音曲なれば、「さやうにぞあらんずらん」と、人の思ひ慣れたる所を、さのみに住せずして、心根に、同じ振りながら、もとよりは軽々と風体をたしなみ、いつもの音曲なれども、なほ故実をめぐらして、曲を色取り、声色をたしなみて、我が心にも「今ほどに執する事なし」と、大事にしてこの態をすれば、見聞く人、「常よりもなほ面白き」など、批判に合ふことあり。これは、見聞く人のため、めずらしき心にあらずや。

しかれば、同じ音曲・風情をするとも、上手のしたらんは、別に面白かるべし。下手は、もとより習ひ覚えつる節博士の分なれば、めづらしき思ひなし。上手と申すは、同じ節がかりなれども、曲を心得たり。曲といふは節の上の花なり。同じ上手、同じ花の内にてても、無上の公案を極めたらんは、なほ勝つ花を知るべし。およそ、音曲にも、節は定まれる形木、曲は上手のものなり。舞にも、手は習へる形木、品かかりは上手のものなり。

一、物まねに、似せぬ位あるべし。物まねを極めて、その物にまことに成り入りぬれば、似せんと思ふ心なし。さるほどに、面白き所ばかりをたしなめば、などか花なかるべき。たとへば、老人の物まねならば、得たらん上手の心には、ただ、素人の老人が風流延年などに身を飾りて舞ひ奏でんがごとし。もとより己が身が年寄ならば、年寄に似せんと思ふ心はあるべからず。ただその時の物まねの人体ばかりをこそたしなむべけれ。

また、老人の、花はありて年寄と見ゆるる口伝といふは、まづ、善悪、

老じたる風情をば心にかけてまじきなり。そもそも、舞・はたらきと申すは、万に、樂の拍子に合はせて、足を踏み、手を指し引き、振り・風情を拍子に当ててするものなり。年寄りぬれば、その拍子の当て所、太鼓・歌・鼓の頭よりは、ちちと遅く足を踏み、手をも指し引き、およその振り・風情をも、拍子に少し後るるやうにあるものなり。この故実、何よりも年寄の形木なり。この宛てがひばかりを心中に持ちて、その外をば、ただ世の常に、いかにもいかにも花やかにすべし。まづ、仮令も、年寄の心には、何事をも若くしたがるものなり。

さりながら、力なく、五体も重く、耳も遅ければ、心は行けども振舞のかなはぬなり。この理を知る事、まことの物まねなり。態をば、年寄の望みのごとく、若き風情をすべし。これ、年寄の若き事を羨める心・風情を学ぶにてはなしや。年寄は、いかに若振舞をすれども、この拍子に後るる事は、力なくかなはぬ理なり。年寄の若振舞、めづらしき理なり。老木に花の咲かんがごとし。

一、能に十体を得べき事。十体を得たらん為手は、同じ事を一廻り一廻りづつするとも、その一通りの間久しかるべければ、めづらしかるべし。十体を得たらん人は、その内の故実・工夫にては、百色にもわたるべし。まづ、五年・三年の内に、一遍づつも、めづらしくし替ふるやうならんずる宛てがひを持つべし。これは、大きなる安立なり。または、一年の内、四季折節をも心にかくべし。また、日を重ねたる申樂、一日の内は申すに及ばず、風体の品々を色取るべし。か様に、大綱より初めで、ちちとある事までも、自然自然に

心にかくれば、一期、花は失せまじきなり。

また云はく、十体を知らんよりは、年々去来の花を忘るべからず。年々去来の花とは、たとへば、十体とは物まねの品々なり。年々去来とは、幼なかりし時のよそほひ、初心の時の態、手盛りの振舞、年寄りての風体、この時分時分の、おのれと身にありし風体を、みな当芸に一度に持つ事なり。ある時は児・若族の能かと見え、ある時は年盛りの為手かと覚え、または、いかほども臈たけて、功入りたる様に見えて、同じ主とも見えぬ様に能をすべし。これす

なはち、幼少の時より老後までの芸を、一度に持つ理なり。さるほどに、「年々去り来る花」とは言へり。

ただし、この位に至れる為手、上代・末代に見も聞きも及ばず。亡父の若盛りの能こそ、臆たけたる風体ことに得たりけるなど聞き及びしか。四十有余の時分よりは、見慣れし事なれば、疑ひなし。自然居士の物まねに、高座の上にての振舞を、時の人、「十六七の人体に見えし」なんど沙汰ありしなり。これは、まさしく人も申し、身にも見たりし事なれば、この位に相応したりし達者かと覚えしなり。か様に、若き時分には行く末

の年々去来の風体を得、年寄りては過ぎし方の風体を身に残す為手、二人とも、見も聞きも及ばざりしなり。

されば、初心よりのこのかたの芸能の品々を忘れずして、その時々・用々に従つて取り出だすべし。若くては年寄の風体、年寄りては盛りの風体を残す事、めづらしきにあらずや。しかれば、芸能の位上がれば、過ぎし風体をし捨てし捨て忘るる事、ひたすら花の種を失ふなるべし。その時々によりし花のままにて、種なければ、手折れる枝の花のごとし。種あらば、年々時々頃になどか会はざらん。ただかへすがへす、初心

を忘るべからず。されば、常の批判にも、若き為手をば、「早く上がりたる」「功入りたる」など褒め、年寄りたるをば、「若やぎたる」など批判するなり。これ、めづらしき理ならずや。十体の内を色取らば、百色にもなるべし。その上に、年々去来の品々を一身当芸に持ちたらんは、いかほどの花ぞや。

一、能に、万用心を持つべき事。

仮令、怒れる風体にせん時は、柔かなる心を忘るべからず。これ、いかに怒るとも、荒かるまじき手立なり。

怒れるに柔かなる心を持つ事、めづらしき理なり。また、幽玄の物まねに、強き理を忘るべからず。これ、一切、舞・はたらき・物まね、あらゆる事に住せぬ理なり。

また、身をつかふ内にも心根あるべし。身を強く動かす時は、足踏を盗むべし。足を強く踏む時は、身をば静かに持つべし。これは筆に見えがたし。相對しての口伝なり。これは花習の題目にくはしく見えたり。

一、秘する花を知る事。秘すれば花なり、秘せずば花なるべからずとなり。この分目を知る事、肝要の花なり。そもそも、一切の事、諸道芸において、その家々に秘事と申すは、秘するによりて大用あるがゆゑなり。しかれば、秘事といふ事をあらはせば、させる事にもなきものなり。これを、「させる事にもなし」と言ふ人は、いまだ秘事といふ事の大用知らぬがゆゑなり。

まづ、この花の口伝におきても、「ただめづらしきが花ぞ」と皆人知るならば、「さてはめづらしき事あるべし」と思ひ設けたらん見物衆の前

にては、たとひめづらしき事をするとも、見手の心にめづらしき感はあるべからず。見る人のため花ぞとも知らでこそ、為手の花にはなるべけれ。されば、見る人は、ただ思ひの外に面白き上手とばかり見て、これは花ぞとも知らぬが、為手の花なり。さるほどに、人の心に思ひも寄らぬ感を催す手立、これ花なり。

たとへば、弓矢の道の手立にも、名将の案・計らひにて、思いの外なる手立てにて、強敵にも勝つ事あり。これ、負くる方のためには、めづらしき理に化かされて破らるるにてはあらずや。これ、一切の事、諸道芸

において、勝負に勝つ理なり。か様の手立も、事落居して、かかる計り事よと知りぬれば、その後はたやすけれども、いまだ知らざりつるゆゑに負くるなり。さるほどに、秘事とて、一つをば我が家に残すなり。

ここを以て知るべし。たとへあらはさずとも、かかる秘事を知れる人よとも、人には知られまじきなり。人に心を知られぬれば、敵人油断せずして用心を持たば、かへつて敵に心をつくる相なり。敵方用心をせぬ時は、こなたの勝つ事、なほたやすかるべし。人に油断をさせて勝つ事を得るは、めづらしき理の大用なる

にてはあらずや。さるほどに、我が家の秘事とて、人に知らせぬを以て、生涯の主になる花とす。秘すれば花、秘せねば花なるべからず。

一、因果の花を知る事。極めなるべし。一切みな因果なり。初心よりの芸能の数々は因なり。能を極め、名を得る事は果なり。しかれば、稽古する所の因疎かなれば、果を果たす事も難し。これをよくよく知るべし。

また、時分にも恐るべし。去年盛りあらば、今年は花なかるべき事を知るべし。時の間にも、男時・女時とてあるべし。いかにすれども、能にも、よき時あれば、かならず悪き事またあるべし。これ、力なき因果なり。これを心得て、さのみ大事になからん時の申樂には、立合勝負に、それほどに我意執を起こさず、骨をも

折らで、勝負に負くるとも心にかけて、手を貯ひて、少な少なと能をすれば、見物衆も「これはいか様なるぞ」と思ひ醒めたる所に、大事の申樂の日、手立を変へて、得手の能をして、せいれいを出だせば、これまた、見る人の思ひの外なる心出で来れば、肝要の立合、大事の勝負に、定めて勝つ事あり。これ、めづらしき大用なり。この程悪かりつる因果に、またよきなり。

およそ、三日に三庭の申樂あらん時は、指寄りの一日などは、手を貯ひてあひしらひて、三日の内にことに折角の日と覚しからん時、よき

能の得手に向きたらんを、眼精を出だしてすべし。一日の内にてても、立合なんどに、自然女時に取り合ひたらば、初めをば手を貯ひて、敵の男時、女時に下がる時分、よき能を、揉み寄せてすべし。その時分、またこなたの男時に返る時分なり。ここにて能よく出で来ぬれば、その日の第一をすべし。

この男時・女時とは、一切の勝負に、定めて一方色めきて、よき時分になる事あり。これを男時と心得べし。勝負の物数久しければ、両方へ移り替り移り替りすべし。ある物に云はく、「勝負神とて、勝つ神・負く

る神、勝負の座敷を、定めて守らせ給ふべし」。弓矢の道に宗と秘する事なり。敵方の申樂よく出で来たらば、勝神あなたにましますと心得て、まづ恐れをなすべし。これ、時の間の因果の二神にてましますば、両方へ移り替り移り替りて、また我が方の時分になると思はん時に、頼みたる能をすべし。これすなはち、座敷の内の因果なり。かへすがへす、疎かに思ふべからず。信あれば徳あるべし。

一、そもそも、因果とて、よき・悪しき時のあるも、公案を尽くして見るに、ただ、めづらしき・めづらしからぬの二つなり。同じ上手にて、同じ能を、昨日・今日見れども、面白やと見えつる事の、今また面白くもなき時のあるは、昨日面白かりつる心慣らひ、今日はめづらしからぬによりて、悪しと見るなり。その後、またよき時のあるは、先に悪かりつるものと思ふ心、まためづらしきに返りて、面白くなるなり。

されば、この道を極め終りて見れば、花とて別にはなきものなり。奥義を極めて、万にめづらしき理を我れ

と知るならでは、花はあるべからず。
経に云はく、「善悪不二、邪正一如」とあり。本来よりよき・悪しきとは、何を以て定むべきや。ただ、時によりて、用足る物をばよき物とし、用足らぬを悪しき物とす。この風体の品々も、当世の数人、所々にわたりて、その時のあまねき好みによりて取り出だす風体、これ、用足るための花なるべし。ここにこの風体をもてあそめば、かしこにまた余の風体を賞翫す。これ、人々心々の花なり。いづれをまことにせんや。ただ、時に用ゆるを以て、花と知るべし。

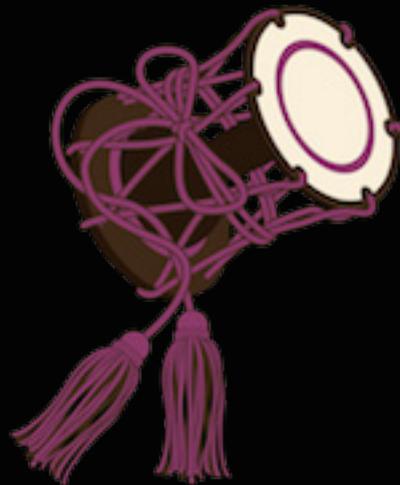
一、この別紙の口伝、当芸において、家の大事、一代一人の相伝なり。たとひ一子たりといふとも、無器量の者には伝ふべからず。「家、家にあらず、継ぐを以て家とす。人、人にあらず、知るを以て人とす」と言へり。これ、万徳了達の妙花を極むる所なるべし。

一、この別紙の条々、先年、第四郎相伝するといへども、元次、芸能感人たるによつて、これをまた伝ふる所なり、秘伝々々。

応永廿五年六月一日 世（花押）



序



前頁

次頁

目次へ

そもそも、長寿延命の猿樂の芸事は、

その起源を尋ねてみると、

それ、申楽延年の事わざ、その源を尋

ある説では仏陀（釈迦）の時代の印度より起こり、

ぬるに、あるいは仏在所より起り、ある

ある説では日本の神代から伝わっているとされるが、

時が流れ、

いは神代より伝はるといへども、時移り、

時代も遠く隔たってしまったので、その当初の芸風をまねる（ありさまを知る）ことは、もはやできない。

代隔たりぬれば、その風を学ぶ力、及びが

近頃（近年）多くの人々が愛好している所の（申楽）は、

推古天皇

たし。近頃万人のもてあそぶ所は、推古

の御代に、

聖徳太子が、

秦河勝に命じて、

天皇の御宇に、聖徳太子、秦河勝に仰せ

一つは天下太平のため、

一つは人々の娯楽のため、

て、かつは天下安全のため、かつは諸人

六十六番の歌舞を演じさせ、

快樂のため、六十六番の遊宴をなして、

それを申楽と称してより今まで、

その時代その時代の人々が、

申楽と号せしよりこのかた、代々の人、

花鳥風月の景色を愛でることに名を借りて、

この遊びを媒介して来たのである（この遊びを伝えて

風月の景を借つて、この遊びの中だちと

来たのである。その後、

あの河勝の遠い子孫達が、

この芸を代々受

せり。その後、かの河勝の遠孫、この芸

け継いで、

春日大社、日吉大社の神職となった。

を相続ぎて、春日・日吉の神職たり。よ

よつて、

大和、

近江の申楽の芸人達が、

両社（春日、日吉）の神事に奉仕する

つて、和州・江州の輩、両社の神事に従

ことが、今も盛んに行われている。

ふ事、今に盛んなり。

だから、

古い芸をまね、

新しい芸を取り入れる（工夫する）

されば、古きを学び、新しきを賞

中にも（にせよ）、

決して過去、現在、未来へと継承されていく芸道の流れ（芸の伝統）

する中にも、全く風流を邪にする事

を汚してはならない。

つまり、

謡の言葉が下品でなく（上品で）、

なかれ。ただ、言葉卑しからずして、

（舞台で舞い演じる）姿が優美なことを、

正統な芸を身に授かった（身につけた）達人と

姿幽玄ならんを、享けたる達人とは

いふべきであろう。

申すべきをや。

まず、

この道（申樂の道）で大成しようと思つてゐる者は、

まづ、この道に至らんと思はん者は、

（申樂以外の）他の道を行つては（に入つては）いけない。

ただし、

和歌の道は

非道を行はずべからず。ただし、歌道

風雅に親しみ寿命を延ばす飾り（教養）であるから、

とりわけこれを用いるべ

は風月延年の飾りなれば、もつとも

きた。（身につけるべきだ。）

これを用ふべし。

さて、

若い頃から今まで、

目に見て耳

およそ、若年よりこのかた、見聞

に聞き及んでいる所の稽古の数を、

あらかた書き記しておくこと

き及ぶ所の稽古の条々、大概注し置

とする。

く所なり。

一、好色、

博奕、

大酒は、

三つの重大な戒めであり、これは

一、好色、博奕、大酒、三重戒、これ

古き人（観阿弥）が決めた掟（約束事）である。

古人の掟なり。

一、

稽古は厳しく行え、

慢心からの強情はあつてはならない。

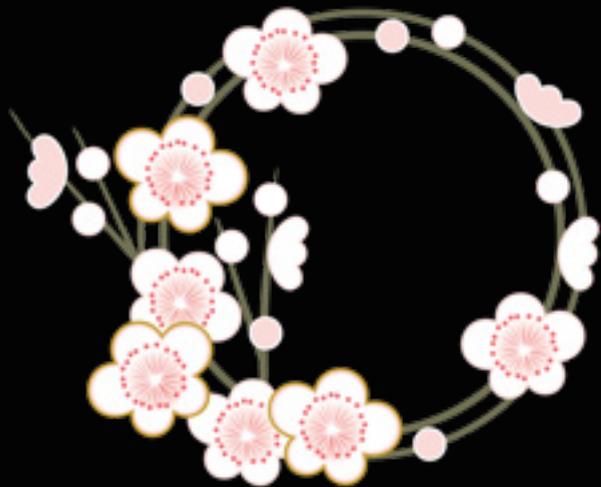
一、稽古は強かれ、情識はなかれ、となり。



次頁

風姿花伝第一
年来稽古条々

目次へ



前頁

七歳

この申樂の芸においては、

大体七歳を稽古の仕始めとする。

一、この芸において、大方七歳を

この頃の能の稽古は、

以て初めとす。この頃の能の稽古、

必ず、

その子の自然とやり出す事に、

かならず、その者自然とし出だす事に、
得意とする芸があるものだ。

得たる風体あるべし。舞・はたらき

所作（演技の動作）の中、

または怒りの演技（怒る鬼の物まね）であつても、

の間、音曲、もしくは怒れる事など

自然にやり始めた演技のしぐさを、

にてもあれ、ふとし出ださんかかりを、
するまに、

思いのままに（自由に）やらせなさい。

うちまかせて、心のままにせさすべし。
むやみに「そこがよい」「ここが悪い」と教えてはならない。

さのみに「よき」「悪しき」とは教ふ

あまり厳しく注意すると、

べからず。あまりにいたく諫むれば、

能が面倒くさくなつてしまふので、

童は氣を失ひて、能物ぐさくなりたち

そのまま能の上達も止まつてしまふ。

ぬれば、やがて能は止まるなり。

ただ、

謡・

所作（演技の動作）

舞など（基本的なこと）以外

ただ、音曲・はたらき・舞などなら
はさせてはならない。
むやみに物まねは、

ではせさすべからず。さのみの物まね

たごえつぎるとしても、

教えてはいけない。

は、たとひすべくとも、教ふまじきなり。

(貴人が臨席する)晴れ舞台などで初番の能には立たせてはいけない。
大場などの脇の申樂には立つべからず。
三番目・四番目の、
三番・四番の、頃合いのよい時に、時分のよからんずるに、
得意の芸で演じさせよ。得たらん風体をせさすべし。

十二、三より

この年齢の頃から、

もう、

だんだんと（次第に）

この年の頃よりは、はや、やうやう
声も話の調子に合うようになり、
演技もわかってくる頃なので、

声も調子にかけり、能も心づく頃なれば、
次第次第に様々な演目の能を教えなさい。

ば、次第次第に物数をも教ふべし。

まず、

稚児姿なので、

何としても愛らしい。

まづ、童形なれば、何としたるも

幽玄なり。声も立つ頃なり。二つの
声も高く響く頃である。
二つの利点がある

ので、

悪い点（短所）は隠れ、

よい点（長所）

便りあれば、悪き事は隠れ、よき事

はますます魅力的にみえる。

はいよいよ花めけり。

だいたい、

稚児姿の猿楽に、

あまり細かな物まねなどをさせては

大方、児の申樂に、さのみに細か
ならない。

なる物まねなどはせさすべからず。
演技も上達しない様子である（結果となる）。

その場にも似合わず、

当座も似合はず、能も上がらぬ相な
しかし、
上手になったのならば（上達したのならば）、

り。

ただし、堪能になりぬれば、何
してもよいだろう（どのようにやってもよいだろう）。

何を

としたるもよかるべし。児といひ、
稚児姿といひ、

少年の声といひ、

しかも上手であるならば、

何で（どう）

声といひ、しかも上手ならば、何か

（して）悪いことがあるだろう（いやありはしない）。

は悪かるべき。

しかしながら、

この花は真実の花ではない。

さりながら、この花はまことの花

ただ年頃の（若さゆえの）花である。

にはあらず。ただ時分の花なり。さ

だから、この年頃（十二、三歳頃）の稽古は、

すべてにおいて容易である。

れば、この時分の稽古、すべてすべて

したがって、

一生涯の能の上手下手が決まるわけ

易きなり。さるほどに、一期の能の定

ではないのである（一生涯続く花ではないのである）。

めにはなるまじきなり。

この頃の稽古では、

（その子の）やりやすい所を花（魅力・見せ場）にして、

この頃の稽古、易き所を花に当てて、

演技を大切にすべきである。

能の所作（演技の動作）も確実にして、

態をば大事にすべし。はたらきをも確

謡も文字にぴったりと合（謡の文句を明瞭に発音し）、

やかに、音曲をも文字にさはさと当

舞も型をしっかりと決めて（身につけて）、

（はたらき・音曲・舞を）大事（大切）

たり、舞をも手を定めて、大事にして稽

古にして稽古すべきである。

古すべし。

十七、八より

この頃（十七、八歳の頃）はまた、

あまりに大変なので、

この頃はまた、あまりの大事にて、

稽古は多くしない。

まず、

声が変わってしまう（声変わりする）ので、

稽古多からず。まづ、声変りぬれば、

第一の花が（魅力）なくなってしまう。

体も腰が高くなる（背が伸びる）ので、

第一の花失せたり。体も腰高になれ

姿の愛らしさがなくなつて、

過ぎてしまった過去の、

ば、かかり失せて、過ぎし頃の、声

声も美しい盛りで、

姿も花やかに（愛らしく）、

（それによつて）たやすく演じられた頃

も盛りに、花やかに、易かりし時分

からの変化（転換期）に、演じ方がまったく変つてしまうので、

の移りに、手立はたと變わりぬれば、

やる気をなくしてしまふ。

その上、

観客達もおかしそうな様子を見せるので、

気を失ふ。結句、見物衆もをかしげ

恥ずかしさといひ、

なる気色見えぬれば、恥かしさと申し、

あれやこれらで、

この段階で嫌になつてしまふ。

かれこれ、ここににて退屈するなり。

この頃の稽古では、

ただもつ、

指をさされて人に笑われ

この頃の稽古には、ただ、指をさし

ても、

それを気にせず、

て人に笑はるるとも、それをばかへ

屋内で、

声の届く範囲の調子で、

りみず、内にては、声の届かんずる

夜間・明け方に発声練習を行い、

調子にて、宵・暁の声を使ひ、心中

心中では神仏に願掛けを行い、

一生の分かれ道はここであると、

には願力を起こして、一期の境ここ

命にかけて能をやめないよりほかは、

なりと、生涯にかけて能を捨てぬより

稽古のやりようがない。

ここで（稽古を）やめると

外は、稽古あるべからず。ここにて捨

そのまま能は上達しない。

つれば、そのまま能は止まるべし。

だいたい、

調子（声の高低）は生まれつきの声の質によつて決まるといふけれども、

総じて、調子は声によるといへども、

黄鐘調・盤渉調を用いよ（目安にせよ）。

調子にむやみにあわせ

黄鐘・盤渉を以て用ふべし。調子にさ

ると（無理な調子で謡おうとする）。

姿勢に癖（悪い癖）が出て来るものである。

のみかかれば、身形に癖出で来るもの

また、

声も年をとつてからだめになるだろう。

なり。また、声も年寄りて損ずる相なり。

二十四、五

この頃は、

一生の芸の（上手、下手が）定まる（決まる）最初である。

この頃、一期の芸能の定まる初めな

したがって、稽古の境目（転換点）である。

り。さるほどに、稽古の境なり。声も

声もすつかり直り（よくなり）、

体（体型）も安定する時期である。

すでに直り、体も定まる時分なり。さ

（この（能の）道に二つの果報（宝・よい事）がある。

れば、この道に二つの果報あり。声と

声と姿である。

この二つ（声と姿）は、

この時期に定まる（決まる）ので

身形なり。これ二つは、この時分に定

ある。

（この二つは、）盛り年（若い盛り）にふさわしい芸が生まれる所（源

まるなり。年盛りに向かふ芸能の生ず

である。

る所なり。

したがって、

観客も、

それ、

さるほどに、よそ目にも、すは、上

上手な役者が出て来たといって、

人（観客）も注目するのである。

手出で来たりとて、人も目に立つるな

（競演において）かつては名声のあった役者などが相手であっても、

その場の花（若さ故の

り。もと名人などなれども、当座の花

一時的魅力）が新鮮なため、競演の勝負で一度でも勝つてしまうと、

にめづらしくして、立合勝負にも一旦

人も過大評価して、

本人も自分は上手だと思ひ込

勝つ時は、人も思ひ上げ、主も上手と

むのである。

これは、

かえすがえすも本人のためにはよく

思ひ染むるなり。これ、かへすがへす

ないことである。

これも本当の花ではない。

主のため仇なり。これもまことの花

にはあらず。年の盛りと、見る人が一時的に心に
 珍しさ(目新しさ・新鮮さ)を感じることから来る花である。
 本日の目利き

一旦の心のめづらしき花なり。まこ
 ならばそれを見分けるだろう。

この目利きは見分くべし。

この頃の花こそ初心という頃のものであるのを、

この頃の花こそ初心と申す頃なる

芸を極めたように本人は思ってしまう、

早くも

を、極めたる様に主の思ひて、はや

猿楽の本筋からはずれた正統でないことをして、

(名人に) 到達したかの

申楽に側みたる輪説をし、至りたる

ような芸風で演じる事は、

あきれはてたことである。

風体をする事、あさましき事なり。

たとえ、

人も褒め(人に褒められ)、

名声のあつた役者に勝つたとしても、

たとひ、人も褒め、名人などに勝つ

これは一時の珍しさ(目新しさ・新鮮さ)の花であると自覚して、

とも、これは一旦めづらしき花なり

ますます物まねを素直に正しく(稽古して) 確実に身に

と思ひ悟りて、いよいよ物まねをも

つけ、

名声を得ている人に(能に関する) 事を具体的に問い、

直にし定め、名を得たらん人に事を

稽古をますます多くしなければならぬ。

細かに問ひて、稽古をいや増しにす

だから、

若い盛りの花を本当の花と思う心が、

べし。されば、時分の花をまことの

真実の花にいつそう遠ざかる心なのである。

花と知る心が、真実の花になほ遠ざ

ただもう、

人はみな、

かる心なり。ただ、人ごとに、この

この一時の花に迷つて（自分を見失つて）、
時分の花に迷ひて、

やがて花はなくなつてしまふことにも気づかない。
初心というのはこの頃の事である。

るをも知らず。初心と申すはこの頃の

の事なり。

（以下のことを）よくよく考えを巡らして思いなさい。

自分の芸位（芸の実力）

一、公案して思ふべし。

我が位の

程度をよく認識していれば、

その程度の花は一生失わ

程をよくよく心得ぬれば、その程の

れない。

花は一期失せず。位より上の上手と

思えば、（自惚れば、）

もともと身に付いていた芸位（芸の実力）の花もなくなるのである。

思へば、もとありつる位の花も失す

よくよく心得ておくべきである。

るなり。よくよく心得べし。

三十四、五

この頃の能は、

(能役者としての) 盛りの絶頂である。

この頃の能、盛りの極めなり。こ

この時期に、

この風姿花伝の条々をよく研究し理解して、

こにて、この条々を究め悟りて、堪

上達していれば、

きつと天下(都)の人々にも(名人・達人)と認められ、

能になれば、定めて天下に許され、

名声を得るだろう。

もし、

この時期に、

名望を得つべし。もし、この時分に、

天下(都)の人々に認められることも少なく、

名声も思うほどでなければ、

天下の許されも不足に、名望も思ふ

どんな上手(な役者)であっても、

程もなくば、いかなる上手なりとも、

未だに真の花(本当の芸の魅力)を極めていない役者であると知る(自覚する)べきである。

未だまことの花を極めぬ為手と知る

もし極めなければ、

四十歳より能は下がっていく(退歩す

べし。もし極めずば、四十より能は

る)だろう。

それは、

後になつて現れる証拠である(歴史が証明するだろう)。

下るべし。それ、後の証拠なるべし。

したがって、

上がる(上達する)のは三十四五までの頃、

さるほどに、上るは三十四五までの

下がる(退歩する)のは四十以後である。

返す返す、

頃、下るは四十以来なり。かへすが

この頃に天下(都)の人々に認められることがなければ、

へす、この頃天下の許されを得ずば、

能を極めていると思つてはいけな

能を極めたるとは思ふべからず。

こころなおいそ慎むべき(謙虚になるべき)である。

この頃は、

ここにてなほ慎むべし。この頃は、

これまでの能をしつかり身につけ、

過ぎし方をも覚え、またこれから先の演じ方をも自覚する時期また行く先の手

である。

この頃に能を極めなければ、

立てをも覚る時分なり。この頃極め

その後天下（都）の人々に認められることは、

ずば、この後天下の許されを得ん事、

返す返す難しいだらう。

かへすがへす難かるべし。

四十四、五

この頃からは、

能の演じ方は、

この頃よりは、能の手立て、大方大きく変わってしまう。たとえ、天下(都)の人々に認められ、

変るべし。たとひ、天下に許され、能の奥義を会得していたとしても、

それにつけても、

能に得法したりとも、それにつけて

よい相手方の役者を持つ。

能は退歩せず

も、よき脇の為手を持つべし。能は

とも、

だんだんと年を取っていくので、

下がらねども、力なく、やうやう年

身体の花も、

他人の目に映る花もなくなつて

たけ行けば、身の花も、よそ目の花

しまふ。

ます、

抜群の美男子ならばいざ知らず、

も失する也。まづ、すぐれたらん美

よい容姿の人であつても、

素顔で演じる

男は知らず、よき程の人も、直面の

申樂能は、

年を取つてからは見られたものではない。

申樂は、年寄りては見られぬものなり。

したがつて、

この一分野(直面の申樂)は失われてしまふ。

さるほどに、この一方は欠けたり。

この頃からは、

むやみに細かい物まねをしてはならない。

この頃よりは、さのみに細かなる

だいたい自分に似合つて

物まねをばすまじきなり。大方似合

いる芸風を、

樂々と、

無理せずに、

ひたる風体を、やすやすと、骨を

相手方の役者に花を持たせて(自分は目立たぬように控えめに演技をし)、

折らで、脇の為手に花を持たせて、

引き立て役となつて自分こそが脇役のように

控えめ控えめに演じなさい。

あひしらひの様に、少な少なとすべし。
たとえ相手方の役者がいなかったとしても、

たとひ脇の為手なからんにつけても、
なおさら細かく身体を動かす能は演じてはならない。

いよいよ細かに身を砕く能をばすま

どうやつても、

はた目には花(魅力)はない。

じきなり。何としても、よそめ花なし。

もし、

この頃までなくならない花こそが(を持つているなら)、

もし、この頃まで失せざらん花こそ、

(それこそが) 本当の花というものであろう。

それは、

まことの花にてはあるべけれ。それ

五十歳近くまでなくならない花を持つているような役者ならば、

は、五十近くまで失せざらむ花を持

四十歳以前に天下の名声を得ているはずだ。

ちたる為手ならば、四十以前に天下

たとえ天下(都)の人々に認められた役者で

の名望を得つべし。たとひ天下の許

あつても、

そのような上手

されを得たる為手なりとも、さやう

特によく我が身を知っているはずだから、

の上手は、ことに我が身を知るべけ

ますますよい相手役を選ぶように心がけ、

れば、なほなほ脇の為手をたしなみ、

欠点の見える能をするはずもない。

さのみ身に身を砕きて、難の見ゆべき

このように自分自身を知る心が、

能をばすまじきなり。かやうに我が

奥義を会得した人の心である。

身を知る心、得たる人の心なるべし。

五十有余

この頃（五十歳を越えて）からは、

だいたい、

何もしないより他は方法が

あるまい。

この頃よりは、大方、せぬなら
「麒麟も老いては驚馬に劣る」
 では手立てあるまじ。「麒麟も老い

と言われている。

ては驚馬に劣る」と申すことあり。

しかしながら、

本当に奥義を会得した達人ならば、

さりながら、まことに得たらん能者な

演じられる能の演目がすべてなくなり、

善かれ悪し

らば、物数はみなみな失せて、善悪
かれ見所は少なくなつたとしても、
花は残るものだ。

見所は少なしかも、花は残るべし。

亡き父観阿弥は、

五十二歳の五月十九日に死去

亡父にて候ひし者は、五十二と申

したが、

しし五月十九日に死去せしが、その
その月の四日（五月四日）に、
駿河の国浅間神社の神前で神に奉納する能を演じさせて

月の四日の日、駿河の国浅間の御前
その日の申樂（能）は、
とりわけ

にて法樂仕る。その日の申樂、こと
見物人は身分の上下を問わず（すべての人が、一様に

に花やかにて、見物の上下、一同に
だいたい、
その頃は、

褒美せしなり。およそ、その頃、物
数々の演目の主役をもちや後進の者（世阿弥）に譲り、
無理のない箇所を

数をばはや初心に譲りて、易き所を
控えめに、
工夫をこらして演じていたが、

少な少など、色へてせしかども、花

花はいつそう増して見えた。

はいや増しに見えしなり。これは、ま

真に身に付いた花であるゆえに、

ことに得たりし花なるがゆゑに、能能は、

枝葉（余計な演技）も少なく、

老木（老人）になるまで、

は、枝葉も少なく、老木になるまで、

花は散らずに残ったのである。

これが、

私が目の

花は散らで残りしなり。これ、眼の

当たりにした、

老骨に残った花の証拠である。

あたり、老骨に残りし花の証拠なり。

年来の稽古については以上とする。

年来稽古 以上



風姿花伝第二 物学条々

目次へ



序

物まねの数々の種類を、

文章に書き尽くす（説明し尽くす）のは困難だ。

物まねの品々、筆に尽くしがたし。
けれども、

この申樂（能）の道の最も大切なものであるから、

さりながら、この道の肝要なれば、
その数々の種類を、

よくよく研究・工夫に励まなければならない。

その品々を、いかにもいかにもたし

大体（物まねとは）、

すべての事を余す所なくよく似せようとする

なむべし。およそ、何事をも残さず
けれども、

けれども、

よく似せんが本意なり。しかれども、

事（似せる対象）によって、

（似せる程度に）濃い薄いの差があることを

また、事によりて、濃き薄きを知る
知っておくべきである。

べし。

まず、

かしこくも国王・大臣を始め、

まづ、国王・大臣より始め奉りて、

公家のご様子、

武家のお振る舞いは、

公家の御たたずまひ、武家の御進退

（私たち庶民が）まねできるものではないので、

は、及ぶべき所にあらざれば、十分

十分になる（まねる）事は難しい。

けれども、

詳細に言葉使い

ならん事難し。さりながら、よくよ

振舞（様子）を探し求めて、

見物客のご意見を

く言葉を尋ね、品を求めて、見所の
待つべきであろう。

御意見を待つべきをや。

その他、

高位の人々のお振舞（ご様子）、

花鳥風月の風雅な行い、

その外、上職の品々、花鳥風月の

ぜひとも、ぜひとも、細かに似すべきである。

事わぎ、いかにもいかにも細かに似

農夫や粗野な人々の事となると、

すべし。田夫・野人の事に至りては、

むやみに細かに卑しい（下賤な）有様（様子）を似せてはいけぬ。

さのみに細かに卑しげなる態をば似

たとえば、

木こり・

草刈り・

炭焼き・

すべからず。仮令、木樵・草刈・炭

汐汲みなどの、

風雅な演技にもなりそうな仕事の有様（様子）ならば、

焼・汐汲などの、風情にもなりつべ

細かに似せてもよいであろう。

き態をば、細かにも似すべきか。そ

（しかし）それよりなお卑しい下級の職業は、

れよりなほ卑しからん下職をば、さ

むやみに似せてはならない。

これは、

のみに似すまじきなり。これ、上

貴人の方々の目にお見せしてはならない。

もし見られたならば、

方の御目に見ゆべからず。もし見え

あまりに卑しいので、

面白いはずがない。

ば、あまりに卑しくて、面白き所あ

この案配（細かに似せるか似せないか）を、

るべからず。この宛てがひを、よく

よくよく心得るべきである。

よくよく心得べし。

女

およそ、

女性の姿は、

若い役者の演技にふさわし事（もの）

およそ、女がかり、若き為手のた

である。

しかしながら、

しなみに似合ふ事なり。さりながら、

これは、

とても難しい事（演技）である。

これ、一大事なり。

まず、

装いが見苦しいと、

まったく見られた

まづ、仕立見苦しければ、さらに

ものではない。

女御・更衣など（高貴な人々）を似せる事は、

見所なし。女御・更衣などの似せ事

（われわれ能役者が）

容易にその（高貴な御夫人達の）お振舞いを見る事（見る機会）は

は、たやすくその御振舞を見る事なけ

ないのだから、

よくよく（しつかりと）調査研究すべきである。

衣や

れば、よくよくうかがふべし。衣・

袴の着方にも、

すべてきまりがある、

尋ねて調べるべきである。

袴の着様、すべて私ならず、尋ぬべし。

普通の世間一般の女性の姿は、

（われわれ能役者でも）

ただ世の常の女がかりは、常に見

常に見慣れているから、

本当に容易だろう。

慣るる事なれば、げにはたやすか

一般の衣・小袖の出立ち（袴をはかない一般女性の出立ち）は、

るべし。ただ衣・小袖の出立は、大

まずまずといったところで十分だ。

方の体、よしよしとあるまでなり。

曲舞・

白拍子、

または物狂いなどの女性の姿は、

舞・白拍子、または物狂などの女が

扇であれ、

かざし（花や木の枝）であれ、

かり、扇にてもあれ、かざしにても

あれ、いかにもいかにも弱々と、持ちさだめずして持つべし。
できるだけ弱々しく、固く握らずに持つべきである。

衣や袴なども長々と足を包み隠すように着て、

衣・袴などをも長々と踏み含みて、
腰膝はまつすぐに、身体はしなやかでなければならぬ。

腰膝は直に、身はたをやかなるべし。
顔の保ち方は、仰向くと見た目が悪く見える。

顔の持ち様、あをのけば見目悪く
うつむくと後ろ姿が悪い。

見ゆ。うつぶけば後姿悪し。さて、
一方、首の保ち方を強く保てば（首を強く保てば）、女性に似ない。

首持ちを強く持てば、女に似ず。い
できるだけ袖の長い着物を着て、

かにもいかにも袖の長き物を着て、
手先をも見せてはいけない。

手先をも見すべからず。帯などをも
帯なども弱々しく締めるべきである。

弱々とすべし。
つまり、

されば、仕立をたしなめとは、か
装いを工夫せよとは、

かりをよく見せんとなり。いづれの
姿をよく（美しく）見せよということである。

物まねなりとも、仕立悪くてはよか
装いが悪くてはよいはずはないが、

るべきかなれども、ことさら女がか
とりわけ女性の姿は、

り、仕立を以て本とす。
装いを第一（根本）とする。

老人

老人の物まねは、

この道（能の道）の奥義である。

老人の物まね、この道の奥義なり。
能役者の芸位（芸の実力）が、すぐに観客の目に現れる（わかっってしまう）のが老人の物まねなので、
能の位、やがてよそ目にあらはるる

これが、最も難しいのだ。

事なれば、これ、第一の大事なり。

だいたい、

能をかかなりの程度まで極めた役者であつても、

およそ、能をよき程極めたる為
手も、老いたる姿は得ぬ人多し。

たとえば、

老いた姿の演技は会得していない（不十分な）人が多い。

たとへば、木樵・汐汲の態物など
と（似せおおせると）、

木樵・汐汲といった風情のある仕事をする老人の姿をまねおおせる

すぐに上手であると言う（ほめ

の翁形をし寄せぬれば、やがて上手
る）事、

これは、

誤った（間違つた）批評である。

と申す事、これ、誤りたる批判なり。

冠・直衣・烏帽子・狩衣をつけた老人の姿は、

冠・直衣・烏帽子・狩衣の老人の

高度な技を会得した名人でなければ似合うはずがない。

姿、得たらむ人ならでは似合ふべか
稽古を積んで、

芸位が高くなつていなければ

らず。稽古の功入りて、位上らでは

（芸の実力が上がっていないければ）似合うはずがない。

似合ふべからず。

また、

花がなければ面白い所（面白さ）もあるまい。

また、花なくば面白き所あるまじ。

いったい、

老人の立ち振舞（身のこなし）を演じるのに、

年寄りだからといって、

およそ、老人の立ち振舞、老いぬれ

ばとて、腰・膝をかがめ、腰・膝をかがめ、身を縮めたのでは、身をつむ

れば、花失せて、古様に見ゆるなり。花がなくなり、古くさく見えてしまう。

さるほどに、面白き所稀なり。面白所（面白さ）が少ない。ただ、

大方、いかにもいかにもそぞろかで、大体において、決してそわそわせず、上品に振舞うべきである。

しとやかに立ち振舞ふべし。とりわけ、老人の舞う姿は、この上なく

ことさら、老人の舞がかり、無上花がありながらも年寄りと見える工夫（課題）を、

の大事なり。花はありて年寄と見ゆ詳しく研究せねばならない。（それは）ただ、

るる公案、くはしく習ふべし。老木に花が咲いたが如きであらねばならない。

老木に花の咲かんがごとし。

直面

これもまた難しい。

これもまた難しい。
これまた大事なり。およそ、もと

世俗の者なのだから、

(世俗の者を演じるのは)容易い事であるは

より俗の身なれば、易かりぬべき事

ずなのだが、

不思議に、

能の芸位(芸の実力)が上がらなくては、

なれども、不思議に、能の位上らね

直面の能は見られたものではない。

ば、直面は見られぬものなり。

まず、

これ(直面の能)は、

おおよそ、

その役その役によって(演技)

まづ、これは、仮令、その物その

る役ごとに)まねる事は、

当然である。

顔つき

物によりて学ばん事、是非なし。面

まで似せられる理由もない(似せられるはずもない)のに、

いつもの顔

色をば似すべき道理もなきを、常の

に変えて、

顔の表情を作ろうとする事がある。

顔に変へて、顔気色をつくろふ事あ

まったく見られたものではない。

(演技における)

り。さらに見られぬものなり。振舞

振舞や所作などは、

その役柄らしく似せるべきだ。

顔の表情は、

風情をば、その物に似すべし。顔気

できるだけ自分らしく、

色をば、いかにもいかにも己なりに、

取りつくろふことなく自然にしているべきだ。

つくろはで直に持つべし。

物狂

(物狂は) 能の中でも最も面白さの限りを尽くした芸である。

この道の第一の面白尽くの芸能なり。
物狂は種類の数が多いので、
この物狂という分野を

得意とする芸の達人は、
り。物狂の品々多ければ、この一道
得意とする芸の達人は、
に得たらん達者は、十方へわたるべ
あらゆる(分野(の物まね)に通じるだろう。

何度も繰り返し、

し。くり返しくり返し、公案の入る
工夫研究するべき必要のある
稽古の対象である。

べきたしなみなり。

たとえば、

憑物の物狂いの数々では、

神・仏・生霊・死霊のたたりなどは、

仮令、憑物の品々、神・仏・生霊・

その憑物本体をまねれば、

死霊の咎めなどは、その憑物の体を
容易に演じられ、(うまく狂う)手がかりもあるだろう。
親に生き別れ、

学べば、易く、便りあるべし。親に別
子供を捜し尋ね、
妻に先立た

夫に捨てられ、

夫に捨てられ、

れ、子を尋ね、夫に捨てられ、妻に
この様な(悲嘆にくれる)思いに狂乱する物狂は、

後るる、か様の思ひに狂乱する物狂、
極めて難しい。
かなりの程度の役者でも、
ここ(憑物の物狂いで

一大事なり。よき程の為手も、ここ
あるか、悲嘆の物狂であるか)を分けず(区別せず)に、ただ一本調子に狂乱を演じるので、

を心に分けずして、ただ一遍に狂ひ
観客も感動しない。

はたらくほどに、見る人の感もなし。
(悲嘆の)思いゆえの物狂を演じるのであれば、

思いゆえの物狂をば、いかにも物思
いかにも思い詰めた様子を演技の

本来の目的にして、

ふ気色を本意に当てて、狂う所を花

にして、

心を込めて狂えば、

に当てて、心を入れて狂へば、感も、

面白い見所も、

きつと(必ず)あるだろう。

面白き見所も、定めてあるべし。か様

このような技量(演技力)で人を泣かせる(感動させる)所があるならば、

なる手柄にて人を泣かする所あらば、

この上もない達人と知っておくべきだ。(言うべきだ。)

この事を心の底からよくよく

無上の上手と知るべし。これを心底

思い分けて(わきまえて)おくべきである。

によくよく思ひ分くべし。

大体、

物狂の扮装は、

およそ、物狂の出立、似合ひたる

べき事は、

当然である。

様に出で立つべき事、是非なし。さ

しかしながら、

いつそ物狂であることを口実にして、

りながら、とても物狂に言寄せて、

時には、

何とも花やか(華麗)に扮装すべきである。

時によりて、何とも花やかに出で立

季節の花を挿頭にしてさすのもよいだろう。

つべし。時の花を挿頭に挿すべし。

また言う(つけ加えると)、

物まねではあるけれど、

また云はく、物まねなれども、心

心得ておくべき事がある。

(憑物の)物狂は憑物の本来の目的(憑依した目的)を

得べき事あり。物狂は憑物の本意を

ねらつて狂うことを演じるのであるが、

女の物狂などに、

狂ふといへども、女物狂などに、あ

あるいは修羅道に落ちた悪鬼、あるいは鬼神などが憑く(憑依する)事、

るいは修羅鬪諍・鬼神などの憑く事、

これは、何よりも悪い（よくない）事である。
 これ、何よりも悪き事なり。憑物の
（憑依した目的）をまねようとして、
女の姿で怒り狂ったのでは、

本意をせんとて、女姿にて怒りぬれ
見た目にも不釣り合いである。
（とは言え）女装（女性の姿）を本来の目的と

ば、見所似合はず。女がかりを本意
して演じれば、
憑物の意味がなくなってしまう。
また、

にすれば、憑物の道理なし。また、
男の物狂に女（女の霊）などが取り憑いてしまう事も、
同じように考

男物狂に女などの寄らん事も、同じ
えるべきである。（同様に理解すべきである。）
結局、

料簡なるべし。所詮、これ体なる能
（大切）である。
（このたぐいの能をしないことが秘訣
（このような能があるのは）能を作る人

をばせぬが秘事なり。能作る人の料
（能の台本を書く人）の思慮が欠けているからである。しかし、
能の道に

簡なきゆるゑなり。さりながら、この
経験を積んだ作者が、
その様な不釣り合いな事を

道に長じたらん書手の、さ様に似合
むやみに書く事はあるまい。

はぬ事を、さのみに書く事はあるま
こうした心得を持つ事が、（こうした事を心得ておく事が、）
大切（秘訣）である。

じ。この公案を持つ事、秘事なり。
また、
能面を着けない素顔の物狂は、
能を極めた者でなければ、

また、直面の物狂、能を極めてな
十分に演じる事はできまい。

らでは、十分にはあるまじきなり。
顔つきをそれらしくしなければ、
物狂に似ない（見えない）。

顔気色をそれになさねば、物狂に似ず。
（かと言って）会得してもいないのに（出来もしないのに）、
顔つきを変えれば、

得たる所なくて、顔気色を変ゆれば、

見られたものではない。

物まねの奥義（極意）とも言えよう。

見られぬ所あり。物まねの奥義とも

大切な申楽能の上演においては、

申しつべし。大事の申楽などには、

初心者は、

（直面の物狂を）

遠慮すべきである。

直面の難しさ、

初心の人、斟酌すべし。直面の一大

物狂の難しさ、

二つの難しさを一度（同時）に引き受け、

事、物狂の一大事、二色を一心にな

狂う場面の面白さを花（魅力）にする事は、

して、面白き所を花に当てん事、い

どんなに難しいことだろう。

よくよく稽古すべきである。

かほどの大事ぞや。よくよく稽古あ

るべし。

法師

これ（法師の物まね）は、能の道の一つではありながら、

（演じ

これは、この道にありながら、稀（たえば、

なれば、さのみの稽古いらす。仮令、たえば、

厳かに着飾つた僧正や、ならびに僧綱等（の高僧）は、

莊嚴の僧正、ならびに僧綱等は、い

かにも威儀を本として、気品のある様子をまねるべきで、

学ぶべし。それ以下の（あまり高位でない）僧形の人、遁世・遁世者、

修行の身に至りては、修行中の僧に至っては、抖擻を本とす

れば、いかにも一心に仏道に打ち込んでいる姿が、

り、大切にあらう。肝要たるべし。ただし、賦物に

よりて、思いの外（予想外に）手数のかかる事もあるだらう。思ひの外の手数に入る事も

あるべし。

修羅

これ（修羅の物まね）もまた、物まねの一分野である。

うまく演じたと

これまた、一体の物なり。よくす
もやみに演じてはならない。

面白所（面白さ）は少ない。

れども、面白き所稀なり。さのみに

源平合戦などに登場する

はすまじきなり。ただし、源平など

名高い武将の事を、

花鳥風月の風雅な趣と関連させて作っ

の名のある人の事を、花鳥風月に作

てあり、

能の（作品としての）出来ばえがよければ、何よりもまた面白い。

り寄せて、能よければ、何よりもま

こうした能には、特に花やかな所があつてほしい。

た面白し。これ、ことに花やかなる

所ありたし。

こうした形の修羅道の狂い回る演技は、

ややもすると、

これ体なる修羅の狂ひ、ややもす

鬼の振舞になつてしまふ。

または舞の手振り

れば、鬼の振舞になるなり。または

音曲に曲舞風

舞の手にもなるなり。それも、曲舞

の所があれば、

少しは舞風（舞系統）の手振りがあつても、

がかりあらば、少し舞がかりの手づ

よろしかう。

弓・胡籥を携えて、

かひ、よろしかるべし。弓・胡籥を

太刀を帯びて飾りとする（着飾る）のである。

その持ち方、

携へて、打物を以て飾りとす。その

使い方を、

よくよく調査研究し、

持ち様、使ひ様を、よくよくうかが

その正しい使い方の所作をしなければならぬ。

ひて、その本意をはたらくべし。あ

鬼の所作になつたり、

よくよく注意して、

ひかまへてあひかまへて、鬼のはた

また、

舞の手振になつてしまふ所を用心すべきである。

らき、また、舞の手になる所を用心

すべし。

神

大体、

この物まね（神の物まね）は鬼系統の演技である。

およそ、この物まねは鬼がかりな

（神には）何となく怒られる様相があるので、

り。何となく怒れるよそほひあれば、

神の種類によつては、

鬼風（鬼系統）の演技になつても問題はあまるまい。

神体によりて、鬼がかりにならないも

ただし、

（鬼と神では）まったく異なつた

苦しがるまじ。ただし、はたと変れ

本質がある（本質が異なつてゐる）。

神は舞風（舞系統）の演技の所作が向いてゐる。

る本意あり。神は舞がかりの風情に

（しかし）鬼には全く舞風（舞系統）の演技の手がかりがない。

よろし。鬼には更に舞がかりの便り

あるまじ。

神（の物まね）は、

できるだけその神の姿にふさわしいように扮装して、

神をば、いかにも神体によるしき

気品があり、

とりわけ、

様に出で立ちて、気高く、ことさら、

舞台上に登場する姿の他は神はここでは存在しないので（舞台上に登場する姿がここでは神であるので、

出物にならでは神といふ事はあるま

衣装を飾り、

衣服の折り目を正しく

じければ、衣裳を飾りて、衣文をつ

整えて演じるべきである。

くろひてすべし。

鬼

これは、

特に大和申樂が得意とするものである。

これ、ことさら大和の物なり。一
(しかも)とても難しい物まねである。

大事なり。

大体、

怨霊・憑物などの鬼は、

およそ、怨霊・憑物などの鬼は、面

面白く演じる手があるので、

演じ易い。

相手役に向かつて、

白き便りあれば、易し。あひしらひ

細かに手足を使つて、

を目がけて、細かに足・手を使ひて、

頭にいただくかぶり物に應じて所作をすれば、

(そこに)面白く演

物頭を本にしてはたらけば、面白き

じる手がかりがある(面白く演じられる)。

便りあり。

本物の地獄の鬼は、

上手くまねたのでは恐ろしいので、

まことの冥途の鬼、よく学べば恐ろ

面白きは全然ない。

本当は

しきあひだ、面白き所更になし。まこ

(実際には)、

あまりに難しい演技なので、

これ(鬼)

とは、あまりの大事の態なれば、これ

を面白く演じる者は、

まれ(ほとんどのいない)ではないだろうか。

を面白くする者、稀なるか。

まず、

鬼の本質は強く恐ろしくなければならぬ。

まづ、本意は強く恐ろしかるべし。

(しかし)強さと恐ろしさは、

面白いという心とは異なつたものである。

強きと恐ろしきは、面白き心には変は

れり。

そもそも、

鬼の物まねは、

大変な難しさがある

そもそも、鬼の物まね、大きな

(大変に難しい)。

うまく演じようとするにつけて(うまく演じようとする程)、

大事あり。よくせんにつけて、面白

面白くなくなる理由がある。

恐ろしいのが、

(鬼の物まねの)

かるまじき道理あり。恐しき所、本

本質である。

恐ろしい心(恐ろしき)と面白さ(面白い心)とは、

黒と

意なり。恐しき心と面白きとは、黒

白の違いである(正反対のものである)。

したがって、

鬼を演じてそこに面白さがある

白の違ひなり。されば、鬼の面白き

役者は、

(能の)奥義を極めた達人と言つてもよいだろう。

所あらん為手は、極めるたる上手と

それにしても、

も申すべきか。さりながら、それも、

鬼だけをうまく演じる役者は、

とりわけ花(芸の魅力)

鬼ばかりをよくせん者は、ことさら

だから、

花を知らぬ為手なるべし。されば、

若い役者の演じる鬼は、

うまく演じているように見えるけれども、

若き為手の鬼は、よくしたりとは見

決して面白くない。

鬼だけをうまく

ゆれども、更に面白からず。鬼ばかり

演じる者は、

鬼を演技しても面白くない理由があるのだろう。

りをよくせん者は、鬼も面白かるま

(その理由を)詳細に研究すべきであろう。

じき道理あるべきか。くはしく習ふ

ただ、

鬼を演じて面白さを感じる境地は、

べし。ただ、鬼の面白からむたしな

巖(険しい大岩)に花が咲くようなものである(恐ろしさと美しさが同居しているようなものである)。

み、巖に花の咲かんがごとし。

唐事

これ（唐人の物まね）は、そもそも特別の物まねなので、

これは、およそ格別の事なれば、

（こうである）と決めて稽古すべき基準の型はない。

定めて稽古すべき形木もなし。ただ

大切なのは、

また、

能面も、

肝要、出立なるべし。また、面をも、

（唐人も私達と）同じ人間であるとは言え、

容貌の一風変つたものを着け、

同じ人と申しながら、模様の変わり

どこか異様な感じがするように、

たらんを着て、一体異様したるやう

（唐人の）雰囲気を出すべきである。

（それは）経験を積んだ役者に似合う

に、風体を持つべし。功入りたる為

ただ、

扮装を唐風（中国風）

手に似合ふものなり。ただ、出立を

手段がない

唐様にするならでは、手立なし。何

音曲（謡）も能の所作も、

唐風（中国風）

としても、音曲もはたらきも、唐様

という事は、

そのまま似せたとしても、

といふ事は、まことに似せたりとも、

面白くない姿なのだから、

面白くもあるまじき風体なれば、た

ただちよつとしたそのありさま（様子）を心掛ければよいのである。

だ一模様心得んまでなり。

この異様な感じを出すという事などは、

この異様したると申す事など、かり

ちよつとしたことながら、

様々な事に応用できる工夫である。

そめながら、諸事にわたる公案なり。

何ごとであれ異様な感じを出してよいはずはないのだけれども、

何事か異様してよかるべきなれども、
そもそも唐風（中国風）ということは何とも似せようがないのだから、

およそ唐様をば何とか似すべきなれば、
通常の振舞（ありさま）とは姿が違っていれば、
何となく唐風（中国風）であるよう

常の振舞に風体変れば、何となく唐び
に、
観客の目に映れば（観客が見てくれれば）、

たるやうに、よそ目に見なせば、やが
そのまま
それ（唐風）になるのである。

てそれになるなり。

結び

大体のところ、物まねの条々、

以上である。

これ以外の、

大方、物まねの条々、以上。この

細かな事は、

文章に書き表わせない。

外、細かなる事、紙筆に載せがたし。

けれども、

大体において、

この条々を十分に極めた人（役者）

さりながら、およそ、この条々をよ

であれば、

自ずから（これ以外の）細かな事

くよく極めたらん人は、おのづから

も心得できるだろう。

細かなる事をも心得べし。



風姿花伝第三
問答条々



前頁

目次へ

次頁



第一問答

問う。

いったい、

申樂（能の催し・公演）を始めるのに、

問ふ。そもそも、申樂を始むるに、

その当日になつて、

まず見物席（の観客の様子）を見て、

当日に臨んで、まづ座敷を見て、吉

能の出来・不出来をあらかじめ知るといふことは、

いったいどういふことでしょうか。

凶をかねて知る事は、いかなる事ぞ

や。

答える。

この事（問い）は、

極めて難しい（難しい問いだ）。

その道（吉凶

答ふ。この事、一大事なり。その

判断）に通じた人でなければわかるはずがない（理解できないだらう）。

道に得たらん人ならでは心得べから

ず。

まず、

その日の能を演じる会場を見る（観察する）と、

今日は

まづ、その日の庭を見るに、今日は

能の出来がよいか、

出来が悪いかの、

能よく出で来べき、悪しく出で来べき、

前兆がある。

これを、

口で言う（言葉で説明する）のは難しい。

瑞相あるべし。これ、申しがたし。し

しかし、

大体の考えで見ると（おおよその考えをめぐらしてみると）、

かれども、およその料簡を以て見るに、

神事や

貴人の御前で演じる能において、

人が多数

神事、貴人の御前などの申樂に、人群

群がり、

見物席がなかなか静まらない。

そういう時に、

集して、座敷いまだ静まらず。さるほ

何とかして見物席を静めて、

どに、いかにいかに静めて、

観客の人々が、申樂を待ちかねて、

万人の心(すべての

見物衆、申樂を待ちかねて、数万人

観客の心)が一つになって、

遅い遅い(まだかまだか)と樂屋の方を見ているところに、

の心一同に、遅しと樂屋を見る所に、

その時を得て(タイミングよく)登場して、

一声の謡を謡い上げれば、

時を得て出でて、一声をも上ぐれば、

すぐに見物席の観客も時の調子(二声を謡うタイミングのよき)に引き入れられて、

やがて座敷も時の調子に移りて、万

すべての観客の心が、役者の動きに和合して(融け合って、一つになって)、

人の心、為手の振舞に和合して、し

何としても(どのように演じようとも)、

みじみとなれば、何とするも、その

その日の申樂はもはやよい出来である(成功である)。

日の申樂ははや良し。

しかしながら、

申樂(能の興行)は、

貴人の御出で(ご来場)を基本

さりながら、申樂は、貴人の御出

でを本とすれば、

(貴人が)もし早く御出で(ご来場)になった

時、
でも本とすれば、もし早く御出で

ある時は、やがて始めずしてはかな

すぐに始めないわけにはいかない。

その場合、

観客の人々の座席がまだ決まらなかつたり

はず。さるるほどに、見物衆の座敷

(観客の人々がまだ着席していなかつたり)、

あるいは遅れて駆けつける人がいたりして、

いまだ定まらず。あるいは後れ馳

人の立ったり座つたりが乱雑で、

せなどにて、人の立居しどろにして、

すべての観客の心がまだ能に和合して(融け合って、一つになって)いない。

だから、

万人の心いまだ能にならず。されば、

容易にしみみとした気分になる事はない。

左右なくしみみとしみじみとなる事なし。

こうした時の初番の能では、

さ様ならむ時の脇の能には、物にな

何かに扮して

色々と（様々に）

りて出づるとも、日頃より、色々と

普段（いつも）より、

話の声も強めに使い（話も声を強めに話し）、

振りをもつくろひ、声をも強々と使

動作を多くして（激しくして）、

立ち振舞う（立ち

ひ、足踏をも少し高く踏み、立ち振

足踏みも少し高く踏み（足音を高く響かせ）、

たり座つたりの演技の）動作も、

人の目につくように生き生きと演じるのがよい（演じる

舞ふ風情をも、人の目に立つ様に生

べきである）。

これは、

見物席を静めるためである。

き生きとすべし。これ、座敷を静め

そのように演じるにしても、

んためなり。さ様ならんにつけても、

特に、

その貴人の好みに合った芸風の演技をするべきである。

ことさら、その貴人の御心に合ひた

したがって、

このような時の

らん風体をすべし。されば、か様な

初番の能は、

十分によい事は（完全にうまくいくことは）、

る時の脇の能、十分によからん事、

とうていありえない。

しかし、

かへすがへすあるまじきなり。しか

貴人のお心（お気持ち）にかなえばよいのだから、

れども、貴人の御意にかなへるまで

これはとても大切である。

なれば、これ肝要なり。

何はともあれ、

見物席がすみやかに静まり、

何としても、座敷のはや静まりて、

自然にしみじみとした気分になれば、

（能の出来が）悪い事はない。

おのづからしみたるには、悪き事なし。

だから、見物席の雰囲気勢いがあるか、(又は)しらけているかを考えてみる事は、されば、座敷の競ひ後れを考へてみる事、その方面の道(吉凶判断の道)に経験を積んでいない(詳しくない)人には、容易にわかるはずはないのである。

右なく知るまじきなり。

夜の申樂は、

(昼とは)全く

また云はく、夜の申樂は、はたと

変つてしまふ。

夜(の申樂)は、遅く始まるので、

変るなり。夜は、おそく始まれば、

必ず湿っぽく(陰気に)なる。

だから、

昼ならば二番目に

定まりて湿るなり。されば、昼二番

夜の初番にするべきである。

目によき能の体を、夜の脇にすべし。

初番の申樂(能)が湿っぽく(陰気に)なると、

そのまま能は立ち直らない

脇の申樂湿り立ちぬれば、そのまま

どんなことをしても(なんとしても)、

能は直らず。いかにもいかにも、よ

よい能をきびきびと切れ味よく演じるべきである。

夜は、

観客の騒音がざわついて

き能を利くすべし。夜は、人音忽々

いたとしても、

(役者が登場して)一声の謡を歌い上げればすぐに静まるものである。

なれども、一声にてやがて静まるなり。

昼の申樂は後半がよく、

しかれば、昼の申樂は後がよく、夜

夜の申樂は最初がよい。

最初が湿っぽいと(陰気だと)、

の申樂は指寄りよし。指寄り湿り立

立ち直る時(チャンス)は、

簡単にはない。

ちぬれば、直る時分、左右なく無し。

秘伝の教えを述べよう、

そもそも、

(世の中の)一切は、

秘義に云はく、そもそも、一切は、

陰陽（陰の氣と陽の氣）の和する（調和する）所の境地を、
陰陽の和する所の境を、成就とは知
べきである。（物事の）成就であるとする

るべし。昼の氣は陽氣なり。されば、
何とか（見物席を）静めて能をしようと思う工夫は、
いかにも静めて能をせんと思ふ工は、
陰の氣である。だから、

陰氣なり。陽氣の時分に陰氣を生ず
陰陽が和（調和する）する心（道理）である。これが、

る事、陰陽和する心なり。これ、能
能がよく出来て成就する始め（第一歩）である。これが、

のよく出で来る成就の始めなり。こ
れ、面白しと見る心なり。夜はまた
陰なれば、いかにも浮き浮きと、や
すぐによい能を演じて、
（観客が）面白いと見る心（感じる理由）である。
夜はまた陰の氣であるから、
いかにも心が浮き浮きと、

がてよき能をして、人の心花めくは
陽なり。これ、夜の陰に陽氣を和す
陽の氣である。これが、
夜の陰の氣に陽の氣が和した（調和した）成就なのである。

る成就なり。されば、陽の氣に陽とし、
陰の氣に陰とせば、和する所あるま
じければ、成就もあるまじ。成就な
くば、何か面白からん。また、昼の
内にても、時によりて、何とやらん

成就もない。
成就があるまじ。
成就がなければ、
成就な
くば、何か面白からん。
また、
昼間でも、
内にても、時によりて、
何とやらん

見物席が湿っぽく寂しいようであれば、

座敷も湿りて寂しき様ならば、

時であると考えて、

沈んだ気持ちにならないように、

これは陰の
心を打ち込

陰の時と心得て、沈まぬ様に、

んで（陽の気で）演じよ。

昼は、

この様に、

時によつては

入れてすべし。昼は、か様に、

時に

陰の気になることがあるけれども、

よりて陰気になる事もありとも、夜

夜の気が陽になることは、

めつたにあることではない。

の気の陽にならん事、左右なくある

まじきなり。

見物席をあらかじめ見るとは、

これをいうのである。

座敷をかねて見るとは、これなる

べし。

第二問答

問う。

能の公演において、序・破・急（の配当）をどのように定めるべきでしょうか

問ふ。能に序・破・急をば何とか

（決めればよいでしょうか）。

定むべきや。

答える。

これは簡単な定め（きまり）だ。

答ふ。これ易き定めなり。一切の

事に序・破・急の原理があるのであって、申樂も同じである。

事に序・破・急あれば、申樂もこれ

個々の能の演技内容（演技の趣）によって（その配当を）定めればよいのだ。

同じ。能の風情を以て定むべし。

まず、

初番の申樂においては、

まづ、脇の申樂には、いかにも本

説話を素材とし、上品でありながらも、

説正しき事の、しとやかなるが、さ

無理に細かでなく（むやみに手の込んだものでなく）、謡も所作も大体（普通程度）の趣で、

のみに細かになく、音曲・はたらき

すらすらと安らかに（樂に）演じる

も大かたの風体にて、するすると安

のがよい。第一に（まず大切なのは）、めでたきである。

くすべし。第一、祝言なるべし。い

いかによい内容の初番の能であっても、めでたきが欠けて

かによき脇の申樂なりとも、祝言欠

いては（初番の能として）ふさわしくない（不適当である）。たとえ能の内容は少し劣って

けてはかなふべからず。たとひ能は

いても、めでたきがあれば（初番の能として）ふさわしい

少し次なりとも、祝言ならば苦しか

（問題はない）。これは、（初番の能が）序であるからである。

るまじ。これ、序なるがゆゑなり。

二番、三番の能（破の段階）になったならば、
二番・三番になりては、得意な芸風のすぐれた能得たる風
を演じるのがよい。特に、

体のよき能をすべし。ことさらに、最後拳
は急の段階だから、テンポを早めて畳みかけるように身体を激しく動かして、技を句急なれば、揉み寄せて、手数をい
尽くして演じるべきである。

れてすべし。

また、

二日目以後の初番の能には、

昨日（前日）

また、後日の脇の申樂には、昨日

の初番の能とは違う芸（演目）を演じるべきである（演じるのがよい）。

涙を誘う内容の

の脇に変わる風体をすべし。泣き申

申樂（演目）を、

二日目以後の中ほど（破の段階）に、

よい頃合い

樂をば、後日などの中ほどに、よき

を考えて（見計らつて）演じるべきである。

時分を考えてすべし。

第三問答

問う。

申樂の演技の優劣を争う立合勝負に勝つ手段はどうすればよいでしょうか。

問ふ。申樂の勝負の立合の手立は

いかに。

答える。

これは重要（大切）だ。

まず、

（演じられる）

答ふ。これ肝要なり。まづ、能数

演目の数を（多く）持つて、敵方（相手方）の能とは変わった（違った）芸風の能を、

を持ちて、敵人の能に変わりたる風体

を、違へて（違ふ趣・演出で）演じるべきである。

序章で述べた、

「歌道を

を、違へてすべし。序に言ふ。「歌

道は少しは字べ」とは、

これ（この事）である。

道を少ししたしなめ」とは、これなり。

この芸能（申樂能）の（において）作者と役者が別人であるなら、

どのように上手な役者も

この芸能の作者別なれば、いかなる

（しかし）自作の能であれば、

上手も心のままならず。自作なれば、

せりふも演技の所作も思いのままである。

さて、（一方）

言葉・振舞、案の内なり。されば、

能を演じるほどの者で、

和歌の教養があるならば、

能をせん程の者の、和才あらば、申

申樂（能）を作る（能の台本を書く）事は、容易である。

これ（能の台本を書く）こそ、

樂を作らん事、易かるべし。これ、

この能の道の命（最も大切なこと）である。

ならば、

いかに上手な能役者でも、

この道の命なり。されば、いかなる

（自作の）能を持っていない役者は、

一騎当千

上手も、能を持たざらん為手は、一騎

の兵（武將）であつても、

軍陣（戦場の陣地）に武器がない、

当千の兵なりとも、軍陣にて兵具の

なからん、これ同じ。

これと同じで（勝てるはずがないので）ある。

ならば、

（自作の能を持った上で）技量の精髓を、

立合で見せよ。

されば、手柄のせいれひ、立合に

敵方（相手方）がはなやかな能を演じたならば、

見ゆべし。敵方色めきたる能をすれ

（こちらは）静かなものに、

趣（雰囲気）を変えて、

面白い見所（山場）の

ば、静かに、模様変りて、詰め所の

ある能を演じよ。

このように、

敵（相手）の申樂

ある能をすべし。かやうに、敵人の

と趣（雰囲気）を変えて演じれば、

どのように敵方（相手方）の申樂が

申樂に変へてすれば、いかに敵方の

よくとも、

むやみに負ける事はない。

申樂よけれども、さのみには負くる

もしこちらの能がよく出来れば（こちらの能の出来がよければ）、

事なし。もし能よく出で来れば、勝

勝つ事は必定（確実）である。

つ事は治定あるべし。

ところで、

（立合ではなく）申樂の公演（催し）のその場においても、

しかれば、申樂の当座においても、

能には、

上・中・下の差がある。

典拠が

能に、上中下の差別あるべし。本説

正しく、

珍しさ（新鮮さ）があり、

優美で、

正しく、めづらしきが、幽玄にて、

面白い所があるのを、

よい能という。

面白き所あらんを、よき能とは申す

よい能を、

よく（立派に）演じて、

べし。よき能を、よくしたらんが、し

しかもよい出来であったのを、

第一（上）とする。

かも出で来たらんを、第一とすべし。

能（の出来映え）はそれほどでもないけれども、

能はそれほどになけれども、本説の

典拠のままに、

悪い所も無く（ミスも無く）、よく（立派に）演じてよく出来たのを、

ままたに、咎もなく、よくしたらんが

第二（中）とするべきである。

出で来たならむを、第二とすべし。能

能（の出来映え）はよくないけれども、

典拠の悪さをかえつて手がかりにして、

はえせ能なれども、本説の悪き所を

苦心してよく演じたのを、

なかなか便りにして、骨を折りてよ

第三（下）とするべきである。

くしたるを、第三とすべし。

第四問答

問う。

これ(立合の能)に大きな疑問があります。

問ふ。これに大いなる不審あり。

すでに年功を積んだ(ベテランの)役者の、しかも名人であるのに、

はや功入りたる為手の、しかも名人

駆け出しの若い役者が、立合に勝つ事が

なるに、唯今の若き為手の、立合に

あります。これが疑問です。

勝つ事あり。これ不審なり。

答える。

これこそが、先に申した(先に言った)

答ふ。これこそ、先に申しつる

三十歳以前の時分の花(若さゆえの魅力)なのである。古参の役者がもはや花

三十以前の時分の花なれ。古き為手

(時分の花・若さゆえの魅力)を失って古くさくなっている頃に、

ははや花失せて古様なる時分に、め

(若い役者が)新鮮な魅力で勝つ事がある。本当の目利きは(そ

づらしき花にて勝つ事あり。真実の

れが若さゆえの魅力による勝利であることを)見分けるだろう。それならば、目利き

目利きは見分くべし。さあならば、目

であるか、目利きでないかの観客の批判力(鑑識眼)の(が問われる)勝負になるだろうか。

利き・目利かずの批判の勝負になるべきか。

しかしながら、子細(留意すべき点)がある。五十過ぎまで(過ぎてても)

さりながら、様あり。五十以来ま

花(芸の魅力)を失わない程の役者であれば、

で花の失せざらん程の為手には、い

どんな若い花(若さの魅力)であっても、勝つ事はできまい。

かなる若き花なりとも、勝つ事はある

まじ。ただこれ、よき程の上手の、

ただこれ（若い役者が勝つ事）は、そこその程度の（古参の）上手な役者が、花（時分の花・若さゆえの魅力）を失ったがゆえに、負ける事があるのである。

花失せたるゆゑに、負くる事あり。

どのような桜の名木であろうとも、

花の咲かない時の桜の木を見る

いかなる名木なりとも、花の咲かぬ

ありふれた見劣りする一重の桜であろうとも、

時の木をや見ん。犬桜の一重なりと

初花の色とりどりに咲いているのを見るだろうか（見るに違いない）。

も、初花の色々と咲けるをや見ん。

この様なたとえを思いう時、

一時の花（若さゆえの魅力）

か様の譬へを思ふ時は、一旦の花な

であつても、立合に（若い役者が）勝つのは当然のことである。

りとも、立合に勝つは理なり。

そうゆうわけで、

肝心なのは、

この能の道はただ花こそが命（最も大切）である

されば、肝要、この道はただ花が

花がなくなること知らず、

能の命なるを、花の失するをも知ら

もとの名聲ばかりを頼ろうとする事は、

ず、もとの名望ばかりを頼まん事、

古参の役者の甚だしい誤りである。

古き為手のかへすがへす誤りなり。

数多くの物まねを演じたとしても、

花のあり方を知らないのでは、

物数をば似せたりとも、花のある様

花が咲かない時の草木を集めて見るようなものだ。

を知らざらんは、花咲かぬ時の草木

すべての草と木において、

を集めて見んがごとし。万木千草に

花の色はそれぞれ違っているが、

おいて、花の色もみなみな異なれども、

（人がそれを）面白いと感じる心は、

面白しと見る心は、

（役者で）演じられる物まねの数は少なくとも、

数は少なくとも、

役者は、

めたらん為手は、

同じく咲いた花の魅力による。
（まだ若い
ある一方面的花を会得し尽くした（極め尽くした）
一方の花を取り極
その方面の芸の名声は長く保たれるだろう（名声
一体の名望は久し
役者自身は心では（自分自身の芸に）相当に

を得るだろう）。

ところで、

かるべし。されば、

主の心には随分

花（魅力）があると思っ

花ありと思へども、

人の目に見ゆる

がなければ、

田舎の花や、

藪梅などが、

る公案なからんは、

田舎の花、藪梅

（見る人もなく）無駄に咲き匂っているようなものである。

などの、いたづらに咲き匂はんがご

とし。

また、同じ上手であっても、

その中には段階が

また、同じ上手なりとも、その内

ある。

たとえ相当に芸の技を極めた上手・名人

にて重々あるべし。たとひ随分極め

であっても、

この花に関する研究・

たる上手・名人なりとも、この花の

上手としては通用しても、

公案なからん為手は、上手にては通

花は後年まではないだろう（長続きしないだろう）。

るとも、花は後まではあるまじきな

花に関する研究・工夫を極めた上手は、

り。公案を極めたらん上手は、たと

たとえ（老いて）技量は下がっても（衰えても）、

花は残るだろう。

へ能は下がるとも、花は残るべし。

花さえ残れば、

花だに残らば、(芸の)面白きは一生(死ぬまで)あるだろう。

そうであるなら、

真の花の残っている役者には、

べし。されば、まことの花の残りた

どんな若い役者であつても、

る為手には、いかなる若き為手なり

(立合に) 勝つ事はないのである。

とも、勝つ事はあるまじきなり。

第五問答

問う。

能には、

人それぞれに得意があつて、

ひどく劣つて

問ふ。能に、得手得手とて、こと

いる下手な役者であつても、

一方面については上手(な役者)

の外に劣りたる為手も、一向き上手

に勝つてゐる所があります。これ(下手な役者の得意芸)を上手が演じな

に勝りたる所あり。これを上手のせ

いのは、

できないからでしょうか。

または、

してはならな

ぬは、かなはぬやらん。また、すま

い事だからやらないのでしょうか。

じき事にてせぬやらん。

答える。

すべての事に、

人それぞれの得意といつて、

答ふ。一切の事に、得手得手とて、

生まれつき身についてゐる得意な所があるものだ。

芸位(芸の実力)

生得得たる所あるものなり。位は勝

りたれども、

(上手が) 下手の得意芸にかなわない (及ばない) 事がある。

しかしながら、これもただ、よき程の

これもただ、ある程度の上手な役者の

さりながら、これもただ、よき程の

事についてそう考えられるのだ(ある程度の上手についての話しだ)。本當に技と工夫を極めた

上手の事にての料簡なり。まことに

ような上手ならば、

能と工夫との極まりたらん上手は、

どうしていかなる方面の芸であろうと (どんなことであろうと) やらないことがあるうか。

などかいづれの向きをもせざらん。

(それをしないのは) 技と工夫を極めた役者が、

されば、能と工夫とを極めたる為手、

万人の中に一人もいないからだ。

万人が中にも一人もなきゆるなり。

なぜいけないかというと、
(芸に対する)工夫がなくて慢心(思い上がり、驕り)があるからである。
 なきとは、工夫はなくて慢心あるゆ

ゑなり。

いったい、

上手にも悪い所(短所)があり、

そもそも、上手にも悪き所あり、

下手にもよい所(長所)が必ずあるものだ。

下手にもよき所必ずあるものなり。

(けれども)これ(長所と短所)を見分ける(見抜く)人もいない。当人(役者自身)もこれを知らない。

これを見る人もなし。主も知らず。

上手は、

(自分の)名声を頼み、

芸達者であることによぬばれて、

上手は、名を頼み、達者に隠されて、

短所に気がつかない。

下手は、

もともと工夫しないので、

悪き所を知らず。下手は、もとより

(自分の)短所をも知らないで(気づかないで)、

工夫なければ、悪き所をも知らねば、

長所がたまたまあるのをもわからない(たまたまある自分の長所に気づかない)。

よき所のたまたまあるをもわきまへず。

だから、

上手も下手も、

互いに人に尋ねるべきである

されば、上手も下手も、たがひに人

(互いに他人の批判を仰ぐべきである)。けれども、

技と工夫を極めた役者

に尋ねべし。さりながら、能と工夫

ならば、

これ(自分の短所と長所)を知っているはずだ。

を極めたらんは、これを知るべし。

どんなに下手で滑稽な役者であっても、

いかなるをかしき為手なりとも、

長所があると見れば、

上手もこれをまねるべきである。

よき所ありと見ば、上手もこれを学

ぶべし。これが(自分の芸を向上させる)、第一の(最もよい)手段である。

ぶべし。これ、第一の手立てなり。

もし、(下手な役者の)長所を見たとしても(見つけても)、

自分より下手な役者

もし、よき所を見たりとも、我より
を似せられるか(の真似をできるか)と思う慢心からの強情があるならば、

下手をば似すまじきと思ふ情識あら
その心に束縛されて(とらわれて)、自分の短所をも、

ば、その心に繫縛せられて、我が悪
きつと知る(氣づく)ことはないだろう。

き所をも、いかさま知るまじきなり。
これ(慢心からの強情)が則ち、(技と工夫を)極めぬ心なのである。

これ則ち、極めぬ心なるべし。
また、下手も、上手の短所がもし見えたなら、

また、下手も、上手の悪き所もし
上手でさえ短所がある。

見えば、上手だにも悪き所あり。い
ましてや未熟な自分であれば、さぞかし短所は多いだろうと

はんや初心の我なれば、さこそ悪き
思つて、これを恐れて、

所多かるらめと思ひて、これを恐れ
人に(意見を)尋ね、工夫をするならば、

て、人にも尋ね、工夫をいたさば、
それがますます稽古になつて、能は早く上達するだろう。

いよいよ稽古になりて、能は早く上
がるべし。もし、そうではなくて、

もし、さはなくて、我は
あんな風に短所をしないのと(あんなにますぐやらないのにと)慢心するならば、自分ならば

あれ体に悪き所をばすまじきものを
自分の長所をも、

と慢心あらば、我がよき所をも、真
本當に知らない(氣づかない)役者であろう。長所を知らねば、(長所に氣づかな

実知らぬ為手なるべし。よき所を知

ければ)

短所をもよいと思ってしまうものである。

らねば、悪き所をも良しと思ふなり。

(稽古する) 年数は過ぎて行つても、

能は上達しないの

さるほどに、年は行けども、能は上

これは則ち、

下手の心(心がけ)なのである。

がらぬなり。これ則ち、下手の心なり。

だから、

慢心があれば、

されば、上手にだにも、上慢あらば、

能は下がっていく(退歩していく)だろう。

ましてや下手の不相応な慢心だとなおさらである。

能は下がるべし。いはんやかなはぬ

よくよく工夫研究して考えてみよ。

上慢をや。よくよく公案して思へ。

「上手は下手の手本、

下手は上手の手本である。」

「上手は下手の手本、下手は上手の手

と(この言葉を心に刻み付けて)工夫せよ。

下手の長所を取り入れて、

本なり」と工夫すべし。下手のよき

上手の物数(持ち芸、演目)の中に加える事は、

所を取りて、上手の物数に入る事、

この上なく立派な道理である。

人の短所を見るにつけ、

無上至極の理なり。人の悪き所を見

(それは)自分自身への手本である。

ましてや長所を(手本に

るだにも、我が手本なり。いはんや

「稽古は厳しく行え、

慢心からの

よき所をや。「稽古は強かれ、情識

強情はあつてはならない。」

とは、

このことである。

はなかれ。」とは、これなるべし。

第六問答

問ふ。能における芸位（芸の実力）の違い（それが天性のものか稽古によるものかの違い）を知る事は、能に位の差別を知る事は、
問ふ。能に位の差別を知る事は、
どうでしょうか。

如何。

答える。

これは、

目利き（鑑識眼の高い人）の目には簡単に見分けられる

答ふ。これ、目利きの眼には易く

ものである。

だいたい、

芸位が上がるとは、

見ゆるなり。およそ、位の上がると

能の段階々々を順次上がっていくことではあるけれども、

不思議な事に、

は、能の重々の事なれども、不思議

十歳ばかりの才能のある者にも、

この芸位が自ずと（自然と）

に、十ばかりの能者にも、この位お

上がっている様子の者がいる。

しかし、

のれと上がれる風体あり。ただし、

稽古をしないのでは（怠つていたのでは）、

天性の芸位があつても、

稽古なからんは、おのれと位ありと

無駄な事である（それはいずれ消滅する）。

まず、

稽古の年功が積み

も、いたづら事なり。まづ、稽古の

重なつて芸位が具わるのは、

通常の事である（正道である）。

功入りて位のあらんは、常の事なり。

また、生まれつきの芸位とは、

長（品格）である。

嵩（勢い）と

また、生得の位とは、長なり。嵩と

いうのは別の物である。

多くの場合、

人は、

長と嵩とを

申すは別の物なり。多く、人、長と

同じように考えている。

嵩と申すのは

嵩とを同じように思ふなり。嵩と申

いかめしく、

勢いのある様子である。

すは、物々しく、勢いのある形なり。

付言すると、

嵩は一切に及ぶ（諸道に及ぶ）という意味である。

また云はく、嵩は一切にわたる義な

（これに対して） 芸位と長は（嵩とは）別の物である。

たとえば、

り。位・長は別の物なり。たとへば、

生まれつき優美な所がある（生まれついでての優美さ）。

これは、

芸位である。

生得幽玄なる所あり。これ、位なり。

少しも優美ではない役者で（あつても）、

しかれども、さらに幽玄にはなき為

長（品格、気品）がある者もある。

これは優美ではない長である。

手の、長のあるもあり。これは幽玄

ならぬ長なり。

また、

初心者は（次のように）考えるべきである。

また、初心の人思ふべし。稽古に

芸位を目標にするのは、

まったく不可能なことである（するべきことでは

位を心がけんは、かへすがへすかな

ない）。

芸位はいよいよ身につかなくなり、

ふまじ。位はいよいよよかなはで、あ

そればかりか、

これまで稽古してきた芸も下がる（退歩する）だろう。

まさへ、稽古しつる分も下がるべし。

所詮、

芸位と長とは生まれつきのものであり、

（生まれ

所詮、位・長とは生得の事にて、得

つき）身に具わっていないければほとんど身につけることはできない。

（しかし）また、

ずしては大かたかなふまじ。また、

稽古の年功が積み重なって、

芸の垢が落ちたならば、

稽古の功入りて、垢落ちぬれば、こ

この芸位が、

自然と出て来る事がある。

の位、おのれと出で来る事あり。稽

（そして）稽古とは、

謡・舞・所作・物まね、

古とは、音曲・舞・はたらき・物まね、

このようないろいろな演技を極める基礎を学ぶことである。

か様の品々を極むる形木なり。

よくよく研究工夫して考えてみると、

優美の(という)

よくよく公案して思ふに、幽玄の

芸位は生まれつぎのものであろうか。

長の具わった芸位は年功の積もった結果であらうか。

位は生得の物か。長けたる位は功入

心の中でよく考えてみるべきである。

りたる所か。心中に案を廻らすべし。



第七問答

問う。

謡の文句にびたりとあう所作（演技の動作・しぐさ）とは、

どうい

問ふ。文字に当たる風情とは、何

ったことでしょうか。

事ぞや。

答える。

これは、

具体的な演技の稽古のことである。

答ふ。これ、細かなる稽古なり。

能に様々な所作が生まれるのは、

これ（謡の文句にびたりとあう）

能にもろもろのはたらきとは、これ

によってである。 体配とか身づかいとか言われているのもこれ（と同様）である。

なり。 体配・身づかひと申すもこれ

たとえば、

なり。 たとへば、言ひ事の文字にま

働かせよ。

「見る」ということには物を見て、

かせて心をやるべし。「見る」といふ

「指す」「引く」などということには手を差し出し

ことには物を見、「指す」「引く」な

たり引いたり、

「聞く」

どといふには手を差し引き、「聞く」

「音する」などには耳を傾け、

あらゆる言葉の

「音する」などには耳を寄せ、あらゆ

通りに（言葉の意味の通りに）身を動かせば、

（それが）

る事にまかせて身をつかへば、おの

自ずから（自然と）能の所作（しぐさ）になるのである。

第一に（重要なのは、

づからはたらきになるなり。第一、

身を使う事、

第二に（重要なのは、 手を使う事、

身をつかふ事、第二、手をつかふ事、

第三に（重要なのは、 足を使う事である。

謡の節と情緒によって、

第三、足をつかふ事なり。節とかか

身（動かし方）の振舞（案配）を料簡すべし。
これは文章にするのは難しい。

これは筆に見えがたし。その時に至りて、見るまま習ふべし。
（師匠がやるのを）見るままに習うべきである（そのまを見て習うべきである）。

この謡の文句にびつたりあうことを稽古して極めれば、

この文字に当たることを稽古し極

めぬれば、音曲・はたらき、一心（謡と所作が、一体になるだろう。）に

なるべし。所詮、音曲・はたらき一（謡と所作が一体になるという事は、

心と申す事、これまた得たる所なり。
これはまた（能の奥義を）会得した所である。

堪能（これは）と申さんも、これなるべし。秘

事（秘伝）である。謡と所作とは（別々の）二つのものであるのを、
事なり。音曲とはたらきとは二つの

心なるを、一心（一つ（二体）になるほどに見事に芸を極めたような者は、になるほど

めたらんは、無上第一の上手なるべし。
無上第一（この上もなくすぐれた）の上手（な役者）であろう。

し。これ、まことに強き能なるべし。
これこそが、真に強い能であろう。

また、強き・弱き事、多く、人、
また、強さと弱さを、しばしば、人は、

紛らかすものなり。能の品のなきを
混同するものである。

ば強きと心得、弱きをば幽玄なると
弱さを優美であると批評するのは、

批判する事、をかしき事なり。何とどのように

見ても見劣りせぬ役者がいるだろう。

見るも見弱りのせぬ為手あるべし。

これこそが、強さなのである。

どのように見ても花やかな役者、

これ、強きなり。何と見るも花やか

これこそが、

優美である。

だから、

なる為手、これ、幽玄なり。されば、

この文字にぴたりとあう所作の原理を極めたような者は、

この文字に当たる道理をし極めたら

謡と所作が一つになり（一体となり）、

んは、音曲・はたらき一心になり、

強さと優美の二つの境地、

いずれをも（どちらをも）、

強き・幽玄の境、いづれもいづれも、

自ずと（自然に）極めた役者なのであろう。

おのづから極めたる為手なるべし。

第八問答

問う。

常によく聞く批評に「しおれている」という言葉があります。

問ふ。常の批判にも、「しほれたる」
どのようなものでしょうか。

と申す事あり。いか様なる所ぞや。

答える。

これは、

格別に書き記すことができない。

答ふ。これは、ことに記すに及ば

(書き記そうとしても) そのしおれている風情(趣)を筆であらわすことはできない。

ず。その風情あらはれまじ。さりな

しかしながら、確かに(間違いなく)、しおれた芸風はあるものである。

がら、まさしく、しほれたる風体は

これも、ただ花(芸の魅力)によって生

あるものなり。これも、ただ花によ

じる風情(趣)である。よくよく考えてみると、

りての風情なり。よくよく案じて見

(しおれている趣は) 稽古でも(舞台での) 振舞でもそれをあらわす(表現する)ことはできない。

るに、稽古にも振舞にも及びがたし。

花を極めたならば知る事ができるであろう。(わかるだろう。)したがって、

花を極めたらば知るべきか。されば、

すべての物まねごと(毎)に(花)がなくとも、

あまねく物まねごとになしとも、一

一しおれている所をわかる

方の花を極めたらん人は、しほれた

事があるだろう。

る所をも知る事あるべし。

だから、

この「しおれている」と言う事、

しかれば、この「しほれたる」と

花よりもなお上の事(上の境地)とも言えるであろう。

申す事、花よりもなほ上の事にも申

しつべし。花なくては、しほれ所無
である。花がなければ、
それは「湿っている（湿っぽい）」になるだろう。
しおれたところで無益（無意味）

益なり。それは「湿りたる」になる
花がしおれているのこそ面白い。（趣がある。）

べし。花のしほれたらんこそ面白け
花が咲かない草木のしおれたのは、

れ。花咲かぬ草木のしほれたらんは、
どうして面白いだろうか。（趣があらうか。）
だから、
花を極める事（で

何か面白かるべき。されば、花を極
さえ、
一大事（至難の業）なのに、
その上とも言うべき事である

めん事、一大事なるに、その上とも
ので、
しおれた芸風は、

申すべき事なれば、しほれたる風体、
返す返す大事（至難の業）である。
したがって、

かへすがへす大事なり。さるほどに、
たとえて言うのも難しい。（説明しがたい。）

譬へにも申しがたし。

古歌に言う、

古歌に云はく、

（秋の朝 薄い霧の中の垣根の花が朝霧にぬれてしつとりと咲いている。

薄霧の籬の花の朝じめり

秋は夕暮れがよいと誰が言ったのであらうか。

秋は夕べと誰か言ひけん。

また（次のように）言う、
また云はく、

目に見えないまま色があせ、いつのまにか散ってしまうのが、
色見えで移ろふものは

世間の人の心の花であることよ。

世の中の人の心の花にぞありける。

（しおれているとは）このような（この歌のような）芸風であろうか。

心の中で

か様なる風体にてやあるべき。心中
にあてて公案すべし。
よくよく考え工夫すべきである。

第九問答

問う。

能における花を知る事が、

この（風姿花伝の）条々

問ふ。

能に花を知る事、この条々

無上第一（この上なく大事）であります。大切であります。

を見るに、

無上第一なり。

肝要なり。

（同時に）またわかりにくい所です。

これを、

どのようにして心得るべきで

または不審なり。これ、

いかにとし

て心得べきや。

答える。

（花を知る事が）この能の道の奥義を極めることになるだろう。

答ふ。

この道の奥義を極むる所な

一大事とも、

秘事とも（言うのは）、

るべし。一大事とも、秘事とも、た

ただこの（花を知るといふ）一つの道である。

だこの一道なり。

まず、

大体の事は、

年来稽古条々と物学条々に詳しく述べている。

まづ、大方、稽古・物まねの条々

時分の花（若さゆえの芸の魅力）、

にくはしく見えたり。時分の花、声

声の花、

姿の優美さの花、

このような事柄は、

人（観客）

の花、幽玄の花、か様の条々は、人の目にも見えるけれども、その役者の身体的条件より

の目にも見えなれども、その態より出で来る花なので、咲く花のごとくであれば、

出で来る花なれば、咲く花のごとく

またやがて（花が）散る時が来る。

なれば、またやがて散る時分あり。

長くは続かないので、

天下に名声をとどろかす事は

されば、久しからねば、天下に名望

少ない。

ただ、

真実の花は、

咲く道理も

少なし。

ただ、

まことの花は、咲く

(咲かせるのも)、

散る道理も(散らすのも)、

(役者の)思いのままであろう。

道理も、

散る道理も、

心のままなる

したがって長く続くであらう。

この道理を知るに

べし。

されば久しかるべし。

この理

は(これを理解するには)、

どうすればよいだろう。

もしかすると

を知らむこと、

いかがすべき。

もし

別紙の口伝にあるかもしれない(別紙口伝に書く事になるかもしれない)。

ただ、

別紙の口伝にあるべきか。

ただ、わ

づらはしくは心得まじきなり。

面倒な事だと心得てはならない(考えてはならない)。

まづ、七歳よりこのかた、

年来稽古の数々や、

まづ、七歳よりこのかた、

年来稽

古の条々、物まねの品々を、よくよ

物まねの各種類を、

よくよく心の中

に当てて区別して覚え(よくよく分別して心に刻み込み)、

技を鍛錬し

く心中にあてて分ち覚えて、

能を

尽くし、工夫を極めて後、この花の

尽くし、

工夫を極めた後、

この花のなくなるならない所

失せぬ所をば知るべし。

この物数を

(境地)を知るだろう(がわかるだろう)。

この様々な技や工夫を極めよう

とする事、

(これが)則ち花(芸の魅力)の種であらう。

極むる心、

則ち花の種なるべし。さ

したがって、

花を知ろうと思えば、

まず(その)種を知

れば、花を知らんと思はば、

まづ種

らなければならぬ。花は(役者の)心(の工夫で咲き)、その種は(役者の)態(能の技の数々)である。

を知るべし。

花は心、種は態なるべし。

古人（昔の人）は次のように言つた、

古人云はく、

心地に諸の種を含み、

普き雨に悉く皆萌す。

心地含諸種、

普雨悉皆萌

頓に花の情を悟り已れば、

菩提の果自ずから成る。

頓悟花情已、

菩提果自成

人の心には（仏性という）様々な種を含んでおり、

それが普く降る雨（の如き仏法恵みを

心地に諸の種を含み、普き雨に悉く

受けて）ことごとく皆芽を出す。

皆萌す。

すみやかに花の心（花の咲く道理）を悟つて（理解して）しまえば、

菩提（悟り）という果実

頓に花の情を悟り已れば、菩提の果

は自然に実る（生じる）。

自ずから成る。

奥書

いつたい、(自分は) 観世の家を守り、

芸を重んじるために、

およそ、家を守り、芸を重んずる

亡き父の言いおいた(言い残した)数々の教えを、

によつて、亡父の申し置きし事ども

心の底に留め置いて、

その大要を記録したのは、

を、心底にさしはさみて、大概を録

世間の批判を省みず芸道の廃れてしまうことを憂えるからであつて、

する所、世の謗りを忘れて道の廃れ

全くもつて他人の学識にまで(他座

ん事を思ふによりて、全く他人の才

にまで)自分の考えを及ぼそうとするのではない。

ただ自分の子孫へ

学に及ぼさんとはあらず。ただ子

家訓として残すためである。

孫の庭訓を残すのみなり。

風姿花伝の条々は、

以上である。

風姿花伝条々

以上

時に

応永七年

四月

十三日

于時 応永七年、卯月十三日

従五位下

左衛門大夫

秦元清が

書いた。

従五位下 左衛門大夫 秦元清

書



風姿花伝第四 神儀に云はく

目次へ



一、申樂、神代の始まりといつば、

申樂は、

神代に始まったと言われるが、

天照大神が、

天の岩戸に籠られた時に、

天照大神、天の岩戸に籠り給ひし時、

世界が暗闇になってしまったので、

たくさんの神様が、

天下常闇になりしに、八百万の神達、

天香具山に集まり、

天照大神のご機嫌をころうとして、

天香具山に集まり、大神の御心をと

神樂を演奏し、

細男の(滑稽な)舞を始められた。

らんとて、神樂を奏し、細男を始め

中でも、

天の鈿女の尊は、

(天の岩戸の前に)

給ふ。中にも、天の鈿女の尊、進み

進み出られて、

神の枝に幣を付け(それを持って、)

出で給ひて、神の枝に幣を付けて、

声を上げ、

火を焚いて、

足踏の音を轟かせ、

声を上げ、火処焼き、踏み轟かし、

神が憑いた(乗り移った)様子で、

歌い、舞い、奏でられた。

神憑りすと、歌ひ舞ひ奏で給ふ。

その声がかすかに聞こえたので、

天照大神は、

その御声ひそかに聞えければ、大神、

岩戸を少しお開きになった。

(すると、)地上はまた明るくなった。

岩戸を少し開き給ふ。国土また明白

神様達のお顔は(光に照らされ)白かった(面白く見えた)。

たり。神達の御面白かりけり。その

その時の遊び(歌舞)が、

申樂の始まりであると、

言われている

時の御遊び、申樂の始めと、云々。

詳しくは口伝(式三番口伝)にあるであろう。

くはしくは口伝にあるべし。

仏陀（釈迦）の在られた時代の印度においては、

須達長者が、

祇園精舎を建てて

一、**仏在所には、須達長者、祇園精**

（その落成祝いの）法要の時、

釈迦如来が、

舎を建てて供養の時、釈迦如来、御

御説法をなさったが、

（悪人の）堤婆達多が、

一万人の邪宗の徒を伴い、

説法ありしに、堤婆、一万人の外道

木の枝や笹の葉に幣を付けて踊り叫んだので、

を伴ひ、木の枝・篠の葉に幣を付けて

法要が続けられなくなった所に、

踊り叫めば、御供養伸べがたかりし

仏が、舍利弗に目配せなさんと、

に、仏、舍利弗に御目を加へ給へば、

仏の霊力を受けて、

後方の殿舎で、

鼓を打ち笛を吹き、

仏力を受け、御後戸にて、鼓・唱歌

阿難の学識、

舍利弗の知恵、

をととのへ、阿難の才覚、舍利弗の

富樓那の弁舌（話術）にて、

六十六番の物まねをなさつ

知恵、富樓那の弁舌にて、六十六番

たところ、

邪宗の徒は、

笛・鼓の音を聞いて、

の物まねをし給へば、外道、笛・鼓

後方の殿舎に集まり、

これ（六十六

の音を聞きて、後戸に集まり、これ

番の物まね）を見て静かになった。

その隙に（その間に）、

釈迦は法要を

を見て静まりぬ。その隙に、如来供

お続けになった。

それ以来、

天竺（印度）において

養を伸べ給へり。それより、天竺に

この道（申樂の道）は始まったのである。

この道は始まるなり。

日本国においては、

一、日本国においては、欽明天皇の

欽明天皇の御代に

大和国の泊瀬川で洪水のあったその時、

御宇に、大和国泊瀬の河に洪水の折節、

川上より一つの壺が流れ下って来た。

三輪神社の

河上より一つの壺流れ下る。三輪の

杉の鳥居のほとりて、

殿上人がこの壺を取り上げた。

杉の鳥居のほとりにて、雲客この壺を

壺の中には赤ん坊がいた。

(その赤ん坊は)容貌は優しく

取る。中にみどり子あり。かたち柔和

玉のようなであった。

これ(この赤ん坊)は、天から降りて来た人である

にして玉の如し。これ、降り人なるが

朝廷に申し上げた。

その夜、

天皇の

ゆるゑに、内裏に奏聞す。その夜、御門

夢に赤ん坊が出て来て言うには、

「この私は、

の御夢にみどり子の云はく、「我はこ

中国の秦の始皇帝の生まれ変わりでである。

日本に縁があつて

れ、大國秦の始皇の再誕なり。日域に

今ここに現われたのである。」

と言う。

天皇は不思議に

機縁ありて今現在す」と云ふ。御門奇

思われ、

宮中に(その赤ん坊を)召された。

(その赤ん坊は)

特に思し召し、殿上に召さる。成人

成人するにつれて、

才能と智力が人より優れていたのだ、

十五歳にして大臣の位

に従ひて、才智人に越えれば、年十五に

に上り、

秦の姓を賜った。

て大臣の位に上り、秦の姓を下さるる。

「秦」という字は、

「はだ」とも読むので、

「秦」といふ文字、「はだ」なるがゆるゑ

秦河勝こそが、

その人である。

に、秦河勝、これなり。

聖徳太子が、

天下にいささか争乱があった時、

上宮太子、天下少し障りありし時、

神代と印度の吉例（吉事の前例）にならって、

六十六番の

神代・仏在所の吉例にまかせて、六十六
物まねを（演じる事を）あの河勝に命じられ、

番の物まねをかか河勝に仰せて、同

同じく六十六番の申楽面（能面）をお作りになって、

じく六十六番の面を御作にて、すな

即座に河勝に与へられた。

（河勝が）橘の地にあった内裏の柴宸

はち河勝に与へ給ふ。橘の内裏柴宸

殿にてこれを演じた。

（すると）天下が治まり、

国は

殿にてこれを勤ず。天下治まり、国

平静になった。

聖徳太子は、

末代までこの芸を伝えるため、

静かなり。上宮太子、末代のため、

神楽であったものを、

「神」という字の偏を除いて、

神楽なりしを、「神」といふ文字の

旁を残された。

これ、

偏を除けて、旁を残し給ふ。これ、

曆の「申」であるゆえに、

「申楽」と名づけ

日曆の「申」なるがゆゑに、「申楽」

られた。

つまりそれは、

「樂しみを申す」という意味に由来して

と名づく。すなはち、樂しみを申す

いる。

または、神楽から分かれたからである（分かれたことを

によりてなり。または神楽を分くれ

意味している）。

ばなり。

あの河勝は、

欽明・敏達・用明・崇峻・推古の各天皇と聖徳太子にお仕えし、

かの河勝、欽明・敏達・用明・崇峻・

この猿楽の芸を

推古・上宮太子に仕へ奉り、この芸

子孫に伝え、

をば子孫に伝へ、化人跡を留めぬに

撰津の国難波の浦より、

よりて、撰津の国難波の浦より、う

うつほ舟に乗つて、

風にまかせて西の海に出た。

つほ船に乗りて、風にまかせて西海

(舟は) 播磨の国坂越の浦に着いた。

に出づ。播磨の国坂越の浦に着く。

浦人が船を陸に引き上げて見れば、

その姿は人間とはまるで変つて

浦人船を上げて見れば、形人間に変

(違つて) いた。

多くの人に憑き祟り(乗り移つて)めでたい前兆である不思議な現象を現した

われり。諸人に憑き祟りて奇瑞をな

そこで神として崇めたところ国は豊かになった。

す。すなはち神と崇めて国豊かなり。

「大きに荒るる」と書いて、

大荒大明神と名づけた。

「大きに荒るる」と書きて、大荒大

今の時代においても靈験あらたかである。

明神と名づく。今の代に靈験あらた

この神の本地は毘沙門天王にていらつしやる。

なり。本地毘沙門天王にてまします。

聖徳太子が、

逆臣(反逆者)となつた物部守屋を退治なさつた時も、

上宮太子、守屋の逆臣を平らげ給ひ

その河勝の自由自在の神通力によつて守屋は滅ぼされたと伝えられる。

し時も、かの河勝が神通方便の手に

かかりて守屋は失せぬと、云々。

平安京においては(なつてからは)

村上天皇の御代に、

一、平の都にしては、村上天皇の御

昔、聖徳太子が自筆でかかれた「申楽延年の記」を天皇がご覧になり、

宇に、昔の上宮太子の御筆の申楽延

ます、(申楽の) 神代と印度における

年の記を叡覧なるに、まづ、神代・

始まり(起源)

(天竺から) 西域・

中国を経て

日本に

仏在所の始まり、月氏・震旦・日域

伝わった狂言綺語の申楽を演じる事で、

仏を讃え仏法を広める

に伝はる狂言綺語を以て、賛仏転法

因縁を守り、

悪魔を退け、

幸福を招く。

輪の因縁を守り、魔縁を退け、福祐

申楽の舞を演奏すれば、

国は平穩に、

を招く。申楽舞を奏すれば、国穩や

民心は静かに、

(人々の) 寿命は長くなるだろうと、

かに、民静かに、寿命長遠なりと、

太子の御筆(筆跡)ではっきり書かれていたので、

太子の御筆あらたなるによつて、

村上天皇は、

申楽で天下の太平をお祈りするべきであるとして、

村上天皇、申楽を以て天下の御祈祷

その頃、

あの河勝がこの申楽の芸を伝え

たるべしとて、その頃、かの河勝こ

太子孫は、

秦氏安である。

の申楽の芸を伝ふる子孫、秦氏安な

(その秦氏安が) 六十六番の申楽を紫宸殿にて演じたのである。

り。六十六番の申楽を紫宸殿にて仕

その頃、

紀の権の守という人がいて、

る。その頃、紀の権の守と申す人、

才智(才能と智力が優れた)人であった。

この人(紀の権の守)は、あの氏安の

才智の人なりけり。これは、かの氏

妹婿であった。

安が妹婿なり。これをもあひ伴ひて

この人も一緒に伴って申楽を演じたのである。

申楽をす。

その後、

六十六番までを一日で演じるのは困難だというので、

その後、六十六番までは一日に勤

その中（六十六番の中）から選び出して、

めがたしとて、その中を選びて、稲

稲経の翁へ翁面、

代経の翁へ三番申楽、

父の助、

経の翁へ翁面、代経の翁へ三番申楽、父の

この三つの物まねを（基本に）定めた。

今の時代の式三番が、

助、これ三つを定む。今の代の式三番、

これである。

これはすなわち、（仏陀の）

法身・報身・

応身の三身の如来を

これなり。すなはち、法・報・応の三身

を象徴し奉ったものである。

式三番につい

の如来をかたどり奉る所なり。式三

ての口伝は、

別紙にあるだろう。

番の口伝、別紙にあるべし。

秦氏安より、

光太郎を経て今の金春まで

秦氏安より、光太郎・金春まで

二十九代の遠い子孫である。

これが、

大和の国

二十九代の遠孫なり。これ、大和国

円満井の座である。

同じように氏安より代々伝えられてきた聖徳太子が

円満井の座なり。同じく氏安より相

お作りになったの鬼の面、

伝へたる聖徳太子の御作の鬼面、春

春日神社の御神影（神のお姿）、

仏舍利（仏骨）、

この三つが、

日の御神影、仏舍利、これ三つ、こ

この家（円満井の家）に伝わっている。

の家に伝はる所なり。

現代においては、

奈良興福寺の維摩会において、

一、当代において、南都興福寺の維摩会に、

講堂において法要が行われる時に、

摩会にて、講堂にて法味を行ひ給ふ折

食堂にて舞延年が行われる。

邪教徒の心を和らげ、

節、食堂にて舞延年あり。外道を和

悪魔の心を静めるためである。

その間に、

食堂の前で

らげ、魔縁を静む。その間に、食堂

あのお経（維摩経）が講じられるのである。

つまり、

前にてかの御経を講じ給ふ。すなは

あの祇園精舎の吉例である。

ち、祇園精舎の吉例なり。

さて、

大和の国春日興福寺の神事の行ひ（として有名な薪申樂）とは、

しかれば、大和国春日興福寺神事

二月二日、

同じく五日、

行ひとは、二月二日、同じく五日、

宮寺（春日興福寺）において、

大和の四座が申樂を務める事が、

一年のご神事参勤

宮寺において、四座の申樂、一年中

の最初である。

（それは）天下太平を御祈禱する芸なのである。

の御神事始めなり。天下太平の御祈

禱なり。

一、大和の国春日神社の御神事に参勤する申樂の四座。

一、大和の国春日の御神事に相随ふ
申樂四座。

外山 結崎 坂戸 円満井

一、近江の国日吉神社の御神事に参勤する申樂の三座。

一、江州日吉の御神事に相随ふ申樂
三座。

山階 下坂 比叡

一、伊勢の国には、呪師猿樂が二座ある。

一、伊勢、呪師、二座。

一、(京の)法勝寺の御修正会に参勤する申樂の三座

一、法勝寺御修正参勤申樂三座。

△河内住△新座 △丹波△本座

△摂津△法成寺

この三座は、

同じく賀茂神社、住吉神社の御神事にも参勤する。

この三座、同じく賀茂・住吉の
御神事にも相随ふ。

前頁



奥義に云はく

目次へ

次頁



いつたい、

風姿花伝の条々は、

すべて、

そもそも、風姿花伝の条々、大方、

他人の目を憚り（他人に見られぬように）、子孫への家訓のために書き記したものであるが、

外見の憚り、子孫の庭訓のため注す

ただ自分が望む所の本心（本当の著述目的）とは、

といへども、ただ望む所の本意とは、

最近の、この道（申楽）の役者連中を見るにつけ、

芸の稽古工夫は

当世、この道の輩を見るに、芸のた

疎かで（いいかげんで）、

申楽以外の別の道（事）を熱心に行い、

しなみは疎かにて、非道のみ行じ、

ただ一時の表面的なおもし

たまたま当芸に至る時も、ただ一夕

ろさによる評判や、

しばしの名声と利益に染まって（心を奪われて）、

芸の根源を

の戯笑、一旦の名利に染みて、源を

忘れて芸道の流れ（芸の伝統）を見失ってしまった事（有様）は、

申楽がもはや滅びる時（が来た）かと、

忘れて流れを失ふ事、道すでに廃る

これを歎くばかりである。

時節かと、これを嘆くのみなり。

したがって、

申楽（の稽古・工夫）に励み、

その芸を重んじる

しかれば、道をたしなみ、芸を重

（尊重する）所に、

私心がなければ、

どうしてその功德を得られないことが

んずる所、私なくば、なかその徳

あるうか（どうして稽古工夫の結果が出ない事があるうか）。

を得ざらん。

とりわけ、

この芸は、

先人から受け継いだ芸の道を後人に

ことさら、この芸、その風を継ぐ

伝えていくものであるけれども、

自分の力（己の創意工夫）によって作り出す身のこなし（演技）

といへども、自力より出づる振舞あ

もあれば、

言葉（文字）だけで説明する（伝える）のは難しい。

れば、語にも及びがたし。

先人の芸の道を受け継いで、
心から心へと伝えていく（以心伝心の）、
その風を得て、心より心に伝ふる
花なれば、風姿花伝と名づく。

花であるから、

風姿花伝と名づけたのである。



さて、この能の道は、

大和申樂と近江申樂では芸風が違っている。

およそ、この道、和州・江州にお

近江申樂では、
優美な境地を取り

いて風体変れり。江州には、幽玄の

物まねを次（二番目）にして、

境を取り立てて、物まねを次にして、

大和申樂では、
まずは物まねを取り

かかりを本とす。和州には、まづ物

上げ、

様々な物まねを演じ尽くして、

まねを取り立てて、物数を尽くして、

しかも（その上）優美な芸風であらうとするのである。

しかも幽玄の風体ならんとなり。し

本当の上手（な役者）は、

どちらの芸風であつても、

かれども、眞実の上手は、いづれの

漏れた所（漏らす事）なく演じられるはずだ。

風体なりとも、漏れたる所あるまじ

一方向の芸風ばかりを演じる役者は、

きなり。一向きの風体ばかりをせん

本当には（能の奥義を）会得していない人の演技であらう。

者は、まこと得ぬ人の技なるべし。

したがって、

大和申樂の芸風は、

物まねと言葉の面白さを根本と

されば、和州の風体、物まね・義

あるいは長（芸の品格）のある様子、

理を本として、あるいは長のあるよ

あるいは怒り狂う激しい動作、

そほひ、あるいは怒れる振舞、かく

このような物まねの数々を、

得意とする所（芸風）である人（世人）も

のごとくの物数を、得たる所と人も

心得（思つており）、（役者の）稽古もつばらそこに集中しているけれども、

心得、たしなみもこれ専らなれども、

亡き父（観阿弥）が名声を得た全盛期の頃、

「静が舞」の能、

亡父の名を得し盛り、静が舞の能、

「嵯峨の大念仏の女物狂」の物まねなどは、

嵯峨の大念仏の女物狂の物まね、ことさら得意とした芸風の演目なので、

とにことに得たりし風体なれば、天下の賞賛と名望を得た事は、

世間に広く知られている。

下の褒美・名望を得し事、世以て隠

れなし。これ、幽玄無上の風体なり。

これは、この上なく優美な芸風である。

また、

田楽の芸風は、

全く別の事（別種）であり、

また、田楽の風体、ことに格別の

見物人も、

申楽の芸風と（田楽の芸風を比較して）批評する

事にて、見所も、申楽の風体には批

判でもない、

皆誰もが思い込んでいるけれども、

判にも及ばぬと、皆々思い慣れたれ

近い時代に（一昔前に）この道（田楽の道）の神様（名人）とまで聞こえた（との評

ども、近代にこの道の聖とも聞えし

判であった）本座の一忠は、

とりわけ様々な物まねを演じ尽くす中で、

本座の一忠、ことに物数を尽

鬼神の物まね、

くしける中にも、鬼神の物まね、怒

怒り狂うようす（の物まね）など、

できない芸は何一つなかったとうかがっている（聞いて

れるよそほひ、漏れたる風体なかり

それで、

けるとこそ承りしか。しかれば、亡

亡き父（観阿弥）は、常々（いつも）、一忠の事を、

「自分の芸の師である」と、

父は、常々、一忠が事を、「わが風体

確かに言っていた。

の師なり」と、まさしく申ししなり。

ところで、(能役者は) ただもう、

誰も彼もが、

あるいは慢心による強情

されば、ただ、人ごとに、あるいは

から、

あるいは心得がないゆえに(実力がないので)、

一方の芸風

情識、あるいは得ぬゆゑに、一向き

ばかりを得て(習得して)、

あらゆる方向に渡る芸風を習得する

の風体ばかりを得て、十体にわたる

他の座の芸風を嫌うのである。

所を知らず、よその風体を嫌ふなり。

これは、

嫌うということではなく、

ただ実力が不足している

これは、嫌ふにはあらず、ただかな

ことから来る慢心による強情である。

したがって、(あらゆる方向に渡る芸風を習得する事が) 出来

はぬ情識なり。されば、かなはぬゆ

ゑのために、

一方の芸風を習得している程度の名望を、

一旦は

ゑに、一体得たる程の名望を、一旦

得るけれども、

長く続く花(芸の魅力)がないので、

は得たれども、久しき花なければ、

(名人として) 天下に(都では) 認められない。

その道の達人として、

天下に(都で) 認

天下に許されず。堪能にて、天下の

められる程の役者は、

どの芸風を演じようとも、

許されを得ん程の者は、いづれの風

面白いだらう。

芸風と演技の

体をするとも、面白かるべし。風体

型は人それぞれであるけれども(人それぞれ違ってはいるけれども)、

面白い所ほどの芸風の能

形木は面々各々なれども、面白き所

にも存在(共通)しているだらう。

この面白いと観客が見る

はいづれにもわたるべし。この面白

所が、

花(芸の魅力)なのであらう。

これ(花)は、大和申楽・

しと見るは、花なるべし。これ、和州

近江申楽、

また田楽の能にも漏れなく存在している。

江州、または田楽の能にも漏れぬ所

したがって、
なり。されば、
漏れぬ所を持ちたる
為手ならでは、
天下の許されを得ん
事あるべからず。

また付言すると（つけ加えると）、

ことごとく全部それらの芸風を極めていなくとも、

また云はく、
ことごとく物数を極

たといえば、

十の内七つか八つまで極めていような上手の、

めずとも、
仮令、
十分に七八分極め

その中の特に得意な芸風を、

たらん上手の、
その中にことに得た

自分の座の門弟に教える基本の型にするほど極め尽くした役者が、

る風体を、
我が門弟の形木にし極め

しかも工夫をこらすならば、

これまた、

たらんが、
しかも工夫あらば、
これ

天下の名声を得るだろう。

しかし、

また、
天下の名望を得つべし。
さり

実際には、

十に足らぬ所があるならば（元璧でないならば）、

ながら、
げには、
十分に足らぬ所あ

都と田舎（土地柄）・身分の上下（貴賤）の差において、

見物人が褒めたり

らば、
都鄙・上下において、
見所の

貶したりして批評するだろう。

褒貶の沙汰あるべし。

およそ（総して）、

能で名声を得るといふ事は、

種類が多い（いろいろな場合が

多し。およそ、能の名望を得る事、品々

多くある）。

上手は目利かずに気に入られる事は難しい。

多し。上手は目利かずにの心にあひか

下手が目利きに認められる事はない。

なふ事難し。下手は目利きの眼に合

下手が目利きに認められないのは、

ふ事なし。下手にて目利きの眼にか

何の疑問もあるはずはない。

なはぬは、不審あるべからず。上手

上手が目利かずに気に入れない事、

これは、

の目利かずにの心に合はぬ事、これは、

目利かずに鑑識眼の及ばない所であるけれども（鑑識が低いからであるけれども）、

目利かずにの眼の及ばぬ所なれども、

能の奥義を会得した上手で、

工夫をこらす役者であれば、

得たる上手にて、工夫あらん為手な

また、

目利かずに目にも（が見ても）面白いと見えるように（感じる

らば、また、目利かずにの眼にも面白

ように）能を演じるだろう。

この工夫と熟達を

しと見るやうに能をすべし。この工

極めた役者を、

夫と達者とを極めたらん為手をば、花

花を極めていると言ふべきであろう。

したがって、

を極めたとや申すべき。されば、こ

この芸位（芸の実力）に達している役者は、

どんなに年寄りであっても、

の位に至らん為手は、いかに年寄た

若い役者の時分の花（若さ故の魅力）に負ける（ひけをとる）事はあるべから

りとも、若き花に劣る事あるべから

ない。

だから、

この芸位（芸の実力）を得た（持つて）ような上手（な役者）

ず。されば、この位を得たらん上手

こそ、

都でも認められ、

また、

遠国や田舎の

こそ、天下にも許され、また、遠国・
 人までもが、
 すべて面白いと見るだろう。

田舎の人までも、あまねく面白しと
 この工夫を会得した役者は、

は見るべけれ。この工夫を得たらん
 大和申楽でも近江申楽でも、
 あるいは田楽の

為手は、和州へも江州へも、もしく
 見物人の好みや望みによつて、

は田楽の風体までも、人の好み・望
 何でも演じこなせる上手であろう。

みによりて、いづれにもわたる上手
 この稽古工夫の本旨（あらゆる芸風を完璧に習得すること）を明ら

なるべし。このたしなみの本意をあ
 かにする（はつきりさせる）ため、
 風姿花伝を著作するのである。

らはさんがため、風姿花伝を作する

なり。

このように言つたからといって、

自分の流派の芸風の基本が疎か

かやうに申せばとて、我が風体の
 であつては、（身につけていないのでは、
 まつたくもつて能に生命がないで

形木の疎かならんは、ことにことに
 あるう（命が宿っていないであらう）。
 これは、
 弱い役者であらう。

能の命あるべからず。これ、弱き為
 自分の流派の芸風の基本を固めてこそ、

手なるべし。我が風体の形木を極め
 あらゆる芸風をも知っている（に精通している）といえるのだ。

てこそ、あまねき風体をも知りたる
 あらゆる芸風を心がけようとして

にてはあるべけれ。あまねき風体を

(身につけようとして、

心にかけてんとて、我が形木に入らざ
(ない) 役者は、

自分の流派の芸風を知らないだけでなく(知らないのだから)、

らん為手は、我が風体を知らぬのみ

(ましてや) 他の流派の芸風をも、

確かに知っているはずは

ならず、よその風体をも、確かに
だから、

能が弱

まして知るまじきなり。されば、能

長く花があるはずがない(長く花が持続するはずがない)。

弱くて、久しく花はあるべからず。

長く花がないのであれば(持続しないのでは)、

どの芸風をも知らないのと同じ

久しく花のなからんは、いづれの風

であらう。

だから、

体をも知らぬに同じかるべし。しか

花伝の花の段に、

「数多くの芸風の稽古をし尽く

れば、花伝の花の段に、「物数を尽

し、

花(芸の魅力)のなくならない

くし、工夫を極めて後、花の失せぬ

境地を知るだろう(がわかるだろう)。

と言ったのである。

所をば知るべし」と言へり。

秘伝（の教え）によると、

そもそも、

芸能とは、

秘義に云はく。そもそも、芸能と

世の人々の心を和ませて、

貴賤の人々に感動を与え

は、諸人の心を和らげて、上下の感

る事であり、

（それは）寿福増長（めでたい福・幸福）の根本、

（また）寿命を延ば

をなさん事、寿福増長の基、遐齡延

す方法（手段）なのである。

極め尽くせば（究極においては）、

どの

年の方なるべし。極め極めては、諸

芸能の道もことごとく（すべて）寿福増長・遐齡延年なのである。

道ことごとく寿福延長ならんとなり。

ことさら、

この芸（申楽・能）は、芸位（芸の実力）を極めて、

立派な

ことさら、この芸、位を極めて、佳

名を残す事、

これが天下に（都で）認められたという事である。

名を残す事、これ天下の許されなり。

これが（能役者にとつての）寿福増長なのである。

これ寿福増長なり。

けれども、

とりわけ大切な心得がある。

天性の

しかれども、ことに故実あり。上

優れた芸能の鑑識眼を持った人（都の高貴な観客）の目に見える所が、

芸の品格や芸位が極まった

根上智の眼に見ゆるる所、長・位の

（最高に達した）役者の場合は、

（見物人の鑑識眼と役者の芸位が）相応にびたりと

極まりたる為手におきては、相応至

釣り合っているので、

何ら問題はない。

だいたい、

愚かな連中や、

極なれば、是非なし。およそ、愚か

遠国や田舎の卑しい連中の目には、

なる輩、遠国・田舎の卑しき眼には、

この芸の品格や芸位の高い芸風は、

わからない（理解で

この長・位の上がれる風体、及びが

きない）。

この芸（申楽・能）

たし。これをいかがすべき。この芸

は、大衆に愛され好まれる事を以て、

一座を設立し運営していく上

とは、衆人愛嬌を以て、一座建立のでの寿福としている。 だから、 あまりに高級で大衆が理解できない

寿福とせり。ゆゑに、あまり及ばぬ芸風ばかりであると（を演じると）、 また世間の人々（大衆）の賞賛は得られない。

風体のみなれば、また諸人の褒美欠このために、 能を演じるにあたり初心時代（のわかりやすく大衆に向け

けたり。このために、能に初心を忘た演技）を忘れないようにし、 時に応じて、 場所によって、（時と場所に依じて）

れずして、時に応じ、所によりて、（大衆の）愚かな目にも 「なるほど（面白い）」と思うように能をする事、

愚かなる眼にも「げにも」と思ふやこれが寿福である。

うに能をせん事、これ寿福なり。

よくよくこの世間の状況を見極めて（考えて）みると、

よくよくこの風俗の極めを見るに、貴人の御前・ 山寺・ 田舎・ 遠国・ 諸神社の祭礼に至るまで、

貴所・山寺・田舎・遠国・諸社の祭おしなべて（概して・全体的に） 人の誇り（誹謗・悪口）を

礼に至るまで、おしなべて誇りを得受けない役者を、 寿福を身につけた達人の役者と言うべきではなからうか。

ざらんを、寿福達人の為手とは申すだから、 どんな上手であつても、

べきや。されば、いかなる上手なり大衆に愛され好まれる事に欠けている所があるならば、

とも、衆人愛嬌欠けたる所あらんを寿福を増長させる役者とは言いがたい。

ば、寿福増長の為手とは申しがたし。だから、 亡き父（観阿弥）は、 どんな田舎や

しかれば、亡父は、いかなる田舎・

山里の辺りな所であっても、

そこの人々の心（気持ち）をのみこんで、

山里の片辺りにても、その心を受け

その場所の風俗を特に大事に受け止めて、

て、所の風儀を一大事にかけて、芸

芸をしたのである。

をせしなり。

このように言つたからといって、

初心者は、

かやうに申せばとて、初心の人、

「それ程までにはどうして簡単に極められるだろうか（そんな高いレベルまで、どうして簡単に到達で

「それ程は何とて左右なく極むべき」

きようか」と、へこたれることがあつてはならない。

とて、退屈の儀はあるべからず。こ

ここで述べた条々を心の底にあてて（よく考えて）、

その道理（ここで述べた条々の

の条々を心底にあてて、その理をち

内容を少しづつ取り上げて、

思慮分別をめぐらして、

自分の実力に合わせて

ちと取りて、料簡を以て、我が分力

（自分の実力相応に）、

工夫をこらすがよい。

に引き合わせて、工夫をいたすべし。

おおよそ（大体において）、今述べている条々・工夫（奥義篇の寿福論）は、

初心者より

おおよそ、今の条々・工夫は、初心

は、

もつと上手な役者においての（向けての）心得・工夫である。

の人よりは、なほ上手におきての故
まれに優れた上手になっている役者も、

実・工夫なり。たまたま得たる上手

自分（の芸）を過信して、

名声に

になりたる為手も、身を頼み、名に
惑わされて、この心得を欠き、
むなしく

化かされて、この故実なくて、いた

名声ほどには（名声のわりには）寿福の欠けている人が多いので、

づらに名望ほどは寿福かけたる人多

これを嘆くのである。

すぐれた芸力を獲得

きゆるゑに、これを嘆くなり。得たる

心の工夫（配慮・気配り）がなくては思い通りにいかない。

所あれども、工夫なくてはかなはず。

すぐれた芸力を持ち、心の工夫（配慮・気配り）を極める（し尽くす）ことは、

花に種を添えたよ

得て、工夫を極めたらんは、花に種

うなものである（次々と花が咲き続けるだろう）。

たとえ、

天下に

を添へたらんがごとし。たとひ、天

（都で）（名人であると）認められる程の役者も、

人の力

下に許されを得たる程の為手も、力

ではどうにもならない因果（運命）で、万一少し廃れる（人氣の落ちる）時があったとしても、

なき因果にて、万一少し廃るる時分

田舎・遠国で褒め讃えられる（賞賛される）魅力を失っていないければ、

ありとも、田舎・遠国の褒美の花失

ぶつりと芸の道が絶たれる事はないはずだ（芸人としての生命が絶たれる

せずは、ふつと道の絶ふる事はある

事はないはずだ。芸の道が絶たれなければ、

また都で認められる

べからず。道絶えずば、また天下の

時節に巡り会う事もあるだろう。(時も来るだろう。)

時に会ふ事あるべし。

一、この寿福増長への精進について述べたが、

一、この寿福増長のたしなみと申

ひたすら俗世間の道理に専心して、

せばとて、ひたすら世間の理にかか

もし欲心(欲望)にとられるならば、

これが何よりも一番に、

りて、もし欲心に住せば、これ第一、

芸の道の廃れる原因である。

芸の道のために精進するならば、

道の廃るべき因縁なり。道のための

寿福増長があるだろう。

たしなみには、寿福増長あるべし。

寿福のための精進では、

芸の道は間違いない

寿福のためには、道まさ

廃れるであろう。

芸の道が廃れば、

寿福も自然となくなるだろう。

に廃るべし。道廃らば、寿福おのづ

正直円明(正しく真つすぐで欠けた所がなく明らか)に(身をたもつことが)、

この世

から滅すべし。正直円明にして、世

のあらゆる徳が素晴らしい花を開く(この上もない芸の境地に至る)原因(もと)であると精進すべ

上万徳の妙花を開く因縁なりとたし

きである。

なむべし。

さて、

花伝の中で、

年来稽古条々から始めて、

およそ、花伝の中、年来の稽古よ

この（奥義）条々まで書き記して来たが、

（これは）全く

り始めて、この条々を注す所、全く

幼少からずっと、

自力より出づる才学ならず。幼少よ

亡き父（観阿弥）の指導を受けて一人前となつてから、

り以来、亡父の力を得て人と成りし

目で見、

耳に

より、二十余年が間、目に触れ、耳

二十数年の間に、

聞いたまま、

に聞き置きしまま、その風を受けて、

能の道（申樂）のため、

（観世の）家のため、

その（亡き父）の芸風を受け継いで、

道のため、家のため、これを作る

であつて、私の（名誉、利益の）ためではない。

所、私あらんものか。

時に

応永九年三月二日

書き終わった。

于時応永第九之曆暮春二日 馳筆畢

世阿弥陀仏

判（花押）あり。

世阿 有判



花伝第六 花修に云はく

[目次へ](#)



能の台本を書く事は、この能の道の命（最も大切なこと）である。一、能の本を書く事、この道の命

なり。極めたる才学の花なけれども、ただ工夫によつて（工夫をこらすだけで）、よい能になるものである。

のなり。大方の風体、序破急の段に（よい能の）大体の風体（姿・あり方）は、序破急の段（風姿花伝第三・問答采々第二問答）に書いてある。特に、

見えたり。ことさら、脇の申楽、本冒頭の謡の最初のうたいだしの部分から「ああ、あの話し（い

がて人の知るごとくならんずる来歴（盛り込まなくとも）、

を書くべし。さのみに細かなる風体（最初の謡の最初のうたいだしの部分から「ああ、あの話し（い

下りたらんが、指寄り花々とする様（盛り込まなくとも）、

に、脇の申楽をば書くべし。また、（盛り込まなくとも）、

も、言葉・風体を尽くして、細かに（盛り込まなくとも）、

書くべし。

たとえば、名所・旧跡を題目とした能であるならば、

仮令、名所・旧跡の題目ならば、

その土地にちなんている（ちなんで詠まれている）詩歌（漢詩と和歌）の、

聞き

その所によりたらんずる詩歌の、言なれて（誰もが知って）いる言葉（文句）を、

能の山場に集中するのがよい。

葉の耳近からんを、能の詰め所に寄

主役の言葉にも所作（演技の動作）にも関係しない所では、

すべし。為手の言葉にも風情にもか

大切な言葉（名文句）を書き入れてはなら

からざらん所には、肝要の言葉をば

何であろうとも、

観客は、

載すべからず。何としても、見物衆

見る所も聞く所も、

上手な役者でなければ関心を

は、見る所も聞く所も、上手をなら

示さない。

したがって、

一座の棟梁（主役）

では心にかけて。さるほどに、棟梁

所作が、

目に入り、

の面白き言葉・振り、目にさえぎり、

心に刻まれば、

観客は、

すぐに（即座に）

心に浮かめば、見聞く人、すなはち

これが、

最もよい、

能を作る手段である。

感を催すなり。これ、第一、能を作

る手立てなり。

ただとにかく、

優雅で、

意味のすぐわかるような詩歌（漢詩と和歌）

ただ、優しく、理のすなはちに

の言葉を取り入れるべきである。

聞ゆる様ならんずる詩歌の言葉を取

優雅な言葉を所作に合わせると（優雅な言葉に合わせて所作をする）、

るべし。優しき言葉を振りに合はす

不思議に、

自然に人物（登場人物）も

れば、不思議に、おのづから人体も

優美な趣になるものである。

硬く強ばった

幽玄の風情になるものなり。硬りた

言葉は、所作（演技の動作）に合わない。

しかしながら、

る言葉は、振りに応ぜず。しかあれ

硬い言葉で耳慣れないのが（硬い耳慣れない言葉が）、

またよい所（箇所）

ども、硬き言葉の耳遠きが、またよ

であることもあるだろう。

それは、

典拠された素材の登場人物（主人公）

き所あるべし。それは、本木の人体

（素材が）中国か日本の由来（中国に

由来するか日本に由来するか）によって（言葉を使い分けるべきである。

によりて似合うべし。漢家・本朝の

来歴に従って心得分くべし。

ただし、

来歴に従って心得分くべし。ただ、

卑俗な（品がなく俗っぽい）言葉を使うと、

見た目が悪い（下品な）能になってしまふ

卑しく俗なる言葉、風体悪き能にな

るものである。

るものなり。

そうであるから、

よい能と言うのは、

典拠が正しく

しかれば、よき能と申すは、本説

（確実に、

新鮮な表現の演技で、

見せ場

正しく、めづらしき風体にて、詰め

（山場）があり、

趣が優美であるのを、

第一に

所ありて、かかり幽玄ならんを、第

（最も）よい能とすべきである。

演技は新鮮な感じではないが、

一とすべし。風体はめづらしからね

（演技の内容が）複雑でなく、

まっすくにすつと

ども、わづらはしくもなく、直に下

進み（わかりやすく）、

面白い所があるのを、

第二（その次）

りたるが、面白き所あらんを、第二

とすべきである。

これは大体の定めである。

とすべし。これはおほよその定めなり。

ただし、能は、 何か一つ、上手な役者の手で、
 ただ、能は、 一風情、上手の手にか

かり、便りだにあらば、面白かるべし。
(演出を工夫する) 手がかりさえあれば、面白くなるだろう。

演能の数を尽くし(多くの能を演じ、)、上演の日を重ねれば (上演が何日も続けば)、 たとえ出来の
 番数を尽くし、日を重ぬれば、たと

悪い能でも、

新鮮に見えるように何度も演じかへ色取り (おもしろみ) を

ひ悪き能も、めづらしくし替へし替
加えれば、面白く見えるだろう。

へ色取れば、面白く見ゆべし。され

能は、

ただ、上演する時期と順番 (番組内での配置) なのである。(次第である。)

ば、能は、ただ、時分・入れ場なり。
(それが) 役者の心がけと

出来の悪い能だからといって捨ててはいけない。

悪き能とて捨つべからず。為手の心
いうものである。

遣ひなるべし。

ただし、

ここに (注意すべき) 事情がある。

絶対に演じてはならない

ただし、ここに様あり。善悪にす
能がある。

まじき能あるべし。いかなる物まね
ととも、 たといえば、 いかに物まねであろうとも (あると言おう

なればとて、仮令、老尼・姥・老僧
老尼・姥 (老婆)・老僧などの姿に扮して、

などの形にて、さのみは狂ひ怒る事
をしてはならない。 また、 むやみに狂い怒る事があつてはいけない (狂い怒る演技

あるべからず。また、怒れる人体に
して、 優美な物まねをすること、 怒った人の様子で (怒れる人体に扮

て、幽玄の物まね、これ同じ。これ
本当のせ能、 これも同じ (同様) である。これを

をまことのえせ能、きやうさうとは
狂相 (狂つたため) の能と言おうべきである。

この心（心得）は、
風姿花伝第二物学条々の段で述べている。

申すべし。この心、二の巻きの物狂

ひの段に申したり。

また、

すべての事に、

相応がなければ成就（成功）という

また、一切の事に、相応なくば成

こともない。

よい素材の能を、

就あるべからず。よき本木の能を、

上手な役者が演じ、

しかもみごとな出来であった場合を、

上手のしたらんが、しかも出で来た

相応と言うのである。

だから（それで、

らんを、相応とは申すべし。されば、

よい能を上手な役者が演じる事を（演じる場合）、

どうして不出来などであろうかと、

よき能を上手のせん事、などか出で

人は皆（誰もが）思い込んでいるが、

来ざらんと、皆人思ひ慣れたれども、

不思議に、

不出来な事があるものである。

不思議に、出で来ぬ事あるものなり。

これを、

目利きの（鑑識眼のある）観客は見分けて（見抜いて）、役者に過ち（欠点）

これを、目利きは見分けて、為手の

のない事を知っているけれども、

ただ大体の人は（普通一般の

咎もなき事を知れども、ただ大方の

人は、

能も悪く、

役者もそれほど（上手）ではないと見るのである。

人は、能も悪く、為手もそれほどに

はなしと見るなり。そもそも、よき

よい能を上手な役者が演じる事において、

どうして不出来となるのかを考えて（思索して）

能を上手のせん事、何とて出で来ぬ

みると、

あるいは、

その時の

やらんと工夫するに、もし、時分の

投稿サイト

陰陽（陰の気と陽の気）が和合しないためか、
陰陽の和せぬ所か、または花の公案
（芸の魅力を表現する工夫）が欠けているからか、
また（役者に）花の工夫（芸の魅力を表現
する工夫）が欠けているからか、
疑問はまだ残っている。
なきゆえか、不審なほ残れり。

一、能の作者が分別（認識）しておくべき事がある。

一、作者の思ひ分くべき事あり。

まったく動きのない静かな素材（題材）でもつばら謡を聞かせるだけの能と、

ひたすら静かなる本木の音曲ばかり

また（逆に）舞と所作（演技の動作）だけの能とは、

なると、また舞・はたらきのみなる

一方向（二面的）であるので、書き易いものだ。

とは、一向きなれば、書きよきもの

謡に合わせて所作をする能があるだろう。

なり。音曲にてはたらく能あるべし。

これは（これを書くのは）非常に難しい。

（観客が）本当に面白いと感動するのは、

これ一大事なり。真実面白しと感を

これである。

（観客が）聞く言葉は、

聞き慣れた

なすは、これなり。聞く所は、耳近

面白い言葉で、

節まわしがよく、

に面白き言葉にて、節のかかりよく

文字（言葉）の流れが美しく続いているようなのを、

て、文字移りの美しく続きたらんが、

ことさら（とりわけ）、

面白い所作を持った（で演じる）山場（見せ場）を工夫して書くべき

ことさら、風情を持ちたる詰めをた

である。

これらの諸条件（言葉・節・文字移り・風情）

しなみて書くべし。この数々相応す

が相和合することによって、すべての観客が一同に感動するのである。

る所にて、諸人一同に感をなすなり。

ことさら、

（能の作者として）具体的に知っておくべき事がある。

さるほどに、細かに知るべき事あ

所作（演技の動作）を基準にして謡をうたう役者は、

り。風情を博士にて音曲をする為手

初心段階（未熟な初心者）である。

謡から所作（演技の動作）が生じるのは、

は、初心の所なり。音曲よりはたら

きの生ずるは、功入りたるゆる急なり。
稽古の年功が積もった結果である（長年の稽古のたまものである）。
 謡は聞くもので、所作は見るものである。

音曲は聞く所、風体は見る所なり。
（能の）一切の事（演技）は、謡の意味を基準にしてこそ、

一切の事は、謂れを道にしてこそ、
あらゆる所作が生ずるべき道理がある。

万の風情にはなるべき理なれ。謂れ
を表現するのは言葉（謡の文句）である。
 謡は主体（主）であり、

を現はすは言葉なり。さるほどに、
所作は応用（従）である。
 そうであるならば、

音曲は体なり、風情は用なり。しか
したがって、

れば、音曲よりはたらきの生ずるは
謡から所作が生ずるのは順（順序が正しい）である。
 所作から謡が生ずるのは逆（順序が逆・正しくない）である。

順なり。はたらきにて音曲をするは
順から

逆なり。諸道・諸事において、順・
あらゆる道とあらゆる物事においては、
 逆へと流れ下る（進む）べきである。

逆とこそ下るべけれ。逆・順とはあ
（だから）くれぐれも、
 謡の文句を手がか

るべからず。かへすがへす、音曲の
所作を色取られるべきである。

言葉の便りを以て、風体を色取り給
これが謡と所作が一つになる稽古である。

ふべきなり。これ音曲・はたらき一

心になる稽古なり。
さて、

さるほどに、能を書く所にまた工夫
能を書くにあたりまた工夫すべき事がある。

謡より所作を生じさせるために、

あり。音曲よりはたらきを生ぜさせ

(台本を) 書く際には、

所作を基本に書くべきである。

んがため、書く所をば、風情を本に

所作を基本に書いて、

そしてその

書くべし。風情を本に書きて、さて

文句を謡う時には、

所作は自然に生じるだろう。

その言葉を謡ふ時には、風情おのづ

だから、

書く際には、

から生ずべし。しかれば、書く所を

所作を先に立てて(優先して)、

しかも謡の節まわしと曲の趣がよい

ば、風情を先立てて、しかも謡の節・

(おもしろい) ように工夫すべきである。

さて(そして)、

かかりよき様にたしなむべし。さて、

その時の上演に至つては(実際の上演に当たつては)、

(逆に) また謡を先に(優先して)

当座の芸能に至る時は、また音曲を

演じればよい。

この様に工夫して、

稽古

先とすべし。か様にたしなみて、功

の年数を積み重ねれば、

謡えば所作に、

舞えば謡になつて、

入りぬれば、謡ふも風情、舞ふも音

万曲一心(あらゆる演技が心そのままになる)の達人となるだろう。

曲になりて、万曲一心たる達者とな

これはまた、

作者の手柄(功績)によるものである。

るべし。これまた、作者の高名なり。

一、能能において、強い・優美に、強強いき・幽玄優美、弱弱いき・荒荒い

(の違い)を知る事。

大体は目に見えている事なので、

きを知る事、大方は見えたる事なれば、

(その違いは)わかりやすそうであるが、

真に(本当には)これ

ば、たやすき様なれども、真実これ

(その違い)を知らないので、

弱く、

荒い役者が多い。

を知らぬによりて、弱く、荒き為手

多し。

まず、一切の物まねに、

(まね方に)偽りがある

まづ、一切の物まねに、偽る所に

ので、荒くも弱くもなると知るべきである。

て、荒くも弱くもなると知るべし。

この境(まね方の真偽の境)は、いい加減な工夫では見分けられないだろう。

この境、よき程の工夫にては紛るべ

よくよく心の底に分け入って(考え尽くし)納得しておくべき事である。

し。よくよく心底を分けて案じ納む

べき事なり。

まず、弱いはずの事を強くするのは、

まづ、弱かるべき事を強くするのは、

偽りであるから、これは荒いのである。

強いはずの事を

偽りなれば、これ荒きなり。強かる

強くするのは、これは強いのである。

荒いのでは

べき事に強きは、これ強きなり。荒き

ない。もし、強いはずの事を優美にしようとして、

にはあらず。もし、強かるべき事を

物まねが不十分であったならば、

幽玄にせんとて、物まねに足らずば、

優美ではなくて、

これは弱いのである。

幽玄にはなくて、これ弱きなり。さる

したがって、

ただ物まねに身をまかせて（ひたすら物まねに集中して）、

ほどに、ただ物まねにまかせて、そ

その物（まねる対象）になりきって、

偽りがなければ（正確にまねれば）、

の物になり入りて、偽りなくば、荒

荒くも弱くもなるはずがない。

くも弱くもあるまじきなり。

また、

強くあるべき道理を過ぎて（度を超えて）、強いのは、

また、強かるべき理過ぎて強きは、

格別に荒いのである。

優美な芸風よりなお優しい芸風にしようとして

ことさら荒きなり。幽玄の風体より

すれば、

これは、

格別に弱い

なほ優しくせんとせば、これ、こと

のである。

さら弱きなり。

この区別（強い・優美、弱い・荒いの区別）をよくよく見てみると（考えてみると）、

この分け目をよくよく見るに、幽玄

優美と強いとが、

（物まねの対象とは）別にあるものと考えるから、

と強きと、別にあるものと心得るゆ

迷うのである。

この二つは、

その物（物まねの対象物）

ゑに、迷ふなり。この二つは、その

自体（の中）にある（備わっている）。

たとえば、

人においては（人間ならば）、

物の体にある。たとへば、人におい

女御・更衣、

または舞女・美人・美男、

ては、女御・更衣、または遊女・好

草木であれば花の類、

この様な数々の

色・美男、草木には花の類、か様の

物は、

その姿が優美な物である。

また、

数々は、その形幽玄の物なり。また、

あるいは武士・荒くれ者、

あるいは**武士・荒夷**、あるいは**鬼・神**、

草木であれば松・杉、

この様な数々の類は、

神、草木にも松・杉、か様の数々の

強い物と言うべきであらうか。

この様な

類は、強き物と申すべきか。か様の

あらゆる物の数々を、

よく似せきつたならば、

万物の品々を、よくし似せたらんは、

優美の物まねは優美になり、

強い（物まね）は

幽玄の物まねは幽玄になり、強きは

自然に強くなるだろう。

この区別（物まねの対象物自体

おのづから強かるべし。この分け目

にある違い・区別）を配慮せずに、

ただひたすら優美に演じようとばか

をば宛てがはずして、ただ幽玄にせ

り心がけて、

物まねが疎かになると、

んとばかり心得て、物まね疎かなれ

それ（その対象物）に似ない。

似ないのを知らないで（に気づかないで）、

ば、それに似ず。似ぬをば知らで、

（自分では）優美に演じるぞと思ひ込んでいる心、

これが弱いのである。

幽玄にするぞと思ふ心、これ弱きな

だから、

舞女・美男などの物まねをよく似せたならば、

り。されば、遊女・美男などの物ま

自然と優美になるものである。

ねをよく似せたらば、おのづから幽

ただただ似せようということだけを思うべきである。

玄なるべし。ただ似せんとばかり思

また、

強い事をも（強い対象も）、

よく似せたならば、

ふべし。また、強き事をも、よく似

自然に強くなるであらう。

せたらんは、おのづから強かるべし。

ただし、

心得ておくべきことがある。

やむを得ない事（どうしようもない事）

ただし、心得べきことあり。力な

であるが、この道（申楽・能の道）は観客を根本とする（最も大切と考える）芸であるから、

く、この道は見所を本にする態なれ

その時代時代の風潮で、

優美（な芸）

ば、その当世当世の風儀にて、幽玄

を喜ぶ観客にしたならば（観客が優美な芸を喜ぶならば）、

をもてあそぶ見物衆の前にては、強

強い方向を、

少し物まね（の原則）からはずれてでも、

き方をば、少し物まねにはづると

優美の方向へ、

お進みになられるべきである。

も、幽玄の方へは、遣らせ給ふべし。

この工夫（演技の工夫）に関して、

作者もまた心得ておくべきことがある。

この工夫を以て、作者また心得べ

何としても、

き事あり。いかにも、申楽の本木に

優美な人物で、

申楽（能）の素材（主人公）には、

は、幽玄ならん人体、まして心・言

あるのを（ある様な人物を）、

心がけて書くべきである。

葉をも優しからんを、たしなみて書

それに偽りがなければ（その主人公を偽りなく正確に演じれば）、

くべし。それに偽りなくば、おのづ

自然に優美な役者と見えるだろう。

優美の（優美に見

から幽玄の為手と見ゆべし。幽玄の

える。道理を知り尽くしたならば、

ひとりでに（自然に）強い所もわかる

理を知り極めぬれば、おのれと強き

だろう。

だから、

すべての似せる対象を

所をも知るべし。されば、一切の似

よく似せるならば、

観客の目には危なげがない。

せ事をよく似すれば、よそ目に危う

き所なし。危うからぬは強きなり。

危なげがないのは強い(能)ということである。

だから、

しかれば、ちちとある言葉の響き

ちよつとした言葉の響きでも、

「靡く」

「臥す」

「返る」

「寄る」

にも、「靡き」「臥す」「返る」「寄る」

などという言葉は、

柔らかであるので、

などといふ言葉は、柔らかなれば、

自然と趣深い所作になるようである。

「落ちる」

おのづから余情になる様なり。「落つ

「崩れる」

「破れる」

「転ぶ」

など」と

る」「崩るる」「破るる」「転ぶ」など

言うのは、

強い響きなので、

所作も強くなるだろう。

申すは、強き響きなれば、振りも強

かるべし。

それにしても、

強いつか優美とか言うものは、

さるほどに、強き・幽玄と申すは、

(似せる対象とは)別にあるものではなく、

ただ物まねの正確なる(正確

別にあるものにあらず、ただ物まね

弱い、荒いは物まねにはずれる所(正確でない所・正確になさ

になされる)所、

の直なる所、弱き・荒きは物まねに

れない所)と知るべき(理解すべき)である。

はづるる所と知るべし。

この(言葉の響きと所作の関係)配慮によって、

作者も、

冒頭

この宛てがひを以て、作者も、発

の文句、

一声と和歌などに、

まねる人物に依じて、

端の句、一声・和歌などに、人体の

いかにも優美で趣深い所作とその手がかりとなる

物まねによりて、いかにも幽玄なる

言葉を求める（が欲しい）所に、

余情・便りを求むる所に、荒き言葉

荒い言葉を書き入れ、

を書き入れ、思ひの外にいりほがな

思いの外に趣向を凝らし過ぎた（難しい・意味のわからない）

梵語・漢字音などを書き載せるのは、

る梵語・漢音などを載せたらんは、

作者の間違いである。

ぎつと（必ず）、

その言葉通りに所作をす

作者の僻事なり。定めて、言葉のま

れば、

（優美な）

人体（姿）に似合わない所があるだろう

まに風情をせば、人体に似合はぬ所

（生じるだろう）。

ただし、

優秀な役者は、

この

あるべし。ただし、堪能の人は、こ

（言葉と人体の）相違点を心得て（に気づいて）、

一風変わった（意外な）工夫で、

の違ひ目を心得て、興がる故実にて、

さしざわりなく滑らかにするであろう。（目立たぬように演じるだろう。）

それは役者

なだらかなる様にしなすべし。それ

の手柄である。

（しかし）作者の間違ひは（明らかで）逃れ

は為手の高名なり。作者の僻事は逃

ようがない。

また、

作者は（その点を）心得て書いているけれども、

るべからず。また、作者は心得て書

もし役者に（同じ様な）心得（心づかい）がないに至っては、

けども、もし為手の心なからんに至

まったく論外であろう。

これについては

りては、沙汰の外なるべし。これは

以上述べた如くである。

かくのごとし。

また、

能によつては、

それほど細かく言葉と意味にこだわら

また、能によりて、さして細かに

ないで、

大まかに演じるべき能がある。

言葉・義理にかからで、大様にすべ

き能あるべし。さ様の能をば、直に素直に舞い

誦い、

身振り手振りもすらすらとなだらかにするべきである。

舞ひ誦ひ、振りをもするするとなだ

この様な能をまた細かに演じるのは、

らかにすべし。か様なる能をまた細

下手の芸である。

これもまた、

かにするは、下手の態なり。これま

能が後退する所(原因)であるとするべきである。

だから、

た、能の下がる所と知るべし。しか

よい言葉や優美な所作を求めるのも(欲しいのも)、

れば、よき言葉・余情を求むるも、

凝った意味(複雑な内容) や山場(急所) がなくてはならない能の場合の事である。

義理・詰め所のなくてはかなはぬ能

素直な能には、

に至りての事なり。直なる能には、

たとえ優美な人体で硬い言葉を(使つて)誦つても、

たとひ幽玄の人体にて硬き言葉を誦

誦の趣が確かであれば、

ふとも、音曲のかかりだに確やかな

これは、(それで)よいだろう。

これがすなわち、

らば、これ、よかるべし。これすな

能の本当の様(理想の形)であるとし得る(理解する)べきである。

はち、能の本様と心得べき事なり。

ただ、(返す返すも)くれぐれも、

この様な(以上の)条々を極め尽くして、

ただ、かへすがへす、か様の条々を

その上で大まかに演じるのでなければ、

極め尽くして、さて大様にするなら

能の家訓があつてないようなものだ(家訓が生きてこない)。

では、能の庭訓あるべからず。

一、能の（出来映えの）善し悪しについて、
 一、能の善き・悪しきにつけて、
 役者の芸位（芸の実力）によって、
 相応する（ふさわしい）所を知るべきである。
 為手の位によりて、相応の所を知るべきなり。

文字（言葉）や所作（演技の動作）の面白さを追求しておらず、
 大まかな能で、
 文字・風体を求めずして、大様な

能の、本説ことに正しくて、大きな位の上がる能あるべし。か様な能は、見所さほど細かになき事あり。これには、よき程の上手も似合

はぬ事あり。たとひ、これに相応する程の無上の上手なりとも、また、目利き・大所にてなくば、よく出で

来る事あるべからず。これ、能の位、為手の位、目利き・在所・時分、ことごとく相応せずば、出で来る事は左右なくあるまじきなり。

また、
また、
小さな（小さくまとまった）能の、
たいした典拠ではないけれども（抛り
所とする素材はそれほどでもないが）、
にてはなけれども、
幽玄なるが、
細つそり
優れた、
さしたる本説

とした（感じの）能がある。
これは、
初心の役者にも似合う
としたる能あり。これは、
初心の為

（ふさわしい）ものである。
演じる場所も、
おのず
手にも似合ふものなり。在所も、白

から、
片田舎の神事（祭り）、
夜の庭（夜小庭で演じる能）がふさわしい
然、片辺りの神事、夜などの庭に相

（適している）だろう。
目利きの見物人（観客）も、
能役者も、
応すべし。よき程の見手も、能の為

手も、これに迷ひて、自然、田舎・
これに迷って（錯覚して）、
たまたま、
田舎や、
小所の庭にて面白ければ、その心慣

（同じつもりで）、
堂々たる晴れがましい大舞台や、
貴人
らひにて、押し出だしたる大所、貴

人の御前などにて、あるいは鼻眞興
思いのほかに能の出来が悪ければ、
あるいはひいきの役者を応援するための演能
で、

行して、思ひの外に能悪ければ、為
役者の名声に傷をつけ、
（鼻眞興行を主催した）当人も面目を失う事
手にも名を折らせ、我も面目なき事

があるものだ。
あるものなり。

だから、
このように能の種類と演じる場所を限定せずに、
しかれば、か様なる品々・所々を

限らず、
（どんな種類の能、演じる場所であっても）優劣なく演じられる役者でなくては、
甲乙なからんほどの為手な

投稿サイト

無上の（この上ない、最上の）花を極めた上手（な役者）とは言えない。
 らでは、無上の花を極めたる上手と

したがって、

は申すべからず。さるほどに、いか
どんな演能
 なる座敷にも相応するほどの上手に

何の問題もない。

至りては、是非なし。

また、

役者によつては、

上手であるわりには能を知らな

また、為手によりて、上手ほどは

（一方）技能以上に能を知つて

能を知らぬ為手もあり。能よりは能

いる役者もある。

貴人の御前や晴れの大舞台などで、

を知るもあり。貴所・大所などにて、

上手ではあるが能の選択を間違え（その場にふさわしくない能を演じ）、遅れを取るの、

上手なれども能をし違へ、遅々のあ

能を知らないからである。

また、

るは、能を知らぬゆるなり。また、

それほど達者（な役者）でもなく、

演じられる演目の数が少

それほどに達者にもなく、物少々な

ない役者の、

言つてみれば初心者である者が、

晴れ舞台で

る為手の、申さば初心なるが、大庭

人々の賞賛がますます増え（人々からますます賞賛

にても花失せず、諸人の褒美いや増

され）、（芸の出来に）さほどのむらがないのは（安定しているのは）、

しにて、さのみに斑のなからんは、

役者としてよりは（役者としての技能以上に）能を知っているからである。

為手よりは能を知りたるゆるなるべし。

ところで、

この二通りの役者を、

さるほどに、この両様の為手を、と

いろいろと（その優劣を）言うことがある。

りどりに申すことあり。しかれども、

貴人の御前や晴れ舞台などでことごとく能の出来がよいのは（出来のよい能を演じる役者は、

貴所・大庭などにてあまねく能のよ

名声が長く続くであろう。

からんは、名望長久なるべし。さあ

そうだとすると、

上手な達人であるわりには自分の能を知らない

らんにとりては、上手の達人ほどは

（役者）よりは、

少し技能の足らな

我が能を知らざらんよりは、少し足

い役者であっても、

（自分の）能を知っている（役者の）方が、

らぬ為手なりとも、能を知りたらん

能の一座を背負って立つ棟梁（座長）としては勝つていよう（適任であろう）。

は、一座建立の棟梁には勝るべきか。

（自分の）能を知っている役者は、

自分の腕前（技能）の足らな

能を知りたる為手は、我が手柄の

い所を知っているから、

大切（重要）な能に際しては、

足らぬ所をも知るゆゑに、大事の能に、

できない（苦手な）事は差し控え、

得意とする芸風（芸風の

かなはぬ事をば斟酌して、得たる風

芸）ばかりを表に出して（優先して）、

（演能の催しにおいて）全体の組み立て（構成）がよ

体ばかりを先き立てて、仕立よけれ

ければ、観客の賞賛は必ずあるだろう（賞賛を必ず得られるだろう）。

ば、見所の褒美かならずあるべし。

そして、

できない（苦手な）所を、

小舞台（での催し）や片田舎の

さて、かなはぬ所をば、小所・片辺

能で演じ慣れればよいだろう。

このように稽古すれば、

りの能にし慣らふべし。か様に稽古

できない（苦手な）所も、

稽古の年功が重なれば、

すれば、かなはぬ所も、功入れば、

自然にできる時期が来るだろう。

自然自然にかなふ時分あるべし。さるそれで、

最後には、

能に幅と厚みが出て来て（加わり）、

ほどに、終には、能に嵩も出で来、

欠点も落ちて（取れて）、

ますます（役者の）名声も上がり一座も繁盛する時には、

垢も落ちて、いよいよ名望も一座も繁

きつと（必ず）、

年を取るまで花は残るだろう。

昌する時は、定めて、年行くまで花は

これは、

初心の頃から能を知っているからである。

残るべし。これ、初心より能を知るゆ

能を知る心で、

工夫を尽くして見れば、

ゑなり。能を知る心にて、公案を尽く

花の種（芸の魅力を開花させるもの）を知るだろう（がわかるだろう）。

して見ば、花の種を知るべし。

けれども、

この二通りは、

すべての人のそれぞれ

しかれども、この両様は、あまねく

の心でその勝ち負け（優劣）をお決めになるのがよろしかろう。

人の心々にて勝負をば定め給ふべし。

花修は以上である。

花修 已上。

この（花修）の諸条々は、志のある芸人以外には、

此条々、心ざしの芸人より外は、

一目たりとも見る事を許してはならない（見せてはならない）。

世阿弥陀仏

花押あり。

一見をも許すべからず。世阿 花押



花伝第七 別紙口伝



一、この口伝は、

花を知る事である。

まず、

一、この口伝に、花を知る事。まづ、

たとえば、

(植物の) 花の咲くの(咲く有様)を見て、

万事花とたとえ始めた理由を

仮令、花の咲くを見て、万に花と譬
理解すべきである。

へ始めし理をわきまふべし。

そもそも、

(植物の) 花というものは、

あらゆるすべての草木

においても、花といふに、万木千草
四季折々に咲くものであれば、

において、四季折節に咲くものなれ

その(咲く)時を与えられているから珍しい(新鮮に感じる)のであり、

ば、その時を得てめづらしきゆゑに、
(人もそれを)もてはやす(喜ぶ)のである。 申樂も、

人(観客)の心に珍しい

もてあそぶなり。 申樂も、人の心に
と知る(新鮮に感じる) 所が、 すなわち面白いという心である。

めづらしきと知る所、すなはち面白

花と面白さと珍しさ(新鮮さ)と、

き心なり。花と面白きとめづらしき

この三つは同じ心(同じもの)である。

どんな花が散らず

と、これ三つは同じ心なり。いづれ
に残るだろうか(残るといふのか)。

(花は) 散るからこそ、

の花か散らで残るべき。散るゆゑに

咲く頃があつて珍しい(新鮮な)のである。

よりて、咲く頃あればめづらしきな

能も、

一つの事に停滞することがないのを、

まず花と知るべき

り。能も、住する所なきを、まづ花

一つの事に停滞せず、

他の演目に移れば、

と知るべし。住せずして、余の風体

(いつも) 珍しいのである(常に新鮮なのである)。

に移れば、めづらしきなり。

ただし、
ただし、様あり。めづらしきと言

って、

注意すべき事がある。珍しさ（が大切である）と言ったからとい
この世に存在しない芸を演じ出せというわけではない。

へばとて、世になき風体をし出だす
にてはあるべからず。花伝に出だす

所の条々を、

ことごとく稽古し終わって、

所の条々を、ことごとく稽古し終わ

さて申樂をしようという時に、

（稽古により習得した）芸・演目の

りて、さて申樂をせん時に、その物
数を用いるべきに従って（必要に応じて）取り出すべきである（取り出して演じるべきである）。

花と言つても、

あらゆる草木において、

花と申すも、万の草木において、い

四季折々の時節の花の外にどんな珍しい花があるだろうか（いやありはしない）。

づれか四季折節の時の花の外にめづ

（能・申樂も）その如くに（それと同

らしき花のあるべき。そのごとくに、

様に）、習い覚えた数々の芸・演目を極めたならば（習得したならば）、

その

習ひ覚えつる品々を極めぬれば、時

時々（時節）の今の世の流行を心得て（考えて）、

その時々の人（観客）の好みの種類に

折節の当世を心得て、時の人の好み

よつてその芸・演目を取り出すのである。

の品によりてその風体を取り出だす。

これは、時節の花の咲くのを見ているかのようである。

これ、時の花の咲くを見んがごとし。

花と言つても、（それは）去年咲いた花の種から咲いたものである。

能も、

花と申すも、去年咲きし種なり。能

以前見た芸・演目であつても、

数多くの芸・演目

も、もと見し風体なれども、物数を

を極めた（習得した）ならば、その数々の芸・演目を演じ尽くす年月は長い（演じ尽くすには長い年月がかかる）。（だから）久しぶりに見れば、
（同じ芸・演目でも）また珍しい（新鮮な）のである。
 し。久しくて見れば、まためづらし
 きなり。

その上、

人（観客）の好みも色々で、

その上、人の好みも色々にして、
その所々（土地）によって変ってそれ

音曲・振舞・物まね、
話・所作・物まねなど、
 所々に変りて
それぞれなので、

とりどりなれば、いづれの風体をも
どんな芸であれ習得し残してはためである（どんな芸もできなくてはならないのだ）。

だから、

残してはかなふまじきなり。しかれ
数多くの芸・演目を極め尽くしたような役者は、

ば、物数を極め尽くしたらん為手は、
初春の梅から秋の菊の花が咲き終わるまで、

初春の梅より秋の菊の花の咲き果つ
一年中の花の種を持っているようなものである。

るまで、一年中の花の種を持ちたら
どの花であらうと、

んがごとし。いづれの花なりとも、
人（観客）の望み、
その時に応じて、

人の望み、時によりて、
（その花を）取り出せばよいだろう。
 取り出だす
数多くの芸・演目を極めなければ（習得しなければ）、
時によっては花を失う事がある

べし。物数を極めずば、時によりて
たとは、

花を失う事あるべし。たとへば、春
春の花の頃（季節）が過ぎて、
夏草の花を觀賞しよう（愛でよう）とする時分に、

の花の頃過ぎて、夏草の花を賞翫せ

春の花に相当する芸風の演目だけを得意とする役者が、
 んずる時分に、春の花の風体ばかり
 を得たらん為手が、夏草の花はなく
過ぎてしまった(時節後れの)春の花に相当する芸風の演目を持っておらず、
 て、過ぎし春の花をまた持ち出して出るのは、
時節の花に合うだろうか(合うはずはない)。
 たらんは、時の花に合ふべしや。こ
これでわかるだろう。
 れにて知るべし。

要するに、花は、
 見る人の心に珍しい(新鮮さを感じさせる)のが花なの
 だけ、ただ、花は、見る人の心にめずら
だから、

しきが花なり。しかれば、花伝の花
数多くの技を極めて(習得して)、
 の段に、「物数を極めて、工夫を尽
花のなくなるならぬ所(境地)がわかるだろう。

くして後、花の失せぬ所をば知るべ
と述べたのは、
 し」とあるは、この口伝なり。され
花といつても特別にはないものである。
だから、

ば、花とて別にはなきものなり。物
数多くの芸と演目を習得し尽くして、
 数を尽くして、工夫を得て、めづら
工夫を重ね、
(いかにして) 珍しいという

しき感を心得るが花なり。「花は心、
感じ(新鮮な感覚)を心得る(生み出す) かが花なのである。
「花は心、

種は態」と書けるも、これなり。
種はわざい
と書いたのも、
これである。
 物まねの鬼の段に、「鬼ばかりをよ
物学条々の鬼の段に、
「鬼だけを上手に演じる役者は、

くせん者は、鬼の面白き所をも知る
鬼の面白い所（面白さ）を知らないだろう。」
 と述べた。

まじき」とも申したるなり。物数を
数多くの芸・演目
 鬼を珍しくも演じ出したならば、
 を演じ尽くして、

尽くして、鬼をめづらしくし出だし
珍しい所が花であるはずなので、

たらんは、めづらしき所花なるべき
面白いだらう。
 他の芸はなくて（他に演じられ

ほどに、面白かるべし。余の風体は
「鬼だけを演じる上手（鬼だけが得意な役者）」と（観客が）思うならば、
 る芸がなくて、

なくて、「鬼ばかりをする上手」と
「よく（うまく）演じている」と見えても、

思はば、「よくしたり」とは見ゆるる
珍しさは感じられないから、

とも、めづらしき心あるまじければ、
観客の見る所に花があるはずもない（面白さを感じられるわけがない）。
 「巖（険しい大岩）に花が

見所に花はあるべからず。「巖に花の
咲いているような（恐ろしさと美しさが同居したような）ものだ」と述べたのも、
 鬼を

咲かんがごとし」と申したるも、鬼
（鬼の物まねを）、強く、
 肝をつぶすように演じなければ、

をば、強く、恐ろしく、肝を消す様
少しも鬼の趣はないからである（少しも鬼らしくないからである）。

にするならでは、およその風体なし。
これが巖（険しい大岩）である。
 （巖に咲く）花というのは、
 （鬼以外の）他の芸を残さ

これ巖なり。花といふは、余の風体
幽玄至極（優美さの極まった）上手（な役者）であると
 ず演じ尽くして、

を残さずして、幽玄至極の上手と人
人（観客）が思い込んでいる所に、
 意外にも鬼を演じると、

の思ひ慣れたる所に、思ひの外に鬼

珍しく見える所（新鮮に感じる所）、

をすれば、めづらしく見ゆるる所、

これが花なのである。

ならば、

鬼ばかりを演じる役者は、

これ花なり。しかれば、鬼ばかりを

巖（険しい大岩）

ばかりで、

せんずる為手は、巖ばかりにて、花

花はあるはずがない。

はあるべからず。

一、 具体的な（演技に関する）口伝を話そう、

音曲・

一、 細かなる口伝に云はく、音曲・

舞・

はたらき・

振り・

風情（所作）

これらもまた同じ

舞・ はたらき・ 振り・ 風情、これま

心（前条と同じ心得）である。

これは、

いつもの所作や語であるので、

た同じ心なり。これは、いつもの風

「またいつも通りであろう（いつも通りの演技であ

情・音曲なれば、「さやうにぞあらん

ろう）」と、

人の思い込んでいる所を、

ずらん」と、人の思ひ慣れたる所を、

むやみに普段のやり方に固執せず（型通りにやらず）、

心の奥底で、

同じ振りで

さのみに住せずして、心根に、同じ

はあるが、

以前よりは軽々と演じるように芸を工夫し、

振りながら、もとよりは軽々と風体

いつもの話ではあるが、

をたしなみ、いつもの音曲なれども、

なおいつそう工夫をこらして、

節回しを色取り（美しく飾り）、

なほ故実をめぐらして、曲を色取り、

声色（声調）を工夫して、

自分の心にも（心の中で）

「今ほど

声色をたしなみて、我が心にも「今

一心にやるべき事はない」と、

大切にこの演技をすれば、

ほどに執する事なし」と、大事にし

見物人（観客）から、

「いつもより

てこの態をすれば、見聞く人、「常よ

なおいつそう面白い」などと、

批評に合う（好評を博す）事が

りもなほ面白き」など、批判に合ふ

ある。

これは、

見物人にとっては、

ことあり。これは、見聞く人のため、

珍しいと感じる心ではあるまいか（新鮮に感じられたからではあるまいか）。

めずらしき心にあらずや。

したがって、

同じ謡や所作をして、

しかれば、同じ音曲・風情をする

上手（な役者）がしたのは、

格別（特別）に面白いだ

とも、上手のしたらんは、別に面白

ろう。

下手（な役者）は、

以前から習い覚えた音符通りにやるだけな

かるべし。下手は、もとより習ひ覚

ので、

珍しいという思いはない

えつる節博士の分なれば、めづらし

（新鮮さは感じられない）。

上手（な役者）と言うのは、

同じ節回しても、

き思ひなし。上手と申すは、同じ節

曲を心得ている。

がかりなれども、曲を心得たり。曲

曲と言うのは節の上に咲く花である。

同じ上手（な役者）、

といふは節の上の花なり。同じ上手、

同じ花（同じ程度の花）を持つ役者の中でも、

この上なく研究工夫を極めたような役者は、

同じ花の内にてても、無上の公案を極

なお上の勝つ花を知っているだろう。

めたらんは、なほ勝つ花を知るべし。

およそ、

謡においても、

節は定まった基本の型であり、

およそ、音曲にも、節は定まれる形

曲は上手のもの（上手だけがなし得るもの）である。

舞においても、

木、曲は上手のものなり。舞にも、

個々の型は師から習った基本の型であり、

その舞の型から生まれる風情は上手のもの（上手

手は習へる形木、品かかりは上手の

だけがなし得るもの）である。

ものなり。

物まねに、

一、物まねに、似せぬ位あるべし。

物まね（の興義）を極めて、

似せないという芸位（芸の境地）がある。その似せる対象物に真実（本当に）成りきってしま

物まねを極めて、その物にまことに

えば、

（もはやそこには）似せようと思う心はない。

成り入りぬれば、似せんと思ふ心な

そうすると、

面白さはかりを心がければ、

し。さるほどに、面白き所ばかりを

どうして花がない事があるうか（咲かない事があるうか）。

たしなめば、なか花なかるべき。

たとえば、

老人の物まねならば、

物まね

たとへば、老人の物まねならば、得

の興義を極めた上手（な役者）の心は、

ただ、

素人の老人が

たらん上手の心には、ただ、素人の

仮装行列などに着飾って舞い踊っているようなものである。

老人が風流延年などに身を飾りて

もともと自分自身が年寄りならば、

舞ひ奏でんがごとし。もとより己が

年寄りに似せようと思う心はあるうはずがない。

身が年寄ならば、年寄に似せんと思

ただその時（風流延年）の物まねの

ふ心はあるべからず。ただその時の

人物（仮装の人物）になりきることだけを心がけるであらう。

物まねの人体ばかりをこそたしなむ

べけれ。

また、

老人の、

花があつて（しかも）年寄りと見える口伝と言う

また、老人の、花はありて年寄と

のは、

まず、

決して、

見ゆるる口伝といふは、まづ、善悪、

老人らしい所作を心がけてはならない。

老じたる風情をば心にかけてまじきな

そもそも、

舞とはたらきと言うものは、

り。そもそも、舞・はたらきと申すは、

すべてに、

足を踏み、

万に、楽の拍子に合はせて、足を踏み、

手を指したり引いたりし、

振りと所作を拍子に当ててするものである。

手を指し引き、振り・風情を拍子に

年寄りになると、

当ててするものなり。年寄りぬれば、

その拍子の当て所が、

太鼓・謡・

鼓の頭より

その拍子の当て所、太鼓・歌・鼓の

は、

少し遅く足を踏み、

頭よりは、ちちと遅く足を踏み、手

手を指したり引いたりし、

おおよそ（大体）の振りと所作をも、

をも指し引き、およその振り・風情

拍子に少し後れるようにあるものだ。

をも、拍子に少し後れるやうにある

この心得が、

何よりも年寄りの物まねの基本である。

ものなり。この故実、何よりも年寄

この（拍子に後れるという）配慮だけを心に持つて、

の形木なり。この宛てがひばかりを

その外は、

ただ世間並みに、

心中に持ちて、その外をば、ただ世

でぎるだけ花やかに演じるべきである。

の常に、いかにもいかにも花やかに

まず、

大体において、

年寄りの心には（年寄りは心では）、

すべし。まづ、仮令も、年寄の心には、

何事も若く（若々しく）したがるものである。

何事をも若くしたがるものなり。

けれども、
さりながら、力なく、五体も重く、
耳も遅ければ、心は行けども振舞の

力はなく（力が出ず）、体も重く、
心は行けども振舞（動き）が思い通りにならない。

かなはぬなり。この理を知る事、ま

真（本当）の物まねである。

演技は、

年寄りの望むように、

ことの物まねなり。態をば、年寄の

若々しい所作（振舞・動作）をすればよい。

望みのごとく、若き風情をすべし。

これは、

年寄りの若い事（若さ）を羨む心や所作（振舞・動作）をまねることではあるまいか。

これ、年寄の若き事を羨める心・風

年寄りは、

情を学ぶにてはなしや。年寄は、い

いかに若い振舞をしても（若く振舞っても）、

この拍子に後れる事（後れると

かに若振舞をすれども、この拍子に

いう事実）は、

どうしようもなく思い通りにならない道理（事実）である。

後るる事は、力なくかなはぬ理なり。

年寄りの若い振舞は、

珍しさの道理である。

年寄の若振舞、めづらしき理なり。

（それは）老木に花が咲くようなものである。

老木に花の咲かんがごとし。

一、能において十体（すべて）を会得すべき事。

十体（すべて）を

会得した役者は、

一、能に十体を得べき事。十体を

同じ事を一回り一回りづつしても、

得たらん為手は、同じ事を一廻り一

（十体を会得していない役者と比べると）その

廻りづつするとも、その一通りの間

一回りの期間が長いはずだから、

（観客は）珍しく（新鮮に）感じるだろう。

久しかるべければ、めづらしかるべ

十体（すべて）を会得した人（役者）は、

その中で（演目ごとに）

し。十体を得たらん人は、その内の

様々な（いろいろと）工夫をめぐらせば、

百種類の演技にも行き渡るであろう（演技が

故実・工夫にては、百色にもわたる

可能であろう）。（そのためには）まず、五年・三年（数年）の内に、

べし。まづ、五年・三年の内に、一

一遍（一回）づつくらい、

新鮮に演じ替える（演出を替える）ような配慮（心配り）を持つべき

遍づつも、めづらしくし替ふるやう

である。

ならんずる宛てがひを持つべし。こ

これは、（効果の）大きい方法である。

また、

れは、大きな安立なり。または、

一年の内の、四季折々をも心にかけるべきである。

一年の内、四季折節をも心にかくべ

また、数日に渡る演能においては、

一日の中（

し。また、日を重ねたる申樂、一日

における演目の選択）は言うに及ばず、

様々な種類の演目を色どって（花やか

の内は申すに及ばず、風体の品々を

に）演じるべきである。

この様に、

根本的な事から初めて、

色取るべし。か様に、大綱より初め

ちよつとした事にまで、

自然に（当然のごとくに）

て、ちちとある事までも、自然自然に

気をつけられ、
心にかくれば、一期、花は失せまじ

きなり。

また言う（付言すると）、

十体（すべて）を知るよりは、

また云はく、十体を知らんよりは、
年々去来の花を忘れてはならない。

年々去来の花を忘るべからず。年々
年々去来の花とは、
たとえば、

十体とは物まねの様々な

去来の花とは、たとへば、十体とは
（これに対して）年々去来とは、

物まねの品々なり。年々去来とは、
幼かつた時の容姿、

初心時代の技、

幼なかりし時のよそほひ、初心の時
腕も盛りの壮年期の演技、

年を取ってからの芸風、

分の態、手盛りの振舞、年寄りての
（この年代ごとの、

自然と身についた（年代ごとの）

風体、この時分時分の、おのれと身
芸風を、

みな現在の芸に一度に（全部）持つ事である。

にありし風体を、みな当芸に一度に
ある時は稚児や若者の能かと思われ、

ある時は能かと思われ、

持つ事なり。ある時は児・若族の能
ある時は盛りの年（壮年期）の役者と思われ、

ある時は盛りの年（壮年期）の役者と思われ、

かと思え、ある時は年盛りの為手か
また（ある時は）、

いかにも年功を積み重ねて、

と覚え、または、いかほども臈たけ
修練（稽古）を積んだ様に見えて、

修練（稽古）を積んだ様に見えて、

同じ本人（役者）

て、功入りたる様に見えて、同じ主
とは見えぬ様に能を演じるべきである。

これがすなわち、

とも見えぬ様に能をすべし。これす

幼少の時から老後までの芸を、

なはち、幼少の時より老後までの芸

一度に（同時に）持つという事である。

だから、

を、一度に持つ理なり。さるほどに、

「年々に去り来る花」と言うのである。

「年々去り来る花」とは言へり。

ただし、

この芸位（芸のレベル・実力）に到達した役者は、

ただし、この位に至れる為手、上

昔も今も見た事も聞いた事もない。

亡父（観阿弥）

代・末代に見も聞きも及ばず。亡父

の若い盛りの能こそ、

年功を積んだ（田熟した）芸風が特に得意で

の若盛りの能こそ、臆たけたる風体

あった（優れていた）などと聞いている。

ことに得たりけるなど聞き及びしか。

（亡父の）四十歳過ぎの頃より（の芸）は、

（自分も）見慣れているので、

四十有余の時分よりは、見慣れし事

疑いはない。

自然居士の物まね（演技）で、

なれば、疑ひなし。自然居士の物ま

高座の上での振舞（身のこなし）を、

当時の人が、

ねに、高座の上にての振舞を、時の

「十六七歳の少年の姿に見えた」

などと

人、「十六七の人体に見えし」なんて

うわさしたものである。

確かに人も言い、

沙汰ありしなり。これは、まさしく

自分自身も見たことであるから、

人も申し、身にも見たりし事なれば、

（亡父は）この芸位（芸のレベル・実力）にふさわしい達人かと思われたのである。

この位に相応したりし達者かと覚え

この様に、

若い頃には老後に身につくはずの年々去来の芸を会得

しなり。か様に、若き時分には行く末

し(身につけ)、
 の年々去来の風体を得、年寄りては
年を取ってからは過去(若い頃)の芸を身に残す役者は、

過ぎし方の風体を身に残す為手、二
(亡父以外には)二人と、見た事も聞いた事もない。

人とも、見も聞きも及ばざりしなり。

だから(それゆえに)、初心の頃より以後の芸能の様々な種類を忘れずに、

されば、初心よりのこのかたの芸

その時々が必要に応じてそれを

能の品々を忘れずして、その時々・

取り出すべきである(取り出して演じるべきである)。

用々に従つて取り出だすべし。若く

年寄りの芸、

年を取ってからは若い盛りの芸を残して演じる事は、

ては年寄の風体、年寄りては盛りの

(それこそが芸の)珍しき(新鮮さ、面白さ)ではあるまいか。

風体を残す事、めづらしきにあらず

だから(ならば)、

芸能の位が上がれば、

や。しかれば、芸能の位上がれば、

過去の芸を次々と捨て去り忘れる事は、

過ぎし風体をし捨てし捨て忘るる事、

ただもう花の種を失うことであらう。

ひたすら花の種を失ふなるべし。そ
その時々には咲いている花のままに、

種がなければ、

の時々でありし花のままにて、種な

手で折られた枝の花のようなものである(花は再び咲かない)。

ければ、手折れる枝の花のごとし。

種があれば、

年々その時々のようにして花に巡り会わない事があるうか(花が

種あらば、年々時々々の頃になどかか

咲かない事があるうか)。

ただ返す返す(くれぐれも)、

初心時代の

はざらん。ただかへすがへす、初心

芸を忘れてはならない。

を忘るべからず。されば、常の批判常によく耳にする批評

にも、若い役者を、

にも、若き為手をば、「早く上がりた

「年功が入っている」

などと褒め、

年寄りの役者を、

る」「功入りたる」など褒め、年寄り

「若やいでいる（若々しい）」などと批評するのである。

たるをば、「若やぎたる」など批判す

これ（この批評）は、珍しさの道理にかなっていないだろうか。

るなり。これ、めづらしき理ならずや。

十体の中を色取れば（すべてを工夫して変化させれば）、

百種類にもなるだろう。

十体の内を色取らば、百色にもなる

その上に、

べし。その上に、年々去来の品々を

現在の芸に持っているならば、

年々去来（年代ごと）の様々な種類の芸をわが身の

一身当芸に持ちたらんは、いかほど

の花であらうか。

の花ぞや。

一、能においては、万事に心配りを持つべき事。

一、能に、万用心を持つべき事。

たとえば、

怒り狂う演技(物まね)をする時は、

柔らかな心

仮令、怒れる風体にせん時は、柔か
を忘れてはならない。これは、どんなに

なる心を忘るべからず。これ、いか
怒つたとしても、(芸が) 荒くならないための手段である。

に怒るとも、荒かるまじき手立なり。
怒つた(演技・物まね)に柔らかな心を持つ事は、珍しきの

怒れるに柔かなる心を持つ事、めづ
(生まれる) 道理である。また、優美な物まねに、

らしき理なり。また、幽玄の物まね
強^い心を持つ道理を忘れてはならない。これは、

に、強き理を忘るべからず。これ、
一切、舞・はたらき・物まねなど、あらゆる

ゆる事に住せぬ理なり。
また、身を使う(動かす)中にも心づかいが必要である。

また、身をつかふ内にも心根ある
べし。身を強く動かす時は、足踏を
むべきである。足を強く踏む時は、

盗むべし。足を強く踏む時は、身を
ば静かに持つべし。これは筆に見え
がたし。相対しての口伝なり。これは

は花習の題目に詳しく見えたり。
花習の題目で詳しく述べている。直接相対しての口伝である。

は花習の題目に詳しく見えたり。
花習の題目で詳しく述べている。

は花習の題目に詳しく見えたり。
花習の題目で詳しく述べている。

は花習の題目に詳しく見えたり。
花習の題目で詳しく述べている。

は花習の題目に詳しく見えたり。
花習の題目で詳しく述べている。

一、秘密にする（事が）花を（であると）知る事。

秘密にすれば花であり、

一、秘する花を知る事。秘すれば

秘密にしなければ花ではないのである。

花なり、秘せずば花なるべからずと

この分目を知る事が、

大切な花である。

なり。この分目を知る事、肝要の花

そもそも、

あらゆるすべての事、

諸道諸芸において、

なり。そもそも、一切の事、諸道芸

その家々にある秘事と言うのは、

において、その家々に秘事と申すは、
秘密にする事によって大きな効用があるからである。

秘するによりて大用あるがゆゑなり。
したがって、

秘事という事（の中身・内容）を明らかにすれば、

しかれば、秘事といふ事をあらはせば、
そうたいした事ではないものである。

これを、

させる事にてもなきものなり。これ

「そうたいした事ではないな」

と言う人は、

を、「させる事にてもなし」と言ふ人

また秘事と言う事の大きな効用を知らないからである。

は、いまだ秘事といふ事の大用知ら

ぬがゆゑなり。

まず、この花の口伝において、

まづ、この花の口伝におきても、

「ただ珍しさが花なのだ」

とすべての人が知っている

「ただめづらしきが花ぞ」と皆人知る

ならば、

「きつと珍しい事があるだろう（きつと珍しい事をするだろう）」

ならば、「さてはめづらしき事ある

と期待している見物衆（観客）の前では、

べし」と思ひ設けたらん見物衆の前

にては、たとえ珍しい事をしても（演じても）、

（期待をしている）見る側（観客）の心に珍しさは感じられないだろう。

とも、見手の心にもめづらしき感はあるべからず。見る人のため花ぞとも

見る人にとって花だとも知らなくてこそ、役者の花になるのである。

知らでこそ、為手の花にはなるべ

だから、

見る人（観客）は、

ただ思いのほかに（意外に）

れ。されば、見る人は、ただ思ひの

面白い上手（な役者）とだけ見て、

これは花だ

外に面白き上手とばかり見て、これ

役者の花である。

は花ぞとも知らぬが、為手の花なり。

人の心に思ひもよらぬ感動を催す（わき起こす）手段（やり方）、

さるほどに、人の心に思ひも寄らぬ

これが花なのだ。

感を催す手立、これ花なり。

たとえば、

兵法（軍学）の戦術にも、

たとへば、弓矢の道の手立にも、

名将の工夫・計略によって、

思ひもよらない方法で、

名将の案・計らひにて、思いの外な

強敵にも勝つ事がある。

る手立てにて、強敵にも勝つ事あり。

これは、負けた方からすれば、

珍しさの道理（思

これ、負くる方のためには、めづら

いがけない計略）に騙されて破れたということではあるまいか。

しき理に化かされて破らるるにては

これは、

あらゆるすべての事、

諸道諸芸において、

あらずや。これ、一切の事、諸道芸

勝負に勝つ道理（秘訣）である。

において、勝負に勝つ理なり。か様

この様な手段（方法）も、

事が終わって、

こんな計略だったと知って

の手立も、事落居して、かかる計り

しまえば、

その後は簡単だけれども（簡単に対処できる

事よと知りぬれば、その後はたやす

けれども、

（その計略を）まだ知らないでいるから負けるのである。

けれども、いまだ知らざりつるゆる

だから、

秘事として、

に負くるなり。さるほどに、秘事と

一つを自分の家に残して（隠して）おくのである。

て、一つをば我が家に残すなり。

ここまでの事から（次の事が）理解できるだろう。

たとへ（秘事を）表にあらわさ

ここを以て知るべし。たとへあら

なくとも、

このような秘事を知っている人だとも、

はさずとも、かかる秘事を知れる人

他人に知られてはならないのである。

よとも、人には知られまじきなり。

（もし）人に（秘事を知っているという）心を知られたならば、

敵方は油断せず用心するから、

人に心を知られぬれば、敵人油断せ

かえって敵に（こちらに対する）心構

ずして用心を持てば、かへつて敵に

えを作らせる結果となる。

敵方が用心をしない時は、

心をつくる相なり。敵方用心をせぬ

こちらが勝つ事は、

なお容易であらう。

時は、こなたの勝つ事、なほたやす

他人を油断させておいて勝つ事（勝利）を得るのは、

かるべし。人に油断をさせて勝つ事

珍しさの道理の大きな効用ではないだろうか。

を得るは、めづらしき理の大用なる

にてはあらずや。さるほどに、我が
わが家（観世家）の秘事として、
家の秘事とて、人に知らせぬ事を、
（内容だけでなくその存在すらも）人に知らせぬ事を、
（能役者としての）生涯（人生）を支配する（ほど大切な）花とする。 秘事にすれば花であり、
生涯の主になる花とす。秘すれば花、
秘密にしなければ花ではないのである。
秘せねば花なるべからず。

一、因果の花を知る事。

一、因果の花を知る事。

(これはこの別紙口伝の)
極めなる

極意である。

すべてはみな因果(原因と結果)の関係にある。

初心時代から身につけた

べし。一切みな因果なり。

初心より

芸能の数々は因(原因)である。

能を極め(能の奥義を極め)、

の芸能の数々は因なり。能を極め、

名声を得る事は果(結果)である。

だから、

稽古

名を得る事は果なり。しかれば、稽

する所の因が疎かであれば(原因である稽古が疎かであれば)、

結果を果たす(得る)事

古する所の因疎かなれば、果を果た

は難しい。

これをよくよく理解すべきである。

す事も難し。これをよくよく知るべし。

また、

頃合い(時の運)をも恐れ慎まなければならぬ。

去年(花の)盛り

また、時分にも恐るべし。去年盛

であつたなら、

今年は花は咲かないという事を知るべきである。

りあらば、今年花なかるべき事を

短い時間の中にも、

男時(好調の時)・女時(不調

知るべし。時の間にも、男時・女時

の時があるものだ。

どのようにしても、

能に

とてあるべし。いかにすれども、能

も、

よい時があれば、

必ず悪い事(時)がまたあるものだ。

にも、よき時あれば、かならず悪き

これは、

人の力ではどうにもできない

事またあるべし。これ、力なき因果

因果である。

これを心得て(理解して)、

それほど大切でない時の演能(能の催

なり。これを心得て、さのみ大事に

し)では、

立合勝負に、

なからん時の申樂には、立合勝負に、

それほど(あまり)勝利に対する執着心を起こさず、

苦勞せず、

それほどに我意執を起こさず、骨をも

(たとえ) 立合勝負に負けても気にせず、

折らで、勝負に負くるとも心にか

技を出し切らずに温存して、

控え目に控え目に能を演じれば、

ず、手を貯ひて、少な少なと能をす

見物衆(観客)も、

「これはどうした事であろうか」

れば、見物衆も「これはいか様なる

と興ざめ(がっかり)している所に、

大事な(晴れがましい)

ぞ」と思ひ醒めたる所に、大事の申

演能の日に、

手段を変えて、

得意の能で、

楽の日、手立を変へて、得手の能を

技の精髓を出して(演技すれば)、

これまた、

して、せいいいを出だせば、これま

見る人(観客)には予想外である(意外である)という心が出て来るので、

た、見る人の思ひの外なる心出で来

大切な立合(競演)(における)、

大事な勝負に、

れば、肝要の立合、大事の勝負に、

必ず勝つのである。

これは、

珍しさの大きな効用で

定めて勝つ事あり。これ、めづらし

ある。

ここ数日来悪かった事が因(原因)となりその果(結果)として、

き大用なり。この程悪かりつる因果

またよい結果となるのである。

に、またよきなり。

おおよそ(だいたい)、

三日間で三回の演能(公演)がある時は、

おおよそ、三日に三庭の申楽あらん

最初の一日などは、

技を出し切ら

時は、指寄りの一日などは、手を

温存して相手役にあわせて(演じ)、

三日の内ですべて大切な日であると思わ

貯ひてあひしらひて、三日の内ここ

れる時に、

よい能の

とに折角の日と覚しからん時、よき

得意に向いている（得意な方面の）ものを、

能の得手に向きたらんを、眼をむき出してがむしや眼精を出

らに（精魂傾けて）演じるべきである。

一日の中で、

だしてすべし。一日の内にてても、立競演

などで、

偶然にも（もしも）女時（調子の悪い時）に遭遇したならば、

合なんどに、自然女時に取り合ひた

初めは技を出し切らずに温存して、

敵の男時（調子の

らば、初めをば手を貯ひて、敵の男

よい時）が、女時（調子の悪い時）に下がる頃に、

よい能を、

時、女時に下がる時分、よき能を、

畳みかけて（テンポを早めて）演じるべきである。

その頃が、

またこちら

揉み寄せてすべし。その時分、また

が男時（調子のよい時）に替わる頃である。

ここで能が

こなたの男時に返る時分なり。ここ

よく出来れば、

（次は）その日の最高の

にて能よく出で来ぬれば、その日の

能を演じるべきである。

第一をすべし。

この男時・女時とは、

すべての勝負には、

この男時・女時とは、一切の勝負

必ず一方が調子（勢い）づいて、

形勢がよくなる頃がある。

に、定めて一方色めきて、よき時分

これを男時と心得る（理解する）べきである。

になる事あり。これを男時と心得べ

競演の番数が多く時間が長引けば、

（男時は）こちら

し。勝負の物数久しければ、両方へ

と相手方を行ったり来たりするものである。

ある書物に次の様に書か

移り替り移り替りすべし。ある物に

れている、

「勝負神と言って、

勝つ神と負ける神が、

云はく、「勝負神とて、勝つ神・負く

勝負の場を、

必ず守って（成り行きを見守って）

る神、勝負の座敷を、定めて守らせ

おられるものだ」

（これは）兵法（軍学）でも大切な秘密とされている事である。

給ふべし」。弓矢の道に宗と秘する

敵方の能が素晴らしい出来であれば、

事なり。敵方の申楽よく出で来たら

勝つ神はあちら（敵方）にいらつしやると心得て（理解して）、

ば、勝神あなたにましますと心得て、

まず恐れ慎むべきである。

これ（勝負神）は、短い時間の因果の

まづ恐れをなすべし。これ、時の間

（短い時間の運命を司る）二神でいらつしやるので、

（敵味方の）

の因果の二神にてましますば、両方

両方へ行ったり来たりして、

また我が方の頃（我が方に勝

へ移り替り移り替りて、また我が方

つ神が来る頃）になると思う時に、

自信のある能を演

の時分になると思はん時に、頼みた

じるべきである。

これがすなわち、

勝負を競う

る能をすべし。これすなはち、座敷

場における因果である。

くれぐれも、

の内の因果なり。かへすがへす、疎

疎かに考えてはならない。

信ずれば必ず徳があるであろう。

かに思ふべからず。信あれば徳ある

べし。

一、 いったい、
因果とて、因果とて（として）、よい時と悪い時の
あるのも、

一、 悪しき時のあるも、工夫を尽くして（よくよく）考えて見ると、公案を尽くして

見るに、ただ、めづらしき・めづら

同じ上手（な役者）で、

しからぬの二つなり。同じ上手にて、
昨日今日と（続けて）見ても、

同じ能を、昨日・今日見れども、面

（昨日）面白いと見えていた事が、

白やと見えつる事の、今（今日）はまた面白くない時のある今また面白く

昨日面白かった心が慣れてしまい（印象が

もなき時のあるは、昨日面白かりつ
残つていて、今日は珍しくないで（新鮮に感じないので、

る心慣らひ、今日はめづらしからぬ
悪いと見えるのである。その後、

によりて、悪しと見るなり。その後、
またよい時があるのは、以前は悪かつたのにと思ふ心が、

またよき時のあるは、先に悪かりつ
また珍しさ（新鮮さ）に戻つて、

るものをもと思ふ心、まためづらしき

面白くなるのである。

に返りて、面白くなるなり。

だから、

この（能の）道を極め尽くして見れば、

されば、この道を極め終りて見れ
花といつても特別にはないのである。

（能の）

ば、花とて別にはなきものなり。奥

奥義を極めて、

すべてに（渡つて）珍しきの生まれる道理を自分で理解する

義を極めて、万にめづらしき理を我れ

のでなければ、

花はないのである（存在しないのである）。

と知るならでは、花はあるべからず。

ある経文に次の様に書かれている。「善と悪に違いはなく、

邪と正は一つである」

経に云はく、「善悪不二、邪正一如」

本来よいかか悪いとか言う事は、

とあり。本来よりよき・悪しきとは、

何を基準に決めるべきであろうか（決められるはずはないのである）。ただ、

その時々で、

何を以て定むべきや。ただ、時によ

役に立つ物をよい物とし、

役に

りて、用足る物をばよき物とし、用

立たないものを悪い物とするのだ。

この（能の）芸の数々も、

足らぬを悪しき物とす。この風体の

今の世の観衆（多くの観客）や（演能の）様々な場所にわたって、

品々も、当世の数人、所々にわたり

その時の広い（多様な）好みによって取り出す芸（取り出して演じる芸）、

て、その時のあまねき好みによりて

これが、役に立つ（観客にとって面白い）

取り出だす風体、これ、用足るため

ための花であらう。

ここでこの芸をもちやせば、

の花なるべし。ここにこの風体をも

あちらではまた別の芸を愛好する。

てあそめば、かしこにまた余の風体

これが、それぞれの人のそれぞれの心の花である。

を賞翫す。これ、人々心々の花なり。

どれを真実の花でしょうか（そんな事は選べない）。

ただ、

いづれをまことにせんや。ただ、時

に應じて用いられ（喜ばれる・役に立つ）のが、花であると理解すべきだ。

に用ゆるを以て、花と知るべし。

一、この別紙の口伝、

能（申樂）において、

一、この別紙の口伝、当芸において、

家（觀世家）の大事（秘事）であり、一代に一人の伝授である。

て、家の大事、一代一人の相伝なり。

たとえ（他に家を継ぐ者がいない）一人っ子であったとしても、

才能のない者には

たとひ一子たりといふとも、無器量

伝えてはならない。

「家（として血統を継承する事）」が、

の者には伝ふべからず。「家、家に

家なのではなく、

（その家に伝わる道を）継承する事を以て家とする。

（その家に生まれた）人が、

あらず、継ぐを以て家とす。人、人

（その家の）人なのではない、

（その家に伝わる道を）知る（極める）事を以てその家の人とする」とも

にあらず、知るを以て人とす」と言

言われている。

これ（別紙口伝の内容）は、あらゆる徳をよく心に悟った最高の花を極める所で

へり。これ、万徳了達の妙花を極む

あるだろう。

る所なるべし。

一、この別紙の口伝の条々は、

先年、

弟の四郎に

一、この別紙の条々、先年、第四

伝授したとはいえ、

元次、

芸能に優れた

郎相伝するといへども、元次、芸能

人物なので、

これをまた伝えるのである。

感人たるによつて、これをまた伝ふ

秘伝とせよ。

る所なり、秘伝々々。

応永二十五年六月一日

世阿弥陀仏

花押あり。

応永廿五年六月一日

世（花押）

電子書籍 風姿花伝

制作・編集：有限会社 DCP

広島市西区横川新町 6-6-1906

(C) 2023 DCP Corporation. All Right Reserved.

● 参考図書・使用した音源と画像の情報